

# 西貝塚

静岡県磐田市教育委員会

1961

# 西貝塚

静岡県磐田市教育委員会

1961

## 凡　　例

1. 本報告書は、昭和33年11月上旬に調査した西貝塚発掘の結果をまとめたものである。
2. われわれは、この西貝塚の発掘・調査が地元研究者による意識的な高まりを通じて共通の問題点として計画されたことを重んじている。われわれ筆者は、単に調査参加者全員の得た成果をふまえてまとめる役目をはたしたにすぎない。
3. 本調査は、教育委員会の主催による郷土館の事業としておこなわれたものであるが、他方、地元有識者の好意的な援助をうけた。調査員一同それに答えるように努力したが、まだ十分な内容をもっているものとは思っていない。この点については、誠に遺憾であると考えており、更に将来を期している。

## 目 次

1. は し が き	平野和男・麻生優	1
2. 西貝塚の位置と調査の経過	平野和男	2
3. トレンチの設定と肩位的観察	市原寿文	8
4. 出土貝類について	加藤芳則	16
5. 出土の脊椎動物遺存体	金子治昌	18
6. 出土遺物の概観		37
A) 土器	市原寿文・麻生優	37
B) 石器、骨角器	市原寿文	55
7. 埋葬人骨		80
A) 人骨の出土状態	麻生優	80
B) 人骨の調査	鈴木尚・佐倉胡・遠藤萬里	82
8. む す び	麻生優	93

## 図 版 目 次

### 第1 西貝塚遺跡遠景

- a. 東海道線に近接して市道より遺跡を望む  
b. 西方冲積地より遺跡を望む

### 第2 トレンチの発掘調査

- a. Aトレンチ全景 b. 5トレンチ全景

### 第3 4トレンチ東壁断面の貝層堆積状態

### 第4 出土遺物 その1

- a. 晩期縄文土器および宮滝新式土器 b. 宮滝新式土器

### 第5 出土遺物 その2

- a. 宮滝新式土器 b. 宮滝古式土器

### 第6 出土遺物 その3

- a. 宮滝古式土器 b. 蛸塚上層式土器および宮滝古式土器

### 第7 出土遺物 その4

- a. 加曾利B式土器・その他 b. 加曾利B式土器

### 第8 出土遺物 その5

- a. 堀之内式土器および前・中期縄文土器 b. 宮滝新式土器

### 第9 出土遺物 その6

- a. 宮滝新式土器 b. 宮滝古式土器

### 第10 出土遺物 その7

- a. 宮滝古式土器 b. 宮滝古式土器

### 第11 出土遺物 その8

- a. 宮滝古式土器 b. 加曾利B式土器

### 第12 出土遺物 その9

- a. 加曾利B式土器 b. 加曾利B式土器

### 第13 出土遺物 その10

- a. 加曾利B式土器 b. 加曾利B式土器

### 第14 出土遺物 その11

- a. 表土層～第8層出土の石器（石鏃・利器） b. 第4層～第8層出土の石器（石鏃・利器）

第15 出土遺物 その12

- a. 表土層～第7層出土の石器（磨石・  
敲石・石錐） b. 第2層～第5層出土の石器（砥石・  
石錐？）

第16 出土遺物 その13

- a. 第7層出土の石器（石錐） b. 第8層出土の石器（石錐）

第17 出土遺物 その14

- a. 表土層～第4層出土の石器（石錐） b. 第1層～第8層出土の石器（石皿・  
凹み石）

第18 出土遺物 その15

- a. 第1層・第6層出土の石器（加工し  
た浮石）第4層出土の骨器（骨斧？） b. 第1層・第7層出土の角器（鹿角斧）

第19 出土遺物 その16

- a. 第1層～第8層出土の骨角器 b. 第5層～第8層出土の骨角器  
表土層～第7層出土の貝輪・貝器

第20 人骨の出土状態

- a. 第1号人骨出土状態（眉葬？） b. 第2号人骨出土状態（伸展葬）

第21 第1号人骨・第2号人骨

- a. 第1号人骨頭骨側面観 b. 第1号人骨頭骨上面観および前頭骨  
破片  
c. 第1号人骨に見られる抜歯の痕跡 d. 第1号人骨四肢骨  
(矢印)  
e. 第2号人骨骨盤および上肢骨 f. 第2号人骨下肢骨

第22 第2号人骨頭骨

## 挿 図 目 次

挿図 第 1	西貝塚およびその附近の貝塚の分布	3
挿図 第 2	遺跡地形図	8
挿図 第 3	発掘区断面図	12~13
挿図 第 4	資料採集位置図	17
挿図 第 5	貝類構成推移図	17
挿図 第 6	晩期縄文土器および宮滻新式土器	40
挿図 第 7	宮滲新式土器およびその他の土器	41
挿図 第 8	宮滲新式土器	42
挿図 第 9	宮滲古式土器	44
挿図 第10	宮滲古式土器	45
挿図 第11	貝塚上層式土器および宮滲古式土器	46
挿図 第12	加曾利B式土器	49
挿図 第13	加曾利B式土器および堀之内式土器	50
挿図 第14	堀之内式土器	51
挿図 第15	前・中期縄文土器	53
挿図 第16	型式別形態集成図	53
挿図 第17	石器実測図	62
挿図 第18	石器実測図	63
挿図 第19	石器実測図	64
挿図 第20	石器実測図	66
挿図 第21	石器実測図	67
挿図 第22	骨・角・貝・牙器実測図	73
挿図 第23	骨・角・貝・牙器実測図	74
挿図 第24	角・斧・尖実測図	75
挿図 第25	人骨出土状態	81

## 1. は し が き

静岡県浜松市観塚遺跡の調査は、遠江における縄文時代後・晩期の状態について、いくつかの問題を提起することになった。その編年的な変遷はもとより、その地域的位置——西日本と東日本と両地域の要素、土着の要素の組合せの分析等——についての問題と生活環境をめぐる具体的な生産形態についての諸問題が派生してきた。このような大きな問題は、単に一つの遺跡の研究だけで十分な解決を与えることは困難であり、むしろ大きく遠江地方における地域研究の問題に還元して研究を推進する必要が生じてきた。ここに至ってわれわれは、磐田市郷土館の事業として、すでに古くから知られていた西貝塚の発掘調査を計画したのである。

西貝塚の調査は、明治28年坪井正五郎博士が人類学雑誌を通じて学界に紹介されてから、林若吉、中根清平、清野謙次、杉原莊介、吉田富夫の諸先駆による発掘調査、出土遺物の研究が行なわれたが、西貝塚を單一な遺跡としてとりあげた詳しい報告にはとぼしかった。そのため早くから知られておりながら、その内容は漠然としてつかみがたい憾があり、前記のような諸問題について具体的な資料を挙げて答えるところが少なかった。このような情勢の中で、土地にあって常に遺物の蒐集保管に努力をはらわれた草池田邦脩、増田恭平、中村智恵雄の諸氏の功績は多としなければならない。

なお今度の発掘は、大きな問題と地域的研究とにわたるために地元研究者の共同研究の形をとったが、ここに報告するわれわれは単なるまとめ役をはたしたにすぎず、とりあえず麻生が発掘調査代表者となつて行なつた。

また観塚遺跡調査以来、われわれを指導して下さつたまはなき後藤守一先生を始めとして、内藤晃先生、長田実先生には深い御理解と御支援を賜わりました。地主・磯部一夫、中村智恵雄、山下昇の諸氏と宿舎を提供して下さつた塚本、後藤、大村公民館長等地元関係各位の御協力と終始この調査の実施について御尽力下さつた磐田市教育委員会ならびに鈴木幸朗氏に深く感謝するものである。

(平野和男・麻生 優)

## 2. 西貝塚の位置と調査の経過

西貝塚は、磐田市の東方約2kmをへだてた磐田市西貝塚地内に存在している。東海道本線が西貝塚部落のはば中央を東西に貫通しており、遺跡は西貝塚部落の西端、東海道本線の南側に位置している。

磐田原台地の南端は大小の侵蝕谷が発達しているが、地形図に示されるように城之崎丘陵をはさんで、東に安久呂、西に今之浦と呼ばれる大きな侵蝕谷が発達している。この西貝塚は、西に安久呂の侵蝕谷を控え、東に小規模な東貝侵蝕谷をようした西貝丘陵が、沖積平野に接する標高5m前後の丘陵の先端部に位置している。

磐田原台地には西貝塚を含めて下記の貝塚が分布している。

貝塚名	所在地	時期
1. 西貝塚	磐田市西貝塚	縄文中期～晩期
2. 東貝塚	磐田市東貝塚	縄文
3. 見性寺貝塚	磐田市一番町	縄文晩期・弥生
4. 石原貝塚	磐田市石原町	縄文後期～晩期
5. 二之宮半僧坊貝塚	磐田市二之宮	弥生後期

これ等の貝塚の分布を地形的に概観すると西貝丘陵の東側に小規模な侵蝕谷をへだてて西貝塚と相対する位置に東貝塚が存在している。見性寺貝塚は、今之浦侵蝕谷の奥深く丘陵の裾に立地している。今之浦の西岸、中泉丘陵の尖端に西貝塚を対にして二之宮半僧坊貝塚が存在している。同じく中泉丘陵の南端中央部に石原貝塚が位置している。

これらの貝塚の存在している地形は、いざれも磐田原台地の末端がゆるい傾斜地面をもって、沖積平野に接する標高約5mの地点に位置しており、磐田地方における貝塚分布に共通した立地条件を示しており、これは西貝塚の先史景観を復元する上に注目に値する事実である。

西貝塚遺跡の附近は、集落地となっているため、遺跡の大半は、農家の敷地内に属しており、現在の地表は、整地され変貌しているが、かなり広範囲に貝層の



地図 第1. 西貝塚およびその附近の貝塚の分布

分布がみられ、調査の結果、三つの貝塚群が近接して一つの大きな貝塚を構成していることが判明した。この貝塚群は西端に位置しているものを第Ⅰ貝塚、東端にあるものを第Ⅱ貝塚、中央のものを第Ⅲ貝塚と仮称しよう。

第Ⅰ貝塚は、台地の西傾斜面、すなわち、安久呂に面して堆積している。本遺跡中、規模の最も大きな貝塚である。

明治22年、東海道本線の敷設工事の際、表土を除いた貝層部を線路を敷くための盛土に採掘されたためすでに貝塚の大半が破壊されている。

また、この工事で残されていた部分を大正6年清野博士が発掘調査され、現存しているのは僅かに貝塚の東限附近が保存されているのに過ぎない。

第Ⅲ貝塚は、第Ⅰ貝塚の約20mほど東に位置し、南北に細長い小規模な堆積を示している。現在この附近は、みかんが植えられた果樹園になっているが、貝層の保存状態は良好である。

第Ⅱ貝塚は第Ⅲ貝塚に接した東南にあり、第Ⅰ貝塚に次いで広い貝層の分布を示している。南北に通ずる道路が貝塚の西端を通り分断されている。ボーリング調査の結果によれば、貝層の分布は浅いが保存状態は良好であると観察される。

第Ⅱ、第Ⅲ貝塚ともに未調査であり、第Ⅰ貝塚との関連性については現段階では明らかになし得ない。

なお、西貝塚の発掘は昭和33年11月2日より11月11日までの10日実施した。

今回の調査は前述のように編年的研究を主目的としたため、貝層の堆積の最も深いと考えられる第Ⅰ貝塚を発掘した。発掘の経過については、発掘日誌によつてふりかえってみよう。

#### 発掘日誌

11月2日 雨後雨

午後2時半頃、遺跡に到着。すぐさま発掘区の設定を行う。トレントは、東西に縦10m、南北に横14mの発掘区を碁盤の目のように縦横に区画し、2平方mをもって一区とした。縦に東方より第1トレントから第5トレントまでとし、横の区画をAからGに分け、これにA5区からG5区までの名称をつける。

最初に貝層の堆積の深い第5トレントから発掘することに決定する。

作業は、表土の除去から始めるが、驟雨がしばしばあってあまりはかどらない。

11月3日 (文化の日) 驟時々雨

本日の作業は、表土層直下の擾乱層の除去より始める。貝層の堆積状態は、南から北にかけて捨てられた状態を示している。貝層を構成する主な貝類はシジミである。

遺物は土器片が少量出土した。

11月4日 晴

本日より平板測量機による地形測量を行う。第5トレントにおける貝層の堆積

は G5 区より E5 区にかけて、最も新しい堆積を示す第 1 層混土貝層があり、E5 区中央部に厚さ約 10cm 前後の第 2 層混貝土層が認められる。D5 区より C5 区にかけては、第 3 層混土貝層があり、C5 区附近においては、炭化物、灰等が散在している。C5 区より B5 区にかけて、第 4 層の混土貝層があり、A5 区においては、擾乱層下にレンズ状に混土貝層が存在し、これを第 5 層とする。新たに、東西に縦 A 列のトレンチを設定する。

遺物は C5 区において、第 3 層より多量の土器が出土したが、幅広く浅い沈線を主文様とする近畿地方の宮滝式土器に属するものである。

11月 5 日 晴

A トレンチの発掘状況は 1 区から 2 区東半には貝層の堆積ではなく、ベースはゆるく西に傾斜している。A4 区附近より、A5 区に続く破碎された混土貝層が認められ、その下層に、A2 区より始まる第 6 層混土層が存在している。

第 5 トレンチは昨日に統いて、各貝層を発掘する。

遺物は C5 区より多量の無文土器、E5 区より G5 区にかけては第 1 層から、条痕文の多用した土器片が出土している。

11月 6 日 晴

本日の作業は、第 5 トレンチの完掘を予定し、各区とも、貝層下の第 7 層に相当する混貝土層から、基盤である第 8 層、黄褐色土層まで発掘する。A トレンチも同様に第 8 層まで発掘を完了する。

遺物は第 7 層 A5 区附近で柏窓式、C5 区附近で堀之内式、E5 区から F5 区にかけては、加曾利 B 式の特徴をもつ土器片がそれぞれ出土している。

A4 区附近からは、大形石錘が多量に出土し、F5 区より骨角製根ぼさみが出士している。

各トレンチ壁面の写真撮影および実測図の作製作業を行う。

11月7日 晴

本日の作業は、午前中第5トレントより土の移動を行う。

午後、第5トレントの東に第4トレントを設定し、盛り土の関係で、B4区よりD4区までの発掘を行う。B4区からD4区中央までの第4層混土貝層には、暗褐色の土および炭化物が2cm前後の厚さでブロック状に散在している。B4区の北側はD4区にのびる第3層混土貝層が、約30cmほどの厚さで存在している。B4区附近は宮流式土器片が出土している。

11月8日 晴

第4トレント、B4区からD4区までの第5層破碎貝層および第6層混土貝層を発掘する。これらの貝層の堆積状態はいずれも、南から北に傾斜している。遺物は第5、第6層ともに少量である。第7層混貝土層より、鹿角製斧、石匙および骨鏃が出土している。

第4トレント E区からG区までの発掘に移る。

11月9日 曇後雨

B4区よりD4区までのトレント東壁面の実測図作製。

E4区からG4区までは、昨日に統いて各貝層の発掘を行う。E4区は第3層が続き、F4区との境目附近では第2層混貝土層が厚く存在し、G5区より第2層中に、第1層混土貝層がレンズ状にのびている。

G4区において、第1層上部より、屈葬された人骨1体が発見された。

雨のため、作業はあまりはかどらない。

11月10日 晴

本日の作業は各区とも、ほぼ完掘した。

G4区の人骨は尖削の上、写真撮影をしてとり上げる。残りの第1層を発掘中ほぼ同位置の第1層下半より、仲展葬の入骨1体が発見され、実測、写真撮影の上、とりあげ作業に移ったが非常に時間がかかり、電燈の照明により作業続行、

午後6時過ぎ完了する。

遺物は土器片が出土した以外に特記すべきものはない。

11月11日 晴

早朝よりトレンチ内の清掃作業、実測図作製にかかる。光線の関係で太陽の直射光線を受ける以前に写真撮影を終る。

8時30分頃朝食、ただちに埋もどし作業にかかる。一部の人は遺物の整理、梱包作業を行う。午後4時頃、すべての作業を終了し、帰路につく。

#### 西貝塚調査参加者名簿

調査員　岡本 勇、麻生 優、市原寿文、平野和男、向坂鋼二、山村 宏  
原秀三郎、飯塚悟朗、嶋 竹秋、山下 晃、後藤雍裕、原川 弘  
島田秀一

協力者　○桑原保子、鈴木良子、永井匡次

○磐田南高校歴史研究クラブ

寺崎茂男、平野吾郎、伊藤泰久、伊藤良彦、鈴木邦夫、鈴木晴彦  
島田芳明、高安敬司、青葉勝弘、大橋恒夫、南谷昌孝

○磐田北高校地理部

永田桂子、山下富子、竹島章子、駒沢康子、寺田文子

○西遠女子学園歴史クラブ

鈴木小英先生外有志

○浜松考古学友の会　柏谷昌吉　岡本友次

○静大教育学部浜松分校歴史研究部有志

(C) 野 和 男)

### 3. トレンチの設定と層位的観察

#### 1. トレンチの設定

第1貝塚の発掘地点をボーリングした結果、南北方向に約30m、東西方向に5~6mの範囲で貝塚が遺存しているのを知ることができた。貝層の遺存する範囲と周辺にわたり2平方mの区画を挿図第2のように設定した。どの区画もA~Gの記号と1~5の数字を組合わせて、表現することができる。



挿図第2. 遺跡地形図

設定した区画は挿図第2の黒色の部分(A1区～A5区およびB4・5区～G4・5区)でL字状に完掘した。発掘地点の現地表面全体が西側の冲積面に向って傾斜しているのを知ったわれわれは、貝層が東から西に向って遺棄されたのではないかということを想定した。また、後に第8層と呼んだ貝層の基盤を形成する黄褐色土層がどのような状況かという2つの点を確認するためにA1～A5の区画を定めた。更にA1～5区に直角の位置にあるB4～G4区、B5～G5区の各区画は貝塚内における貝層の堆積状況を知る目的で設定した。

## 2. 層位的観察

完掘した発掘区画の知見によって貝層の堆積状況をのべてゆきたい。層序番号は(第1層～第8層)上位から発掘順につけたが、堆積の順に従って層序の記述をすることが効果的である。

**第8層(黄褐色土層)** ; 基盤を形成する第8層洪積期の堆積物と考えられる黄褐色土層は、Aトレンチ北壁断面(挿図第3)によって現地表面と同じように西に向って傾斜し、A1区・A2区では間層がなく表土層に接していた。また5トレンチ東壁断面と4トレンチ東壁断面によればD5区・D4区のあたりでは中凹み状になっていた。基盤の表面には径約20cm程の角礫や大きな土器片が散乱していた。土器は黄褐色土層の表面だけでなく、表面下10cm程の深さにまでしばしば入りこんでいた。

出土した土器はいくつかの型式のものがみられ、しかも地点によって土器型式が異っている。このことは第8層が独立する遺物包含層を形成しているものでなくて、第6層～第1層の諸層の末端部をなしていた部分であることを示していると考えられる。また、包含される土器の中最も古いものは縄文前期末および中期初頭のものであった。それらの土器が遺棄された時点に、現状と大差のない先史地形が形成されていたことが想定される。

**第7層(混土貝層)** ; 第7層はF・G4区以外にはまんべんなく分布していた。混土貝層の主体になっている土壤は黒褐色のやわらかいもので、混入する貝はヤマトシジミが大部分であった。包含する遺物は多くない。土器は第8層と同

じく各型式のものがまじっていて、地点によって出土する土器の型式に差がみられる。第8層と同じように第6層より上の諸層の下端部を形成しているためであろう。

**第6層（混土貝層）**；第6層はA2区から広がっている。層の末端はC4区5区の北側をわずかにこえている。また、第6層は基盤の傾斜に平行した堆積状態を示している。貝層の主体はヤマトシジミであるが若干のハマグリが混入しているのが目立った。他の混土貝層に比較して土壌の混入率はかなり多かった。

包含される遺物の量は多くないが、土器は加曾利BIおよびII式風のものが目立った。A1区～3区にかけて表土層を除去すると直ちに混上貝層の表面が現われるが、この部分は人為的にならされたように平坦になっている。この面からは注口土器、深鉢形の縁帶文土器、粗製深鉢形土器の3つが原位置で押しつぶされたような状態で発見された。このような遺物の出土状況はこの部分が住居址のような生活面の一部であったことを暗示しているのではないか。

**第5層（破碎貝層）**；第6層と全く平行した傾斜の状態を示しているが、分布の末端はなだらかに広くひろがりE4区、D5区にまで及んでいる。この層の上端の部分は（A3・4区、B4・5区）耕作の歎先がとどいたためのものと思われる擾乱によって破かいされている。

第5層はB・C・D4区の発掘の際5トレンチ東壁断面（挿図第3）を観察しながら掘り進めたのであるが、断面では上半部よりも下半部に土壌の混入率が多く、目立つ程度に貝もよごれていたので、上半部と下半部に分層した。このような現象は平面発掘を専ら進めている過程では識別することはできなかった。

第5層を形成する貝も圧倒的に多くの部分がヤマトシジミである。また、貝のすべては細かく破碎されたものであった。貝殻が破碎された原因には、色々なことが考えられるが、第5層の場合には食糧に供される際の加工によるものと考えている。貝層の厚さは10cm～20cm弱なのであるが、貝が破碎されなければ貝層の厚さは現状の約4倍になり、第1層～第3層のような貝層と比較しうる状態が復元されるであろう。

破碎貝層中には獸骨の包含量が非常に少なかったことは特徴としてあげなけれ

ばならない。この事実と相まって破碎貝層の性質を考えてみると、貝が集中的に採食されなければならなかつた時点の生活環境を想定することは許されまいか。しかも第5層の破碎貝層が形成されたとほぼ同じ時期の土器を出土した覗塚遺跡第1貝塚第2トレンチ第4区の貝層5も破碎貝層であった。破碎貝層を理解する先の想定が許されるならば、遠江一円の沿岸集落には一定の時点において貝を集中的に採食しなければならない生活環境が出現したことが理解されよう。

第5層には一般的に加曾利BI、II式風の土器がみられたが、B5・C5両区の上部には覗塚上層式土器が集中してみられた。

**第4層（混土貝層）**；第4層混土貝層は、東側で約30～40cm前後、西側が薄く約20cm前後の厚さを示していた。第5層に接して堆積しているが分布範囲は南側ではB4・5区の線から北寄りのF4・5区にわたっている。

土壤の混入率の少ない良好な混土貝層である。層を構成する主体はヤマトシミであるが、その中にコタマガイ・アカニシ少量でアワビが混っていた。特にコタマガイは目立つ程度の混入率を示し、出土状況は特徴的であった。ヤマトシミにはさまれたうすい間隔のような面をなして、ばらまかれたような様子で第4層中に4つの面になっていた。これはコタマガイだけが各々の時点に採食されたことを示しているものであろうし、コタマガイの生息条件を考慮すれば石器時代人の行動範囲の一部も推測することができよう。

第4層中の上器包含量はかなり多かった。土器はわれわれが宮滝古式と呼ぶものが主体になって、これに覗塚上層式土器が併存する傾向がみられた。

**第3層（混土貝層）**；状態は第4層と良く似ているが、土壤の混入量は更に少ない。厚さは50cm前後、最も厚い貝層である。分布の主体部はD5・E4・5区に集中していた。F4区北側における貝層の終りは、約50度の傾斜面を形成しているが、層の末端にはまくれ上ったような形で貝層下土層がかぶさっている。第4層との境目には部分的に破碎貝層が散乱していた。

貝層はヤマトシミが主体であるが、コタマガイなどが点々と混入していた。獸骨の保存は良く鹿の頭骨が原形のまま出土したりした。土器の混入は多くわれわれが宮滝古式土器と呼んでいるものが主体を占める。

**第2層（混土貝層）**；貝層の規模は狭少であって、E5区などでは一見第1層と第3層との間層の観を呈する。E4区では厚さ20cm程で、層の末端はG4区に及ぶ。

第2層は混貝土層であって貝の混入率はかなり低い。貝の主体はヤマトシジミであることに変りはない。混入する貝の中ではコタマガイ・キサゴが最も多い。第2層は単に混貝土層であるというだけでなく焼けて破碎した貝が多く混入していた、ということも一つの特徴としてあげられる。

包含される獸骨・土器には一般的にみるべきものが少なかった。土器は宮滝新式土器である。

**第1層（混土貝層）**；第3、4層の混土貝層程度に良好なものではなくて混土量はやや多い。

F・G4区～E・F・G5区へと広がっている。厚さ60～70cmである。ヤマトシジミが貝層の主体をなし、コタマガイ・キサゴ・ハマグリなどが混入している。

E5区の貝層にはかなり大きな擾乱穴が掘られている。貝層の表面ではF5区を中心として10cm程の厚さで焼けた貝が散布していた。

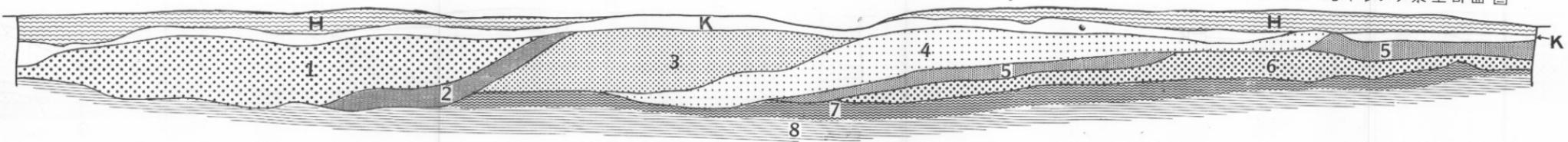
貝層の堆積が同一層内において断続的に何回も反復してくりかえされることは第4層におけるコタマガイの間層面の現象から指摘した。それと同じような現象が第1層でもF5区下底面に貝層下土層が切りこんだ部分があつてみられた。

層全体の規模の割合に遺物の包含量は少ない。土器は磨めつした小さな破片が多い。包含されている土器は宮滝新式土器が大部分を占めていた。

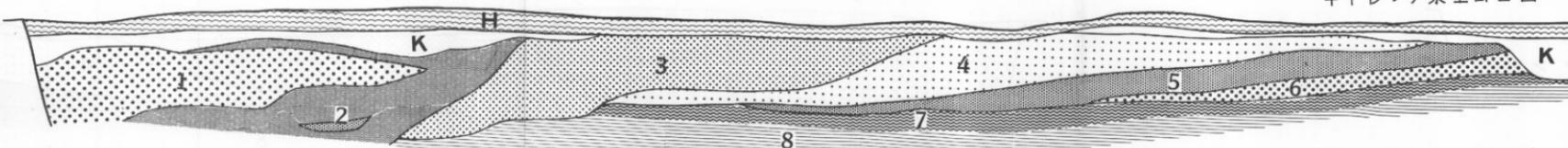
この層の上面G5区から屈葬人骨（第1号人骨）1体分が出土し、また同区の貝層上面から約20cmの位置で完全な伸展葬人骨（第2号人骨）1体が出土している。

**表土層・擾乱層**；発掘地点の全面をおおっている。表土層は耕作土であるが擾乱層は耕作の歛先が諸貝層にとどいて表面を擾乱した結果混貝土層になったものである。その他、後世の何らかの目的によって掘りこまれた部分が擾乱層になっている。

5トレンチ東壁断面図

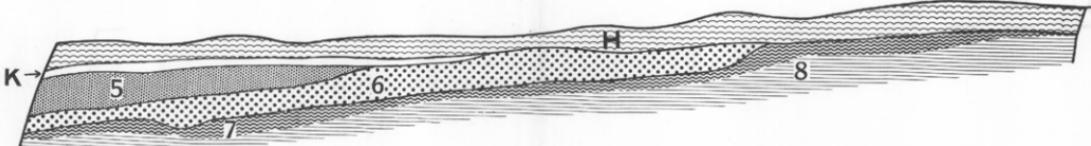


4トレンチ東壁断面図



Aトレンチ

Aトレンチ北壁断面図



0 M 1

- H = 表土層(耕土)
- K = 深層(混貝土層)
- 1 = 第1層(混貝層)
- 2 = 第2層(混貝層)
- 3 = 第3層(混貝層)
- 4 = 第4層(混貝層)
- 5 = 第5層(破碎貝層)
- 6 = 第6層(混貝層)
- 7 = 第7層(混貝土層)
- 8 = 第8層(黄褐色土層)

5トレンチ

発掘区断面図

表上層は暗褐色のやわらかい土壤で厚さは 10 cm ~ 30・40 cm、擾乱層もこれとほぼ等しい。これらの層に包含される土器は宮滝新式のものが一般的に多かったが、G 4・5 区、F 5 区などには若干の晩期の条痕文粗製土器および水神平式土器片が出土している。

### 3. 層位的観察のまとめ

地形についての記述は、すでに十分ふれてきたが、発掘地点の北側・西側が宅地の整地や除土作業によって破かれていっているため、第Ⅰ貝塚の全貌を知ることはできなかった。

地形測量と併行して行なったボーリングの結果によると、発掘地点の南西方にまで第Ⅱ貝塚がのびていたことが知られるのである。結局、原状はかなり大規模な貝塚が形成されていたことが推測される。

われわれの発掘地点は奇蹟的に現存した第Ⅰ貝塚の局部にしかすぎなかつたが、A 1 区内の表土直下の貝層に第Ⅰ貝塚内で編年的に古い位置が与えられる土器が発見され、更に北西に向うにしたがって貝層が新らしくなってゆく状況を観察したが、結局この貝塚全体は「接海面」に向かってすてられた斜面貝層が堆積した貝塚であるといふことがいえる。ボーリングによって存在が明らかになった第Ⅱ貝塚なども第Ⅰ貝塚と同じような状況で形成されたものであろう。第Ⅱ貝塚は遺跡の南の接海面に向かっているものである。

第Ⅰ貝塚・第Ⅱ貝塚の位置をみると時間的前後関係がありながらも、遺跡内で貝塚が形成される地点に共通性があることを知ることができる。遺跡全体の起伏は決してはげしいものでなくて、微細な変化がゆるやかにみられるに止まっている。これは先史地形においても大差ないことであろう。すでに第 8 層貝層下黄褐色土層について記述してきたが、先史地表面が D 4・5 区辺に中凹み状になっていることを指摘した。このような地形こそ遺跡内における貝塚形成の場所に適した地点らしい。第Ⅱ貝塚における現地形も同じような状況を示している。

発掘した範囲が第Ⅰ貝塚全域ではなくして、局部であったという制約によって貝層全体の形状は知ることができなかつたが、良好な貝層とみとめられる第 1 層

～第6層の体積全体を推計してみたところ、第1表のような結果が得られた。この表から第3・5・6層の70～80立方mの体積と、第1・4層の90～100立方mのものとに分けることができる。勿論、間層的な性格がみとめられた第2層の15.1立方mという数値、および破碎貝層の第5層の数値は他の泥土貝層と性格の異なる数値として除外して考えなければならない。

各貝層の体積と遺物の包含量とを比較してみると、体積約70～80立方mの第3・4・6層に包含されていた獸骨の絶対量は傾向的に多く、約100立方mの第1・4層には少ないという現象がわかる。言いかえるならば貝層の体積に反比例する量の獸骨が包含されているといえよう。

貝層が堆積した時期は包含する土器が示しているように、異なるにもかかわらず一つ一つの貝層の組成と、一つ一つの貝層の量を比較してみると、大きな差のない均衡のとれた関係を表現しているということが言えよう。このような結果と第5層破碎貝層とを比較してみたい。

破碎貝層（第5層）の体積72立方mという数値は貝が破碎されていなければ約300立方mになるのであって、体積が多い第1層の100立方mをはるかに上まわっている。

このような貝層の量的現象は貝を集中的に採食しなければならなかつた、という生活環境について推論することが、必ずしもむりでないということを裏づけているのではなかろうか。

また特定な場合をのぞいて一般的には、貝層内の貝と獸骨の量的関係が変化することなく持続していることがわかつたが、時期が变つても生活資源の採集には一定の限界があることを示しているのであろう。これは少なくとも西貝塚遺跡を中心とした地域で、縄文後期中頃から晩期初頭にかけて人口にはげしい増減がなかつたことを示していることにもなろう。勿論一つの土器型式が示す時間はかな

第1表 貝層の体積

層	序	体積 (m <sup>3</sup> )
第	1 層	100
第	2 層	15.1
第	3 層	82.5
第	4 層	98
第	5 層	72
第	6 層	70

り長いのであるから、一つの貝層が1土器型式の示す時間内の生活資源採集という生産活動のすべてを表現しているのではなくて、瞬間的な時間内における現象を示しているに止まるという制約はともなっている。

貝塚の局部の現象で一・二の考察を進めたのであるが、当然遺跡内に同時期の別場の貝層の存在も想定されなければならない。西貝塚における他の貝塚としては第Ⅱ貝塚があるが、形成の時期は第Ⅰ貝塚に先行するのであって、一応そのような危惧はない。そればかりでなく、われわれは遠江における典型的な貝塚の蜆塚遺跡のほぼ全容を調査したが、蜆塚には第1～第3の貝塚が地点を異にして分布し、それぞれは時間的に接してはいるが相前後した時期のものであることが判明している。時間的に異なるいくつかの貝塚が群在するのが、遠江での普遍的な貝塚のあり方である。遠江における貝塚の一般的傾向の中で個々の貝層の量と組成との関係を考えてみたい。その結果から言えることは、貝層が縄文時代のある時点における生活資源採集の状況、即ち生産活動までをかなり反映しているということが言えよう。そして広大な貝層の存在は（例えば第5層）生活の豊かさを示すのではなくて、内容を検討した結果からは、かなりひつ迫した生活をさえ想定しなければならない。

貝塚についての二・三の考察を進めたのであるが、このような認識の手段や方法を、どこの貝塚でも適応出来るという自信はない。われわれが共同研究を進めた遠江という限られた地域内における一つの普遍的な現象の中から導き出された結果である。

近年地域的な研究は各地で推進されている傾向があるが、おそらく各地域においてそれぞれの地域の普遍的特徴を見出し、その結果が蓄積されることによって、同時に各地域の生産活動や文化の独自性が明らかにされるであろう。

紙面の制約から貝塚に見出すことのできる、なおいくつかの知見を割愛せざるをえなかった。いずれにしても貝塚は石器時代研究者の宝庫である。今後共組織的な、また精密な調査を企画しなければならないことを、調査の過程における二・三の及ばなかつた点の反省と共に、認識を新たにしていることを附記したい。

（市原 浩文）

#### 4. 出土貝類について

西貝塚遺跡貝層の貝類構成の調査を担当した。調査方法は、ab-section（挿図第4.）にそって露われる貝層につき、各区ごとに試料採集（バケツに半分～一杯）し、種類毎の個体数%を求めた。採取試料の位置は挿図第4図の通りで総数26点である。各層別に算出した個体数%を第2表に示した。また採取試料を堆積した順序（推定）に右から左に並べ、貝類の種構成の推移を示したものが挿図第5図である。

これらの結果を要約すれば、

1. 同定された種類は17種、このうち二枚貝9種、巻貝8種である。また棲息場所別にみると、外洋棲3種、半鹹半淡水棲8種、淡水棲4種、陸棲2種である。
2. 各試料とも圧倒的にヤマトシジミが多く（最低91.3%、No. 23）、中でも第1層、第6層、すなわち初期の貝層と末期の貝層に多い。
3. 外海に面した遠浅の砂質海岸に棲むダンベイキサゴ、コタマガイは第2層から第5層にかけて産出し、特に第3層に多い。
4. 外洋水の影響の大きい湾口部砂底に棲むイソシジミは全層を通じて産出するが、特に第3層、第4層に多い。ハマグリは第3層および第5～6層に多い。
5. 内湾の泥～砂泥質のところに棲むオキシシジミは第5層、第6層に多く、特に第6層にレンズ層をなして多産する。
6. 陸棲のマイマイ類、キセルガイ類は第3層から第5層にかけて多く、土を比較的多く混ざる貝層に多く含まれる。他から侵入してきたものであろう。
7. 採集試料には含まれないが、ハイガイが第4層（C5区）で見出された。試料採集に協力された磐田南高校生徒諸氏、鑑定につき御教示頂いた静大文理学部土隆一氏に厚く感謝する。

（加藤 力助）

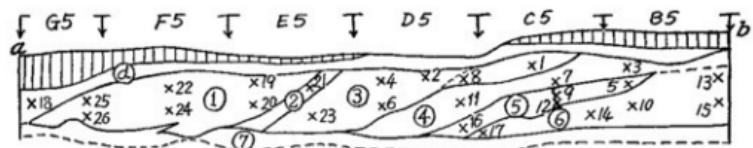


図4. 資料採集位置図

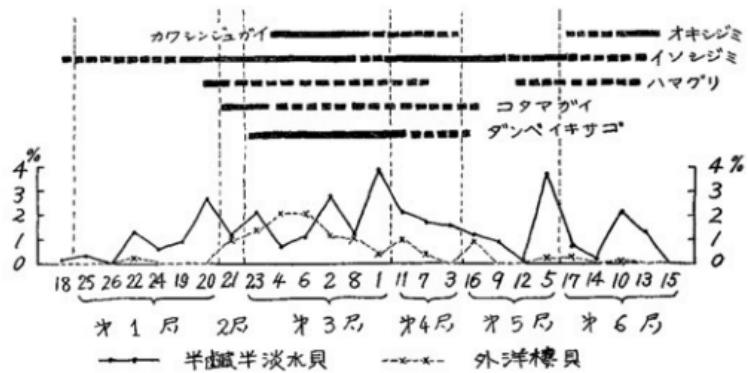


図5. 貝類構成推移図

第2表 層別貝類百分率 (+は0.05%未満)

貝類	層位	擾乱	1層	2層	3層	4層	5層	6層	棲場 息所
			層	層	層	層	層	層	
ヤマトシジミ		99.9	98.6	97.0	94.4	93.8	96.3	98.3	半淡半鹹水
ハマグリ		-	+	0.6	0.1	0.1	0.1	0.1	
イソシジミ	0.1	1.2	0.5	1.5	1.4	0.7	0.1	0.6	
オキシジミ	-	-	-	-	-	+	+	-	
アサザ	-	-	-	-	-	-	-	-	
カキ類	-	-	-	-	-	+	-	-	
コタマガイ	-	-	1.1	0.2	0.2	0.1	-	-	外洋
カワシンジユガイ	-	-	-	0.7	0.2	+	0.1	-	淡水
シオフキ類	-	-	0.1	-	-	-	-	-	半淡水
アワビ類	-	-	-	+	-	-	-	-	外
ダンペイキサゴ	-	+	-	1.1	0.3	+	0.1	-	洋
イシマキガイ	-	-	0.2	0.1	0.2	0.1	0.1	-	淡水
カラワニアシ	-	-	-	0.2	0.2	0.1	0.1	-	半淡水
オオタニシナ	-	-	-	0.1	-	-	-	+	淡水
カラニナ	-	-	0.2	0.1	+	0.1	0.2	-	淡水
マイマイ類	-	0.1	0.2	0.7	0.3	0.4	0.2	-	陸棲
キセルガイ類	-	+	0.2	0.6	3.3	1.9	-	-	
個体総数	841	4830	558	2906.5	1554.5	2674.5	3526		

## 5. 出土の脊椎動物遺存体

### —漁獵活動とその自然環境—

#### 1.

西貝塚発掘の脊椎動物遺存体からは、別表に示すような魚類10種、爬虫類1種、鳥類4種、哺乳類8種合計23種類を知ることができた。その量は大型リンゴ箱でおおよそ4分の1はい分、それらの各種動物遺存骨の多くは破碎され、完存していた骨は獸類の掌骨、指骨や魚類の頸歯骨の一部に限られていたようであった。このために種名を逐一明らかにしえなかつた標本も残されてしまい、それが特に脆損され易い魚・鳥骨に多く、今後の資料の増加によって若干の種名の追加がみられる事であらう。

さて今回ここに記載した計23種余の動物群中には、特に珍しい、また目新しいものをみなかつたのであるが、それらが当時の食料資源であることはもとよりのこと、この貝塚を構成した人々の食料資源獲得をめぐっての自然環境と、それらの採捕、捕獲活動を示唆すべき重要な資料である。これらの遺存骨をその性状、量差、出土状態それに生態学的な性格といった諸点よりみて、これから環境の問題、捕獲活動の一端について概説的な説明をおこなつておきたいと思う。

#### 2.

西貝塚出土脊椎動物遺存体種名表

#### 脊 椎 動 物 Vertebrata

##### a. 魚 類 Pisces

1. サメ類 *Selachii* gen. et sp. indet.
2. エイ類 *Dasyatidae* or *Myliobatidae* gen. et sp. indet.
3. カタクチ? *Engraulis japonica* (Temminck & Schlegel)
4. ギバチ *Pseudobagrus aurantiacus* (Temminck & Schlegel)
5. コイ類 *Cyprinidae* gen. et sp. indet.
6. ウナギ *Anguilla japonica* Temminck & Schlegel.
7. ボラ *Mugil cephalus* Linné.

8. スズキ *Lateolabrax japonicus* (Cuvier & Valenciennes)
  9. クロダイ *Sparus longispinis* (Temminck & Schlegel)
  10. メバル *Sebastodes inermis* (Cuvier & Valenciennes)
- b. 爬虫類 Reptilia
1. ウミガメ科の一種 *Chelonidae* gen. et sp. indet.
- c. 鳥 獣 Aves
1. マガソ ? *Anser albifrons albifrons* (Scopoli)
  2. シロエリオオハム *Colymbus areticus pacificus* Lawrence
  3. ツル科の一種 ? *Gruidea* gen. et sp. indet.
  4. キジ ? *Phasianus uversicolor tohkaidi* Momiyama.
  5. 種名不詳種 sp. indet.
- d. 哺乳類 Mammalia.
1. イノシシ *Sus scrofa leucomystax* (Temminck & Schlegel)
  2. ニホンジカ *Cervus nippon nippon* Temminck.
  3. クジラ類 Cetacea fam. indet.
  4. カワウソ *Lutra lutra whiteleyi* (Gray)
  5. イタチ *Mustela sibirica itatsi* (Temminck & Schlegel)
  6. タヌキ *Nyctereutes procyonoides viverinus* Temminck & Schlegel.
  7. ニホンイヌ *Canis familiaris* var. *japonicus* Temminck.
  8. ノウサギ *Lepus timidus brachyurus* Temminck & Schlegel.

### 3.

次に上記各遺存骨の出土地点、層位それに骨の性状などについて簡単に記載しておきたい。文中 A ~ G のローマ字は各トレンチを、1 ~ 5 の数字は発掘区画を示し、I ~ VII は層位を示している。計測値は特に記していない限りすべて mm を単位としているものである。

#### a) 魚類骨について

##### サメ類

① 脊椎骨 E 4・1 (2層下半)

径 32.5 に達する大型のもの(但し周縁は破損する)。椎体厚 17.6。僅かに 1 例みられたのみ。椎骨体の性状からすれば、本標本はサメ類中アオザメ *Isurus glaucus* (Müller & Henle) のものに近似するように思われる。

② 脊椎骨 E 4・1 (2層下半)

径 2.6、厚さ 2.0 を測る小脊椎骨。ブロック採集土より唯 1 個を検出した。

エイ類

尾棘 2 E 5・1 (混土貝層 5)、D 5・VII (混土貝層 5)

いずれも遠近両端を欠損する標本であるが、大きさはほぼ同大型、棘長は 65.0 余に達するであろう。このうち D 5・VII 出土例は、棘体両側の鋸歯がかなり削られ、摩滅した痕を残している。あるいはヤスのような尖頭器として用いられたものかも知れぬ。同様、E 5・1 出土例も先端部に両側よりの削除痕があり、人為的加工ともみられる。棘体は外側にややそり返り気味である。

カタクチ?

脊椎骨 E 4・III

ブロック採集土より 1 個を漸く検出。カタクチの性状を認めるのであるが、これが決定には各部位の脊椎骨標本があると一層確実である。ここでは唯一例なので疑問符をつけておいて資料の増加を待ちたい。それにかかる脊椎骨が果して如何程貝層中に混在するものであるか、重要な魚類種だけに今後の調査における結果に注目したい。

ギバチ

育鰭棘、鰓蓋骨、脊椎骨その他

II : E 5 (貝層 4)、F 4 (1 層下部)

III : C 5 (混土貝層 1)、D 5 (混土貝層 2)

IV : C 4 (1 層上半)、C 5 (混土貝層下底)

V : D 4 (混土貝層 3)

標本は育鰭棘が最も多く、また保存も良好である。上記した各層位の出土層は本標本の出土した層位である。出土量は上記各層位地点が 1 個ずつである。棘の

大きさには大小あり、従って捕獲個体の大きさを示すであろう。棘によると、その最大型で複原長 41.0 (尖端部より基部下底までの直線長) を越えるものがあるが、多くは 33.0 前後もしくはそれよりやや小型である。本貝塚の淡水魚遺存骨としては他の種類と比較して目立つものであったと思われる。

#### コ イ

咽頭歯 : E4・III (2 層)

鰓蓋骨 : E4

II : E4 (混土貝層 4)、F5 (混土貝層 4)

III : E4 (1 層下半)、E4 (2 層)

鰓蓋骨は E4・II より 2 個分、他はすべて 1 個検出。淡水系の貝塚でありながら、コイの遺存骨出土が目立たないのはどのようなわけからであろうか。咽頭歯片は 1 個のみであり、鰓蓋骨も完存に近い骨ではなく、その量はおそらく上記ギバチを下廻るものであったろう。

#### ウ ナ ギ

右側下顎歯骨 1 : C5・III (貝層 1)

脊椎骨 4 : E4・III (ブロック採集土)

下顎歯骨は遠近両端を欠損するが、おおよその複原長は 26.0 に達するであろう。このウナギの遺存骨出土例は比較的珍らしい。しかし、これまで貝塚の自然遺物が精査される機会が非常に少なかつたため、その記載も稀だったのであろう。千葉県香取郡大倉南貝塚からは、これとほぼ同大型の標本を出土しており、これに筆者が先に報告した同市川市国分堀之内貝塚 (故岸上鎌吉氏も報告されている) 等、関東地方においても本種の知られている例は少ないようである。<sup>22</sup> 西貝塚の場合、その自然環境、採捕活動の様相を考える際、上記したような貝塚の立地、漁獵活動の内容は種々参考に供されるものがあるのではなかろうか。脊椎骨は例のブロック採集土より検出したもの。筆者に送付された土中には特に魚骨の小片が多くかつたがやや明瞭にウナギのそれと認められたのは 4 個であった。脊椎骨椎体長は 3.0~3.3 で普通大である。この場合、他の断片と混じて幾種類かの魚類脊椎骨が出土しているが、その数は約 50

個位あり、そのうちの4個がウナギであったわけである。

### ボ ラ

#### 脊椎骨片 1 E4・III

ブロック採集土より検出したが、やや小型の個体のものであろう。脊椎骨椎体長は約8.5である。

### ス ズ キ

#### 左側下顎歯骨：E4・III（2層下半）

#### 鰓蓋骨：

I : F5 (混土貝層5&6)

III : D5 (混土貝層2)、E4

IV : C4 (1層下半)、D4 (2層上部)

唯1例の下顎歯骨は近位端を欠損するが、大型の立派な標本。鰓蓋骨は断片をも含めて10片程出土しているが、顎骨標本をも含めてその量は少ない。後述するクロダイなどと比べて量的な劣りはいろいろな問題を呈示してこよう。

### クロダイ

第3表 前顎・下顎歯骨の層位別出土数量

層位	出 土 地 点	p. m.		dent.	
		r.	l.	r.	l.
I	E 5 · F 5	2	2		
	D 5	1			
II	E 4		1	1	
III	D 4 · D 5 · E 4 · E 5	6	3	2	6
IV	C 4 · C 5	9	3	6	4
V	C 5	1			
計		19	9	9	10

(p. m. : 前顎骨、dent. : 下顎歯骨、r. : 右側、l. : 左側)

クロダイの標本は上記の他に頭部諸骨、脊椎骨、各鱗骨を含むが、それらの骨は量的な状態を明示しないのでここでは表記しなかった。ただここでは脊髄条、神経棘、血管棘などの出土層位・地点について簡単に記しておくに止める。（な

おこれは断片骨となるためクロダイ以外の骨も含まれる可能性があり、従ってこれは単に魚骨の主含肩位をみるために便宜的であることから示すにすぎない。)

I : F5

III : C5, D4\*, D5\*, E4, E5

IV : B5, C4, C5\*, D4\*, D5\*, F5

VII : C5\*

VIII : F5

VIII : E4

(\*:特に多くの骨を含む場合<<10数個より30数個位である。>>)

クロダイは頸骨資料にみるとその包含は第IIIおよびIV肩に圧倒的に多く、他の肩位では激減している。標本としてやや問題もあるが脊椎骨その他の骨もIII・IV肩に多く、特にIV肩に多いことは、頸骨資料の場合とよく一致するものとみてよいであろう。

頸骨の大きさであるが、前頸骨ではその全長(咬合面全長で、咬合面を水平に保って計測した最大値)35.0が最大で(C5・IV)、下頸歯骨では44.0に達するもの3例(D4・IV)あって最も大型の頸骨である。この程度の前頸・下頸歯骨となると、貝塚産クロダイとしては大型の部類にはいるものとみてよい。しかし、両頸骨とも普通にはその全長30.0前後のもので、この程度が本貝塚の主体を占めているわけである。このような骨にみられる大きさの変異状態は、関東地方では、例えば奥東京湾沿岸域の淡水系繩文後期以降の貝塚によくみることができるものである。

#### メ バ ル

左側前頸骨 E4・III(2肩上半)

ほぼ完存に近い前頸骨1個が検出されている。

#### b) 爬虫類について

ウミガメ科の一種

表土肩 : C4(背甲板片1)

III : D4(1肩～2肩間層、肢骨片1)

D4 (1層上半、背甲板片1)

IV : B5 (貝層2、背甲板片1)

B4 (1層、同1)、(2層、同1)、C4 (1層下半、背甲板小片

4)、D4 (2層、同1)、D5 (混土貝層5、同1)

いずれも破片で10片足らずのものが出土している。上記のようにこれもIV層に多い。小型のウミガメ科のもので、背甲板全長は300位、あるいはそれよりやや大きめ位のウミガメとなろう。ウミガメは普通もう少し大型の遺存骨を貝塚に発見するもので、このように小さな個体の骨だけを残している例は珍しいのではないか。

### c) 鳥類について

西貝塚では鳥類の遺存骨やや目立ち、大小の種類を混えたものをみることができたが、寸断された破碎骨のため種名査定には困難を極めた。種名の判明した標本をも含めて、鳥骨の出土した層位、地区は次の通りである。

I : E5、F4、F5、G4 (計 8 片)

II : F4 (計 3 片)

III : D4、D5、E4、E5 (計 27 片)

IV : C4、D4、E5 (計 17 片)

V : B5、C4 (計 2 片)

VI : A2、C5 (計 2 片)

VII : F7 (計 1 片)

出土地点からすれば、I～VIIに至る間すべての層にみることができるが、量的には上表のようにIII層最も多く、IV層これに次ぎ、他はおおむね著しくその量を減少する。(上記した数量は、大体普通にかぞえられる骨をすべて含めたけれども、微細な骨となればこれ以外にもあり、そのため厳密な意味をもつ資料ではない)。

### マガソ?

上腕骨片1 : E4・III (2層上半)

シロエリオオハム

上脛骨片 1: G4・I (2 層下半)

ツル科の一種

鳥 豚 骨 2:B5・V (北半部貝層 2)、E4・III (2 層下半)

キ ヴ ?

上 脛 骨 1:D4・IV (2 層上部)、その他

以上その他に、例えばツル科に属するような大型の骨断片は E4・III、G4・I などにみられ、またこれよりやや小型の類の骨も数個あり、それらを除いてはガシカモ科のうちのカモ類の骨がやはり多いのではないかと思われる。従って鳥骨全体としては、カモの類が最も多く、これに僅に大小の海鳥類を混ぜているというのが、本貝塚での鳥類相とみられる。

d) 哺乳類について

イノシシ・ニホンジカ

両種ともに本貝塚出土の哺乳類の主体を占めるものであるが、必ずしも同等の捕獲をみていたわけではなく、従って出土遺存骨には量的な差違を認めることができた。その出土状態は別表に示しておいた。

イノシシ、ニホンジカはともに III 層において最も多く出土し、IV 層がこれに次ぐが、さらに V・I 層とこれに続いている。しかし主合層たる III・IV 層を除くと、その数の激減することに注意されるのである。イノシシは I 層で III 層の弱弱、ニホンジカは同じく I 層で III 層の弱弱に減少している。出土地点についてみると、四肢骨数量表に示されているのがすべてではないが、ある程度は遺存骨の埋存範囲を示すのに役立であろう。ニホンジカはイノシシに比して広範囲の分布を示し、したがってまたその数量の多いことを結果づけることになるであろう。次に両種間の量的な差を骨、歯牙についてみると、各層位ともニホンジカはイノシシよりもまさり、このことは便宜上全発掘資料（表記上の）についてみればより明らかであろう。歯牙および顎骨資料で、左右、上下いずれかの歯牙残存顎骨ならばにこれと重複しないような歯牙を加算させてゆくと、ニホンジカで 19~20 個体分（左側下顎骨・歯牙）、イノシシで 10 個体分前後（右側下顎骨・歯牙）が少くとも予想されよう。

第4表 ニホンジカ歯牙層位別出土表

層位 出土地点	歯牙		r		l	
	u	M	P	M	P	M
表土層	E 4 · D 5			I <sub>1</sub> (dm <sub>1</sub> ~ M <sub>1</sub> )		(P <sub>1</sub> ~ M <sub>3</sub> ) (M <sub>2</sub> M <sub>3</sub> ) M <sub>3</sub> M <sub>3</sub>
擾乱層	F 5 · F 4 · G 5			M <sub>3</sub>	(P <sup>1</sup> ~ M <sup>3</sup> ) (P <sup>2</sup> ~ M <sup>3</sup> )	(M <sub>1</sub> ~ M <sub>3</sub> )
I	E 5 · F 4			(M <sub>2</sub> M <sub>3</sub> ) M <sub>1</sub> M <sub>2</sub>		(P <sub>2</sub> ~ M <sub>3</sub> ) (M <sub>2</sub> ) M <sub>2</sub>
II	C 5 · D 4 · E 4 · E 5	(P <sup>1</sup> ~ M <sup>3</sup> ) (M <sup>1</sup> ~ M <sup>3</sup> )		(M <sub>1</sub> M <sub>2</sub> ) M <sub>1</sub> M <sub>2</sub> (P <sub>2</sub> ~ M <sub>3</sub> ) (P <sub>2</sub> ~ M <sub>3</sub> ) (dm <sub>1</sub> ~ dm <sub>2</sub> )	(P <sup>2</sup> ~ M <sup>3</sup> ) (M <sup>1</sup> ~ M <sup>3</sup> ) (M <sup>3</sup> ) (dm <sub>1</sub> ~ dm <sub>2</sub> )	M <sub>3</sub> M <sub>3</sub> M <sub>3</sub> (M <sub>2</sub> ) (P <sub>2</sub> ~ M <sub>3</sub> ) (P <sub>2</sub> ~ M <sub>3</sub> )
III	C 4 · D 4 · E 5	(M <sup>1</sup> M <sup>3</sup> ) (M <sup>1</sup> ~ M <sup>3</sup> )		dm <sub>2</sub> · dm <sub>3</sub> M <sub>1</sub> (M <sub>3</sub> · M <sub>3</sub> )	M <sup>3</sup> M <sup>3</sup>	
IV	B 5 · C 4 · D 4 · D 5	(P <sup>2</sup> ~ M <sup>1</sup> )		P <sub>3</sub> (M <sub>1</sub> M <sub>2</sub> ) (M <sub>2</sub> M <sub>3</sub> )	I <sub>1</sub> (P <sub>2</sub> ) (M <sub>1</sub> ~ M <sub>3</sub> )	M <sub>3</sub>
V	C 4 · C 5 · D 5	M <sup>2</sup>		(P <sub>1</sub> ~ P <sub>2</sub> ) · M <sub>3</sub>	M <sup>3</sup> I <sub>1</sub> (M <sub>2</sub> · M <sub>3</sub> ) (P <sub>2</sub> ~ M <sub>3</sub> )	M <sub>3</sub>
VI	F 4			(P <sub>1</sub> ~ M <sub>3</sub> )		
VII	D 5 · F 5			(P <sub>1</sub> ~ M <sub>3</sub> )		M <sub>3</sub>

r : right, l : left, u : 上顎, I : 下顎, I : 尖齒, C : 大齒, P : 前臼齒, M : 臼齒

但し括弧を有する歯牙は同一頭骨に独立するものであり、その下に線のひかれてあるのは左右の該当歯牙が同一個体のものであることを示す。

第5表 イノシシ歯牙層位別出土数量表

出土地点 層位 上 擾 乱 層	歯牙	I		II	
		P <sup>u</sup> M	P M	P <sup>u</sup> M	P M
B 5・G 4	I <sup>1</sup> I <sup>1</sup>	I <sub>1</sub>			
I E 5・F 5	PF <sup>2</sup>	M <sup>2</sup> C <sup>6</sup> (P <sub>4</sub> ~M <sub>3</sub> ) (M <sub>1</sub> M <sub>2</sub> )		P <sup>1</sup>	
II E 5・F 4			I <sub>1</sub>		I <sub>1</sub> (M <sub>1</sub> ~M <sub>3</sub> )
III C 5・D 4・D 5・E 4 E 5	(C ♀~P <sup>2</sup> ) P <sup>1</sup> M <sup>2</sup>	(I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> ) C <sup>6</sup> C ♀ (P <sub>2</sub> ~M <sub>3</sub> ) (P <sub>4</sub> ~M <sub>3</sub> )	(P <sup>3</sup> ~M <sup>2</sup> ) (P <sup>4</sup> ~M <sup>1</sup> )	(P <sup>3</sup> ~M <sup>2</sup> ) (P <sub>2</sub> ~M <sub>3</sub> ) (P <sub>4</sub> ~M <sub>3</sub> )	(I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> ) I <sub>2</sub> I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> (M <sub>2</sub> M <sub>3</sub> ) C ♀
IV B 4・C 4・D 4・D 5 E 4			I <sub>2</sub> O <sup>6</sup>	(dm <sup>2</sup> ~M <sup>1</sup> )O <sup>6</sup> (P <sub>4</sub> ~M <sub>3</sub> )	
V E 5			I <sub>3</sub>	(dm <sup>2</sup> ~M <sup>1</sup> )I <sub>2</sub> , I <sub>3</sub> , M <sub>1</sub>	(P <sub>2</sub> ~M <sub>3</sub> )
VI B 5・C 4・D 4				P <sub>2</sub> ・M <sub>3</sub>	
VII C 5		(M <sup>1</sup> ~M <sup>2</sup> )			
VIII D 4			I <sub>3</sub>		
IX F 5	C ♀	I <sub>3</sub> ・C ♀			

肢骨では各部位の骨を同様にみることはできないが、比較的関節部の保存されている上腕骨 (Hum. ニホンシカ : イノシシ = 15個 : 6個)、桡骨 (Rad. 16: 5)、腕骨 (In. 13: 6)、大腿骨 (Fe. 18: 5)、脛骨 (Ti. 20: 6)、腓跗骨 (Cal. 19: 6)、腓跗骨 (Ast. 13: 1) などによって、遺存骨の量差を考えてみることができるのでないかと思う。<sup>6)</sup>

次に雌雄別についてみると、歯牙、骨格の調査が未完のため充分ではないが、例えばイノシシにおいて9個の犬歯中5個が雌獣のものだったことは、捕獲獣の半数もしくはそれに近い量の雌獣を含むものであったかも知れない。この点シカ

第6表

ニホンジカ・イノシシの四肢骨属別出土数量表

部位	出	土	角	A5	Ant.	At.	Sea.	Hum.	Ul.	Ra.	Mc.	In.	Fe.	Ti.	Cal.	Ast.	Mt.	r	l	
左 後足	C5+G5																			
右 後足	D4+D5+B5+C5+E5	5	2	2	2	1	1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
左 前足	E5+F5+F4+G4	1	1	1	1	1	1		1	1	4	1	1	1	1	1	1	2	1	
右 前足	B5+F4	4	1	1	2	1	2	3	4	1	1	2	2	5	4	3	6	3	5	
左 後足	C5+D4+D5+E4*+E5	9	1	2	1	2	3	4	1	4	1	2	2	5	4	3	6	3	5	
右 後足	B4+D5+C4+G5+D5*	1	1	1	1	1	5	1	4	2	3	5	3	1	2	3	4	2	3	
左 前足	E4+E5	1	1	1	1	1	1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
右 前足	B4+B5+C4+D4+D5	5	1	1	3	1	1		3	1	1	1	1	4	2	2	4	3	1	
左 後脛	A3+B4+B5+C4+C5+D4	1	1	1	2	1	4	3	2	3	1	1	1	4	3	1	2	1	2	
右 後脛	A1+A2+B4+D4+F4+G5	2												3	1	1	1	1	1	
左 前脛	D5+E4+F5	25	6	6	9	8	15	10	5	5	13	16	7	6	13	6	18	13	9	
右 前脛																	20	15	11	
左 後脛	G5																			
右 後脛	D5+E5	1	1	2														1	1	
左 前脛	F4+F5+G4+G5	1																		
右 前脛	E5+F4	1																		
左 後脛	C5+D4+D5+E4*+E5	2	1	2																
右 後脛	B4+B5+C4+D4+D5+E4	2	1	3																
左 前脛	B5+C4	1																		
右 前脛	A3+C5	1																		
左 後脛	E5+F4+F5+G5	1	3																	
右 後脛	D4+E4	1																		
計		6	6	8	6	2	4	4	4	5	6	2	5	3	3	6	5	6	1	

At: 第1頭節骨、Sea: 尾節骨、Hum: 上腕骨、Ul: 天骨、Ra: 肘骨、Mc: 閕骨、In: 肩骨、Fe: 大脚骨、Ti: 指骨、Cal: 手指骨、Ast: 股骨、Mt: 胫骨

\*: 角は断面をもつ角片もしくはそれをつける頭蓋骨片

では頭骨による資料はあまりに少なく、雌雄間の量的な比較をみるまでに至らず目下のところは不明というより他はない。なおシカに関連して角のことであるが、その出土状態は表記にもみられるようにあまり多いものではない。断片を合わせて25片、このほか人為的な切断痕のある角片が6個、頭骨片に角をつけるもの(E4・III、D5・IV)二例、これには截断角の角座がのこされていた。普通よくみられる落角(自然)を利用した残欠の出土はA5・Vで1個採集されたにすぎなかった。

幼獣骨の存在については、歯牙でみるとシカの頸骨歯牙が多いためか乳臼歯を残植する標本多く、イノシシはこれに比べて少なくシカの約半数位と思われる。

以上のべたイノシシ・ニホンジカの遺存骨にみられる量的な差や幼獣・雌雄の問題は、貝塚構成時の狩猟活動の性格を知る上の重要な論拠の一つとなるものであり、それだけに結論を急ぐことよりも、なお多くの比較資料の累積を果してゆきたいものである。

#### クジラ類

脊椎骨関節板片 D4・III (1~2層間層)

肋骨片? E5・III (混土貝層5)

#### カワウソ

頭蓋骨片 B5・IV (混土貝層2)

右側上腕骨 C5・IV (貝層2)

右側桡骨 D5・VII (貝層下土層)

#### イタチ

左側上腕骨 D4・III (1層上半)

右側尺骨 C4・IV (1層上半)

小さいため若干の破損をうけているが全体はよく保存されている。貝塚産の小獣類としてイタチの出土する例は珍しい。III~IV層に出土しており、獣類捕獲活動の多様性をうかがわしめる資料である。上腕骨全長42.2、尺骨最大長38.1。

#### タヌキ

獣類で野生種としてはイノシシ・シカに次いで多くの遺存体を残していたもの

であり、顎骨だけでも上顎骨（右側1個）、下顎骨（右側4、左側4個）が各層にわたって出土したのである。それらを層位別に示せば次の通りである。

I : 左右下顎骨片1・E5（混土貝層5）

III : 左下顎骨片1・D5（混土貝層4）、左M<sub>1</sub>・E4（2層上半）、左橈骨片1・D5  
(混土貝層4)、左上腕骨2・D5（混土貝層2）、E4（1層上半）

IV : 頭蓋骨片C4（1層上半）、右P<sup>4</sup>M<sup>2</sup> 残植上顎骨片1・右P<sub>3</sub>P<sub>4</sub> 残植下顎  
骨1（同）、右P<sub>3</sub>～M<sub>2</sub> 残植下顎骨1・B4（2層）、左橈骨片1・B5（南半  
部混土貝層2）

V : 左P<sub>3</sub>P<sub>4</sub>M<sub>1</sub>・左P<sub>2</sub> 残植下顎骨 D4（3層下半）

VI : 左M<sub>1</sub>・B4（3層下半）、右大腿骨片1・C4（3層上半）

これらの歯牙および遺存骨中には特に性状の異常なるものは見うけられず、そ  
の大きさも歯牙M<sub>1</sub>の全長の計測によると12.5に達する標本が1例（E4・III）、  
他は12.0～12.2前後であったので、本貝塚出土のタヌキはまず縄文文化期貝塚  
産のものとして極く普通の型のものとみてよいであろう。<sup>27)</sup>

#### ニホンイヌ

I : 左C・P<sub>4</sub>～M<sub>2</sub>、右C～M<sub>2</sub> 残植の各下顎骨、左右肩胛骨、同上腕骨、同橈  
骨、尺骨、同脛骨、同大腿骨、同脛骨、その他 肋骨片、指骨若干 F5（  
貝層2）左C、尺骨片 G4（2層上半）

搅乱層：左脛骨片 G5（貝層）、指骨・G4（混土貝層・1層上半）

II : 指骨 E4（混土貝層4）

IV : 左P<sub>4</sub>M<sub>1</sub> 残植下顎骨片 C5（混土貝層2）  
右橈骨 D5（混土貝層5）

V : 左P<sub>4</sub>M<sub>1</sub> 残植下顎骨片 E4（2層上半）

VI : 腕跗骨・C5（貝層4）

VII : 指骨・A1（黒褐色土層）

上記のようにニホンイヌの遺存骨は本貝塚の主要な層位より出土しており、そ  
の遺存骨の量も少なくなかった。このうちF5・Iでは顎骨・肢骨の左右がそろ  
って出土しているところをみると、一個体が埋存していたのであろう。この遺存骨

は若獣のもので、関節部は脱落しており、歯牙摩耗も殆んどみられない標本。下顎骨長（額）は104位である（下顎連合部の一部を欠損する）。他の成獣資料から復原される体形もニホンイヌとしては小型に属するものとみてよい。

この地域の貝塚の調査として最近の覗塚遺跡があげられるが、その第二次調査までは頗著な家犬骨の出土をみていないようであって、この間の様相をうかがい難かったのである。それが本貝塚では、その主要貝層より出土して、家犬使用の形跡と、家犬の性格を初めて確かめることができたわけである。

#### 4.

以上本貝塚出土の脊椎動物遺存体についてのべてきたが、ここで総括をする意味で上記の資料に基く貝塚構成時の、この地域一帯にみられた自然環境とそこで果された採集捕獲活動——漁獵活動——の一端にふれておきたい。

##### 貝塚構成時の自然環境

沿岸水域の状態について； ここでまず注意されるのは、貝類採捕の場所として展開していた水域環境のことが問題となるであろう。ただこの場合、貝塚を構成する貝類相を問題としての論議は、貝類の調査を担当された方の資料分析の結果にまたねばならないことはもちろんであるが、筆者のみたブロック採集土中には、多量のヤマトシジミと、これに數種類の鹹水産貝類をみることができた。したがって、これよりすれば貝塚は淡鹹あるいは混在するような場所、つまり川口のような水域にのぞんで築かれていたものと思われる。そして混在する鹹水産貝類のうちにはコダマガイ・ダンベイキサゴのような外海の砂底質干潮線下附近に棲息する種類が目だつようにみられるところからすると、そうした全く性格を異にする外海の直接影響する海岸も遠くはなかったのであろう。それは恐らく現在の遠江灘に面して見るようなものであつたろう。このような環境はまた魚類種の上から一部うかがうことができよう。すなわち、本貝塚で最も多く出土した種類は既述したようにクロダイであつて、その棲息は内湾川口のような半鹹水で砂泥底質の水域に多く、そのため附近にこれの好漁場のあつたことは容易に想像されるのである。クロダイ程多くはなかつたが、スズキもまた内湾魚であり、しばしば川を通行していくという種類であるから、捕獲される機会もまた時にみられたであ

ろう。この他にギバチ・コイ・ウナギなどの川魚もみられるが、こうした遺存体の比較的少ないのは、淡水域の限られたことを示すものであろう。

以上が魚類骨の大半であるが、なお魚骨中にはサメ類・エイ類・メバルなどの内湾から外海にかけての棲息範囲をもつわゆる海魚の類が含まれる。しかしこうした海魚の骨は、後述するような小魚類の一部を除いて、その量は著しく少なく、捕獲される機会の稀であったことを想わせるのである。漁撈技術の問題はともかく、外洋水系の洗う海岸線は、おそらくすでに今日みるような単調な砂浜による海岸として形成されていたものであろう。

陸上の景観について；陸産獸類の遺存骨はその全体量かなり多く、シカ・イノシシを始め種類も少ない方ではなかった。それらのなかでも森林棲のシカ・イノシシの遺存骨は多く、この地域一帯に闊葉樹林の発達していたことを推定し得るのである。それにまた森林でも、特に入江や河谷に面するような場所に好んで棲息するタヌキの骨のやや目立ったこと、更にカワウソのような水辺に極く近く棲息するもののみられたことは環境の面からも注目されることであろう。このカワウソやタヌキ・イタチなどは水辺にあってカニ・魚貝類、特に魚類を非常に好む。これまでのべてきたような本貝塚近域の自然環境のことを考えてみれば、これら獸類の捕獲がおそらくこの貝塚をあまり遠く離れた所で行われたと考えなくともよいし、また間接的には河川沿岸の魚貝類棲息状態を示して興味深いものがあると言えよう。

### 漁獵活動

漁撈；水産資源ではまず貝類の採捕が手広く、また年令や性別にあまり関係なく果された仕事であつたろう。しかし、それは彼等の居住地に最も近かつたと想像される川口入江に面してのヤマトシジミ採捕のためのことであつて、干潮線下とは言え、外海の波打つ浜でのダンペイキサゴ、チヨウセンハマグリ、コダマガイなどの採捕と言うことになれば、おそらく労力的な制約をかなり受けねばならなかつたろう。もっとも、こうした貝塚の生活資源上での価値觀には、技術面のみの問題で説明できない慣習的、制度的なもの更にあつたかも知れないということを考えられよう。しかし、こうしたことの要因の一つとして、上記したよう

な環境の諸条件を考えなければならないであろう。

魚獲活動についてみると、クロダイ漁が中核となっていたことは先ず考えられよう。クロダイの生育、棲息に適した環境の展開、そして捕獲に都合のよい沿岸性の魚であること、それに場所にもよるであろうが、比較的年間を通じて捕獲される機会の多い魚であること、などが捕獲を多くし、また容易にした要因であろう。

採集された骨のうち、非常に目立ったのは既述したように、かなり大型になるもので、その捕獲には骨製の尖頭器にみるようなヤスで刺突する方法が充分可能であつたろう。同様にして、ギバチ、コイなどもその対象となつたであろう。しかし、こうした魚が主として浅い水域ではあるが、中層から下層にかけて棲息し、それにこれらの魚が一般にあまり群生しないというような生態条件を考えてみると、ヤスによる刺突漁法を単独に行うことよりも、あらかじめ簡単な曳網類を併用して、砂泥底に餌を捕食し、あるいは深淵中に潜居している魚を浅瀬にまで誘導し、しかる後にヤスを使って刺し捕るというような方法も案出されたと思われる。本貝塚出土の人工遺物中に釣漁具とみられる遺物を発見し得ないために、釣漁が全く行われなかつたと断言してしまう程、この漁法にとっての制約された自然条件を特に考えられないものであるが、むしろこのことが浅海砂泥底という水域環境を背景として既成された漁業慣習の根強さを示しているのであろう。

漁法の問題と関連するが、本貝塚からは小型魚類の脊椎骨、その他の骨がブロック採集土のフルイ操作によって検出されている。これにはカタクチ・ウナギ・タイ科・コイ科のものが含まれ、椎体長が大きくて2.5～3.5程度のものである。それらは既述のように僅少のカタクチ、これに比べてやや多いウナギ、その他はタイ科・コイ科の小型あるいは稚魚と思われるものである。カタクチの少ないのは骨が小さく、骨ごと食用に供されてしまう結果からかも知れない。しかし海魚の非常に少ない本貝塚での魚類相から考え、また幾つかの貝塚における事例と考え併せてみても、特にカタクチの魚群だけに対する捕獲活動が活潑だったということ——たとえイワシの群につく「餌付き」のような現象を予想できるにしても——を積極的に考えるのには躊躇するのである。クロダイは二才仔の（全

長15cm前後)カイズとよばれる位の体形のもの。ウナギと共に河口あるいは河口出口の入江でもっぱら網漁法——ウナギなどの筌漁法は早くよりみられたかも知れないが、質立漁法などがどの程度行われたかはなお種々問題のあるところでであろう——によって捕獲されたのであろう。最も簡単な網である徒歩敷網・徒歩曳網の類は浮子、沈子を特に必要としないが、底質や水深の条件によっては舟を利用しての網の設置が必要となつたであろうし、その際には沈子が心要となり、遺物にみるような各種の石錘類も、こうしたこととのための漁具として考えられてくるであろう。

魚類中、次に主として海洋魚に関する事であるが、これらの遺存骨が非常に少ないことは既に述べた。こうしたことを、当時の漁撈活動があまり外海域への範囲まで行動する心要のなかった結果であるというように説明されはするが、むしろ事実はこの地域においての当時の漁法としては、遂に克服することのできない技術上の制約を多く受けねばならなかつたためであつたというのではなかろうか。こうしたことの一つには、海岸地形および底質の様相のことがあると思われ、恐らく当時、現在の浜名湖より東、御前崎に至る間にみるような緩傾斜、砂底質、単調海岸が形成しつつあつたはずであり、かかる水域の通例として、沿岸底には介藻類の生棲が豊かでなく、従つて捕獲に容易な沿岸定着性の魚類棲息条件に制約され、しかも原始的な漁撈にとって最も重要な条件たる漁撈活動上の沿岸地形の利用ということのためには好適でなく、結果として漁撈面の制約が意外に大きなものになつてゐたのではないか、ということを考えられてくるのである。そして、やがてこうしたことが漁撈全体を内湾的なものに規定していったのではなかろうか。

狩獵；本貝塚出土の遺存骨から査定された陸産獸類7種、後期の貝塚としては普通この程度の種類は知られるであろう。そして、これらのうちシカおよびイノシシが圧倒的に多くの遺存骨を残していたことも他の貝塚の例外ではない。そして更にその中核となつたのはシカ獵であったことは、既にみた遺存骨の数量より先ず確実であるとみられよう。もっともこのことを以つて当時この地域にニホンジカの多棲した事実の証拠とするにはなお問題の残されていることを指摘される

であろうが、それはともかく、シカの利用価値が他のあらゆる獣類に比して高いものであったことは注意されねばなるまい。食料資源・衣服原料として重要なことは言うまでもなく、更に鹿角およびシカに特有の長く直ぐな掌蹠骨は各種の佩飾品、道具、利器の製作に欠かせない材料となっていること、こうしたことを見書きするものとみてよいであろう。ところで、このような大型獣類の狩猟が、どのような規模と集団によって、そしてどのような技術的行動によって果されていたものなのか結論めいたことをのべる段階にまで今日はなお至っていはず、問題の残されていることに気付くのであるが、民俗事例の中などには興味深い二、三の例をみるとがきよう。いったいシカにしても、イノシシにしても、それが必ず通るという路がある。これをよく「タツバ」とか「タツマ」と呼んでいるのであるが、そこで一方でここに待ち伏せ、他方この通路へ追い込むようにしてゆく。待ち伏せていて通過するのをうつ方法もあるし、その通路に「ハネワ」(跳民)という立木と藤蔓もってバネ仕掛けをつくり、頭を振り上げてしまうような方法や、2～3m位の穴を掘り、これの底に尖らせた青竹を立てこれに落ちると同時に刺殺するという方法など、いずれの方法が行われたということはともかくとして、種々工夫され実施されたことであろう。それにしても、シカ・イノシシの居所をつきとめ、これを追い出し、追跡することは容易なことではない。そこには当然集団的な活動の行われたことを考えねばならないが、これと共に狩猟犬の活躍には大いに期待がかけられたと思う。シカの追い出しにはおそらくそのすぐれた能力を發揮したであろうし、イノシシのように体力、智能にすぐれたものには優秀なイノシシ犬がどうしても必要であったろう。

シカ・イノシシを除いては、タヌキが多かった。タヌキはキツネなどに比べると警戒心が少なく、人にその姿をしばしばみられるような所にでてくるものである。こうしたことが比較的捕獲の機会のみられたことの原因ではなかつたろうか。よく黄昏時丘陵や樹枝に登ったのを犬に追わせて噛殺させたり、棲穴を掘つて追い出し、これを「ウサギあみ」のようなものにかけて打殺するというような方法はおそらく行われたであろう。本貝塚の自然遺物にみられる動物相について、更にこれより考えられる狩猟活動の様相については、なお述べねばならない

問題が残されているが、比較資料も少なくまた例えは先年來調査されている浜松市蜆塚遺跡の報告などとも比較したく思うし、それらの公刊されるのをまつてまた論じてみたいと思う。

(金子浩昌)

註

- 1) 本文において以下プロック採集土といわれているのは、すべて E4・第2層よりのものでその量は約25立方cm 前後である。
- 2) 西村正衛・金子浩昌、千葉県香取郡大倉南貝塚 古代 21・22 号 昭和31年
- 3) 日本人類学会: 本会創立70周年記念室之内貝塚リ・ヘ・エ地点発掘報告(西村・玉口・金子) 人類学雑誌 65巻・5号 昭和32年
- 4) クロダイのものと確定できないが、タイ科の脊椎骨で多くのものがプロック上中に含まれている。おそらくカイズといわれるような幼魚であると思うのであるが、これについては本文の後刊にふれておいた。
- 5) 本貝塚で目立ったウミガメの骨は、先年來調査され、既によく知られている浜松市蜆塚遺跡でも報告されている。第二次発掘資料までによると、その量は一小印片が出土したといい、それが甲板薄く、小型のものであったと推定されるというから、おそらく本貝塚資料類似の遺存骨であったのだろう。浜松市教育委員会: 貝塚遺跡 その第二次発掘調査 昭和33年
- 6) 出土遺存骨の量をみると、遺存骨を種分けすることが必要である。しかし、この場合すべての骨を正確に分つことはかなり難しいことになるわけで、ここでは便宜的に表示するような11部位の骨を対象とし、更に各骨は遺位・近位いずれかの関節部を残す骨のみかぞえて、中間骨体部のみの骨はたとえ種名が判明しても加えなかった。従って表記載のものにはこの両端部位をもつ骨があるわけで、厳密にはこれを区別しなければならないが煩雑をさけるために一様にとりあつかった。こうした方法は今後多くの資料で、しかも層位ごとに厳密に区分された骨で行われれば、かなり興味深い資料をえることができるのではないか。なお膝骨、脛骨は小型の骨で、しかも他の骨のように折損することが少ないので、肢骨の量的な目安をえるのには都合よい骨である。
- 7) 長谷川昌人: 石器時代の猩 人類学雑誌58巻 3号 昭和18年

附記 括弧中の層位名称は、発掘調査の過程で仮につけた名称である。したがつてここでは統一的に用いた I ~ IV 層までの名称のみを使用すべきである。読者のために一言注意しておきたい。

(田集者)

## 6. 出土遺物の概観

### A) 土 器

各層位から検出された土器群がどのような出土状態を示しているかは、土器編年の基礎的作業として最も重要なことである。

各層位と各土器型式との関係は、第7表に整理してまとめてみたので、表によつて知られる事実を概観してみよう。なお、表では一つの層内に包含された土器全体の量を100として一層内における割合が、どのような状態を示すかを百分率で示すことにした。また出土土器の分量はリンゴ箱20杯であるがその中で土器型式の内容は、識別の最も容易な精製土器のみに限定した。この表によると各層にいくつかの土器型式が混在していたかのようにみえるが、量的にそれぞれの層で主体をなす土器型式があることがわかる。次に表にしたがつて説明を進めて行くことにする。

第8層、第7層においては壺之内式土器が主体をなし、第6層、第5層においては加曾利B式土器が主体をなし、第5層には媿塚上層式土器が主体をなし、第4層、第3層は共に宮瀧古式土器が主体をなし、第2層から表土層にかけて宮瀧新式土器が主体をなしている。

その他、表土層、擾乱層では一つの文化層としてとらえることが困難であったが晩期縄文土器も若干出土をみた。それに反して最下層からは、前～中期縄文土器が少量ではあるが出土をみた。これは第8、第7、第6の各層の基底部に混在の状態を示していたが、これらの土器は西貝塚に初めて生活の場を持った人々によって残されたものである。

第5層では、加曾利B式土器と媿塚上層式土器とが量的にあまり激しい差がみられないことは、加曾利B式土器が第5層の南半に多く、その反面、北半の層の上部には媿塚上層式土器が多いという事実によるものであろう。

また媿塚上層式土器は第5層に多く、第4層、3層へと移行するにしたがつて量的に少なくなっている。一方、宮瀧古式土器は第5層に少なく、第4層、3層へと漸増の状態を示している。これら二つの土器型式の関係は、媿塚遺跡調査以

第7表 層位別にみた土器型式包含比率表

層位	土型 器式	晩文 期土 器	宮式 淹土 新器	宮式 淹土 古器	観 塚式 上土 肩器	加 曾式 利土 B器	壺式 之土 内器	前 縄・文 中期器	その 他の土 器	精 器片 上数	
表土 擾乱 層	○11	●43		△15	△9	△2	△4	△2	14	50	
第1層		●81			△5				14	38	
第2層		●81	△6			△13			5	32	
第3層			△25	●54	△7				14	174	
第4層				●42	△35	△21	△1		1	182	
第5層					△16	●42	△32	△7		3	65
第6層						△14	●57	△11	△4	11	28
第7層			×11	×20	×23	△13	●16	△2	15	61	
第8層			×18		×	9	△11	●51	△11		47

(註) ●, ○=確定な資料 △=準確定な資料 ×=不確定な資料

なお、土器片数以外の数字は、%の割合を示す。

来最も興味深く、問題の多い土器型式として注意されてきたのであるが、その関係は土着の土器としての性格が強く、漸移的な変化を示すものとして認識することができる。ある。

以上で層位的な関係と土器形式の関係を第7表を中心として簡単に説明した。

次に土器形式の内容を最も新しいものから順を追って説明して行こう。

#### 晩期縄文土器（挿図第6, 1～8）

共通した特徴は、器面に貝殻腹縁を原体として施文された条痕を主とする文様がみられる。器壁の厚さ約5mmでいずれも焼成良好で淡灰色をなしている。土器片8個の資料のうち1, 3が水神平式土器、4の隆帯文のつくものは、愛知・吉胡貝塚において山内清男氏が晩期新として指摘されたものである。また5～8はいずれも晩期初頭から中葉にかけての土器型式に認定される。

#### 宮淹新式土器（挿図第6, 9～第8, 71）

土器型式の内容は、文様、器形共に種々な変化が見られ、かなり充実してい

る。最も一般的な特徴として表面に器面調整のための、荒い条痕、または擦痕が走っている。精・粗製土器の一部には全くその特徴を認めにくくものもあるが、全体の傾向からすれば僅かな量である。

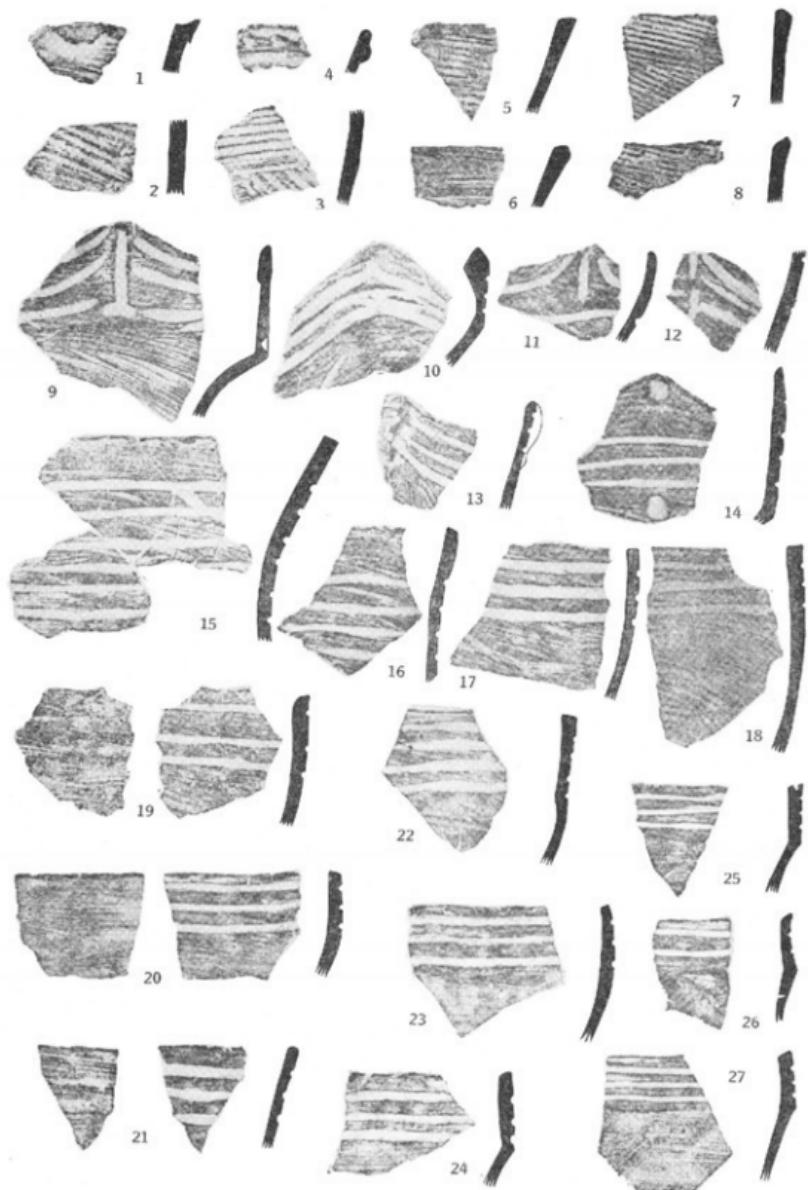
宮滝新式土器における精・粗製土器の比率は精製土器53%、粗製土器47%で精製土器がやゝ多い。しかしこの中には厳密な意味では半精製土器と言われるものも含んでいる。

精製土器には文様、形態、共に最も普遍的にみられるものと、かなり特異なものとの二つの要素がみられる。精製土器の43%が普遍的な土器であり、残りの10%が特異な土器である。

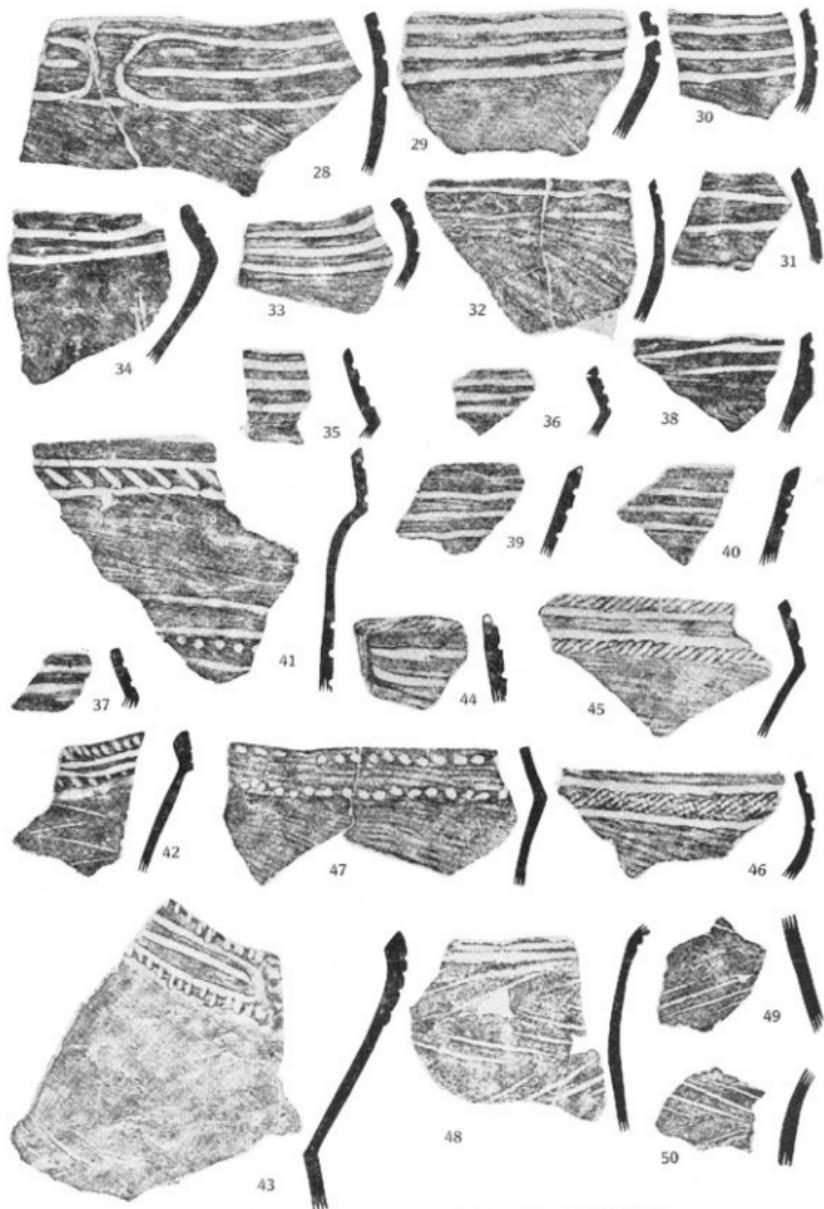
普遍的な土器の大部分は、平らな口縁に沿って普通三条の平行沈線がめぐらされている。この平行線は二条または六条の場合もあるが（15、26、31、32、38）部分的に文様構成を整える意味で上下に沈線で結び、一見工字文風にしたのもみられる（挿図第16、14）。大きな意味でこの類例に属するものは、28のような文様構成をとり、魏塚遺跡出土のものにも類例が知られているものである。この文様のつく器形は、一般に挿図第16、13のような単純な深鉢の形態をとるか、または挿図第16、14のように胸部がくびれるもの等が考えられるが、基本的な形態は深鉢形である。小さな変化をとらえるならば17～23のような口縁が直立するもの、24～27、34～38のような文様帶の下で段を区切って稜のつくもの、やや内傾する土器等がある。

他の波状口縁のつく精製土器は7%である（9～14）。この波頂部の特徴は巻貝が垂直に引きおろされたり、巻貝の頭で押しつけたりしているが、一例だけこの部分に突起のついたものがある。しかしこの中には、所謂扇状圧痕は一例も見られない。特異な精製土器は普遍的な上器と同じ器形に縄文（44～46）、刺突文（47）等がつくものや、縄文と沈線文と組合せた特異な文様のついた土器（51、52）等があつて注目される。この土器の口縁の波頂部の突起はかけているが、恐らく53、54のような瘤状の突起がつくのではないであろうか。

小さな波状であるが、安行Ⅱ式風の土器（56）は宮滝新式土器と関東地方との時期的な併存関係を知る手がかりとして貴重なものである。直接的な関係におい



— 40 — 摂図第6. 晩期縄文土器および宮窯新式土器(縮尺1/3)



擇 図 第 7. 宮流新式土器およびその他の土器(縮尺5)

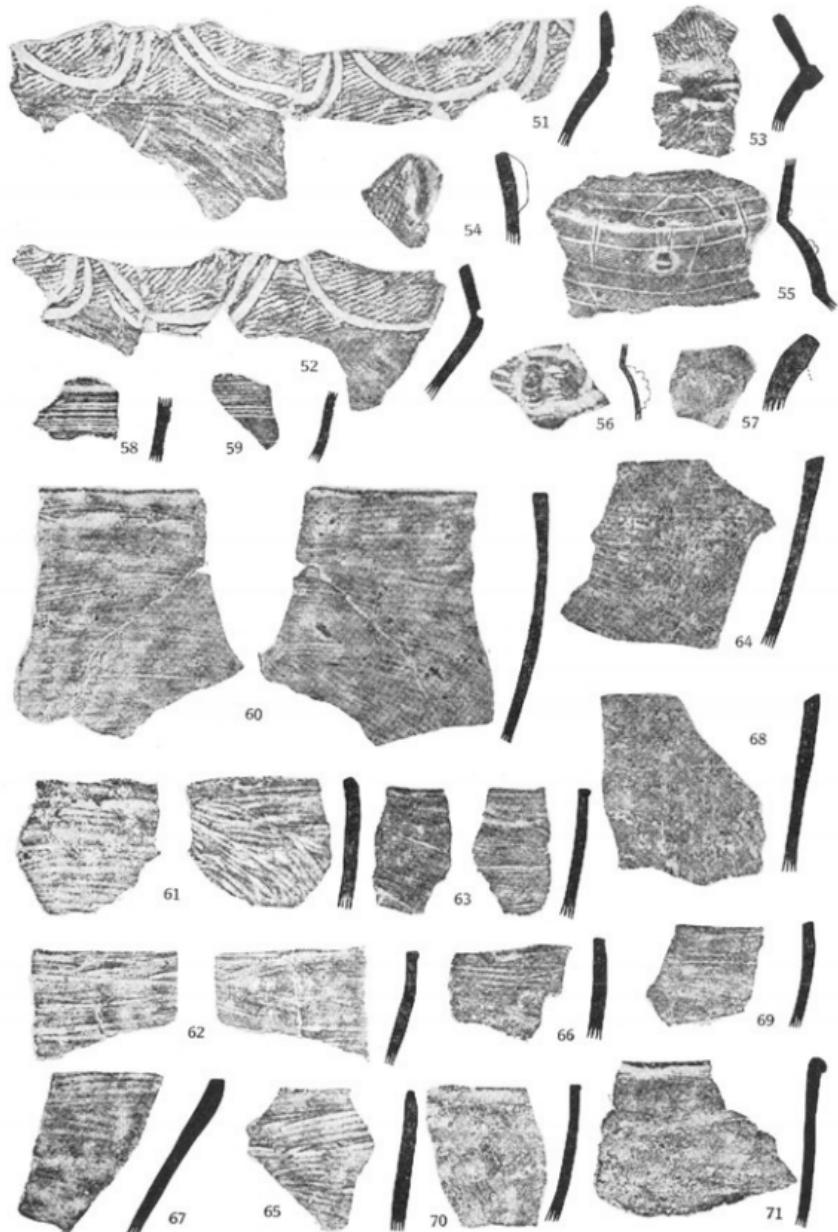


图 第 8. 宫 遷 新 式 土 器 (放大)

て理解される安行Ⅱ式風の土器はその他に55であるが、これも細い平行沈線と磨消繩文帶によって特色づけられた小さなきざみのある崩をもつている。

櫛状の施文具を用いて平行沈線をつけた土器(58、59)は観塚遺跡の調査において晩期前半に伴うものと想定されていたのであるが、この二片の土器は宮滝新式土器を集中的に包含する第一層中に含まれていたものである。この類の土器の時期的な帰属については今後より一層の検討を加えたいと思っている。

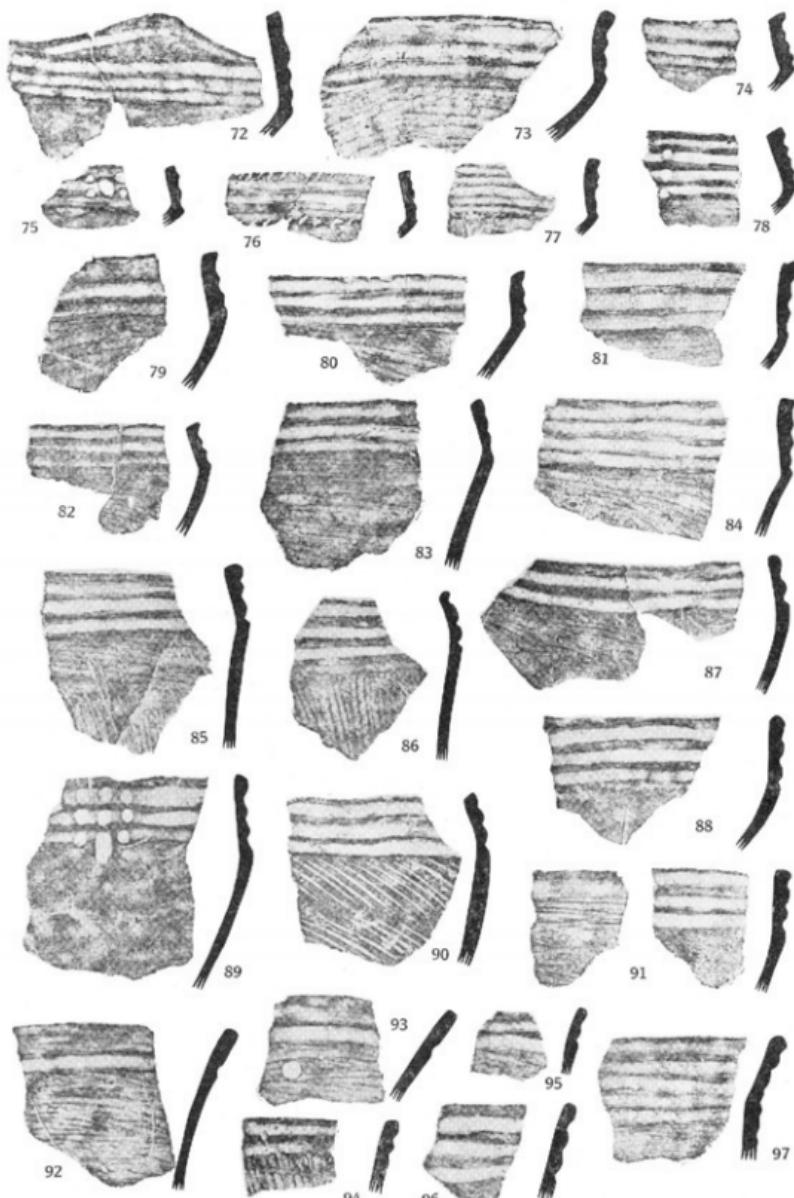
一方、粗製土器は単純な深鉢形の器形で口縁は直立するものが圧倒的に多い。口唇部が平に整形してあり、そのため口唇部上の粘土が外面にはみ出している(71)。これは無文土器の特徴の一つであるが、この時期の最も一般的な特徴は、条痕あるいは擦痕が内外面にみられるものが多いのである。

器壁の厚さは6mm～9mm位のものが普通であるが6mm位のものが最も多い。挿図第8、56の土器は薄く3mmで特例に属する。色調は灰色がかたった淡黒色のものが多いが、粗製土器には二次的な火を受けたためか褐色をおびたものが多い。焼成は一般に良好、胎土中に微砂を含むものが目立っている。

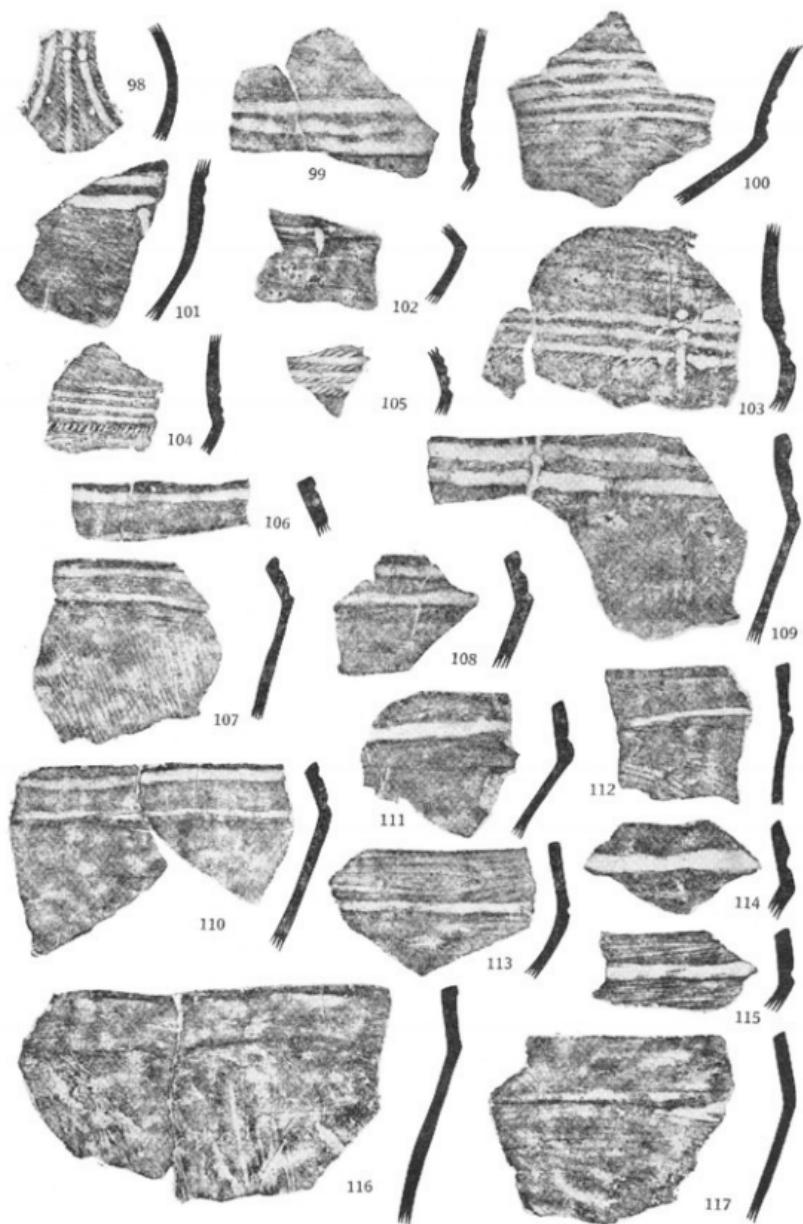
#### 宮滝古式土器(挿図第9、10)

土器面が箆で研磨されているのが特徴的であり、宮滝新式土器と比べて条痕あるいは擦痕が殆んどみられなくなること精製土器の沈線の輪廓がゆるやかになることとがあげられる。精・粗製土器の関係は精製土器47%に対して粗製土器54%である。

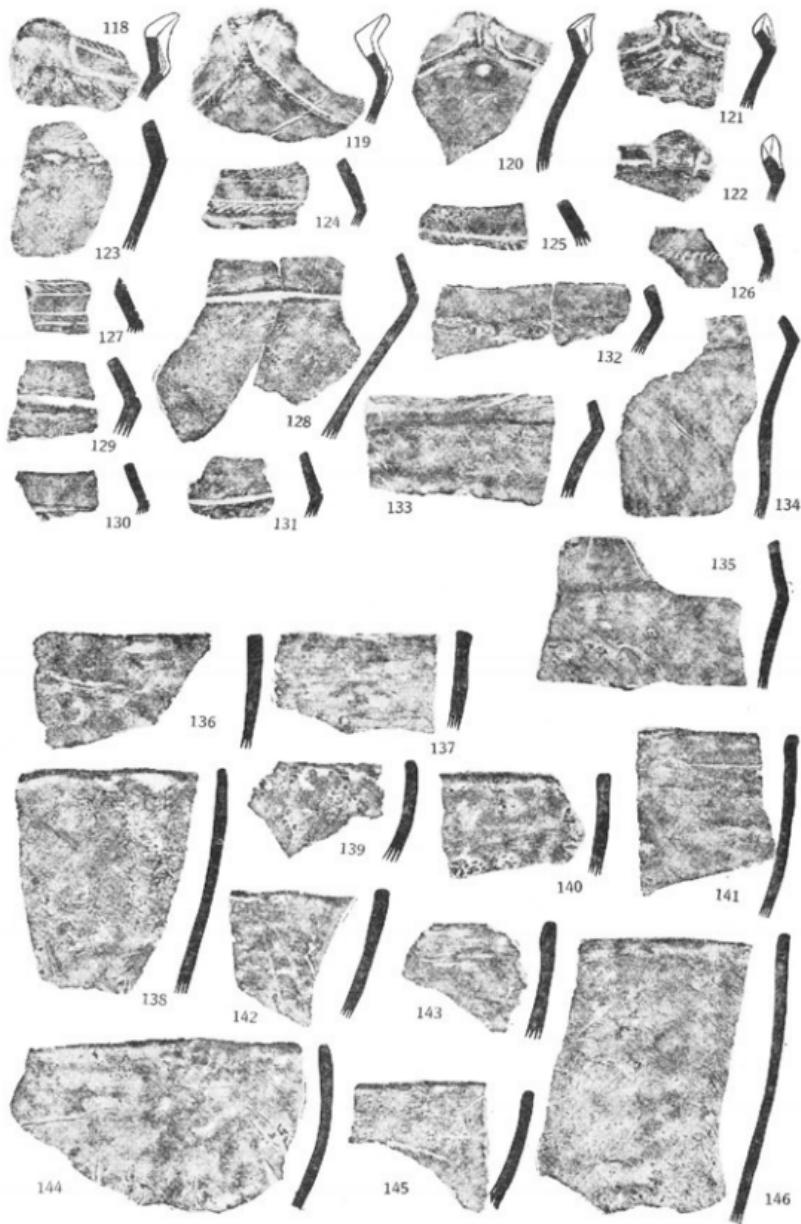
精製土器は口縁部附近に文様帶がみられるものを総てこの中に含めてしまったためその量的関係はきわめて多くなっているが、数条の平行沈線が文様としてみられるものは44%である。沈線文は一条から五条までの多くのものにわたっているが二条から三条のものが最も多い。これらは巻貝等をひきびってつけられた宮滝新式土器とは異り幅の広い浅い沈線の輪郭のはつきりしないものが多い。極言するならば沈線の中にさえ研磨が施されているかのようにみられる。文様の一部には、明らかに先端の円い棒状の原体で押しつけたものとみられるものがある(75、78、89、98、101、102、103)。文様の主要部には扁状压痕文は一例もない。僅かではあるが平行沈線の端に沿ってきざみのついたものがある(76、77、



圖第9. 宮漁古式土器 (縮尺5分)



擇圖第10. 宮窯古式土器 (縮尺1/3)



擇図第11. 観雲上層式土器および宮窯古式土器(縮尺3)

98、103、104、105）。この文様のつけられる位置は器形に対して口縁部、胴部が多いが、中でも口縁部には文様の集中的な施文が見られる。

器形は鉢形を基本形態とし、その中に浅鉢形、深鉢形、注口土器の種類がみられ、挿図第 16、7 はその一例である。

深鉢形土器の平らな口縁をもつものを細くみると、(1)口縁部がゆるく外反するか直立に近い 92～97 のような土器と、(2)口縁部がゆるいカーブで内反する 79～91 と、(3)口縁部がはつきりと屈曲して内傾する挿図第 16、11 や 106～117 等がある。この中で (1) は 4% (2) 30% (3) 10% である（他に波状口縁の深鉢形土器 1% がある）。したがって宮滝古式土器の精製土器 47% のうち深鉢形土器 45% の割合を示している。浅鉢形土器 1% は僅かな量であるが挿図第 16、8～10 に示した他 73、77、99、100 等の例がある。

以上が精製土器の中で最も普遍的に見られる深鉢形、浅鉢形土器であるが、その他に特異な深鉢形を呈する特徴的な挿図第 16、12 や挿図第 7、42、43 等がある。これらはいずれも波状口縁の状態をとり、口縁部附近が一段とふくらみをもった文様帶となり沈線、突起状の隆線がついている。

粗製土器は (136～146) いずれも無文であり、僅かに荒い擦痕が目立つ程度であって器形はいずれも単純な深鉢形をなすものようである。したがって口縁部はゆるいカーブをえがきながら直立し、末端はまるみをおびていて、宮滝新式土器のように口唇部直上を意識的に平にしたものはみられない。

色調は褐色味をおびた淡黒色をなし、焼成は良好、器壁の厚さは 6mm～9mm 位のものが一般的である。

#### 壺塚上層式土器（挿図第 11、118～135）

「く」の字形に弯曲した口縁部のまがり角に一本の細い沈線をもってえがかれた文様構成を主とする土器群によって特徴づけられるが、まだその組成全体は明らかにされてはいない。

口縁部はいずれもその特徴的な弯曲を示し屈曲部上端に一本の沈線がつく 129～131、沈線の下にきざみがつく 125、126、さらに縞文がつけ加えられた 118、119、刺突文がついた 123、無文の 132、134 等がみられる。また口縁部の状態

はゆるやかな波状口縁をなし、その波頂部の先端が円形のくぼみをなすものもある（118～121）。

なおこれらの土器型式の内容は、まだ量的に不十分であるためその比率を出すことはさしひかえた。いずれにしてもこの型式が宮滝古式上器の直前に位し、次に説明する加曾利B式土器の発展として、著しく土着性の強い上器群であることには、異議をさしはさむことはできないであろう。

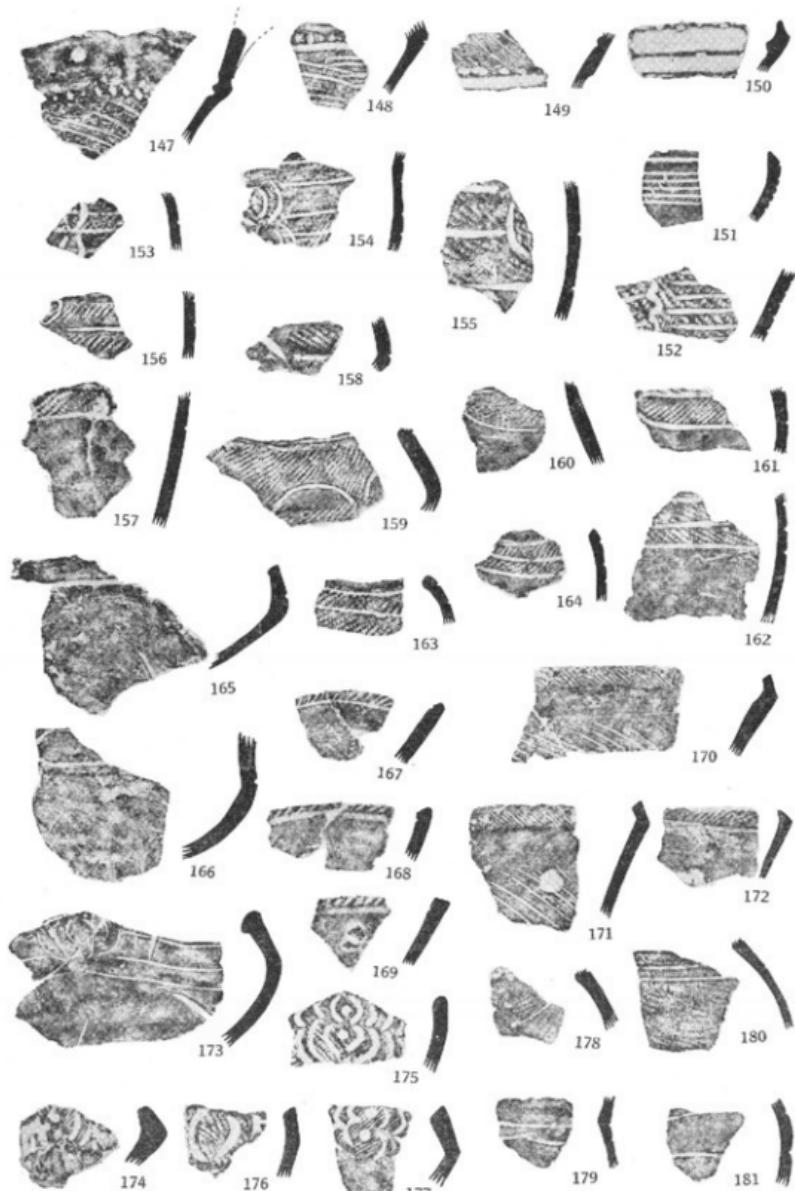
#### 加曾利B式土器（挿図第12）

この型式に含めたものは便宜的に関東地方の編年を利用した。したがつて厳密な意味での型式名を検討するならば土着の様相の強いものもみられるし、また西日本における三万田式土器風のもの、また純粹に加曾利B式土器（この型式はさらに細分されるが今はその点にふれないことにする）等がみられる。精・粗製土器の比率は精製土器56%に対して粗製土器44%である。

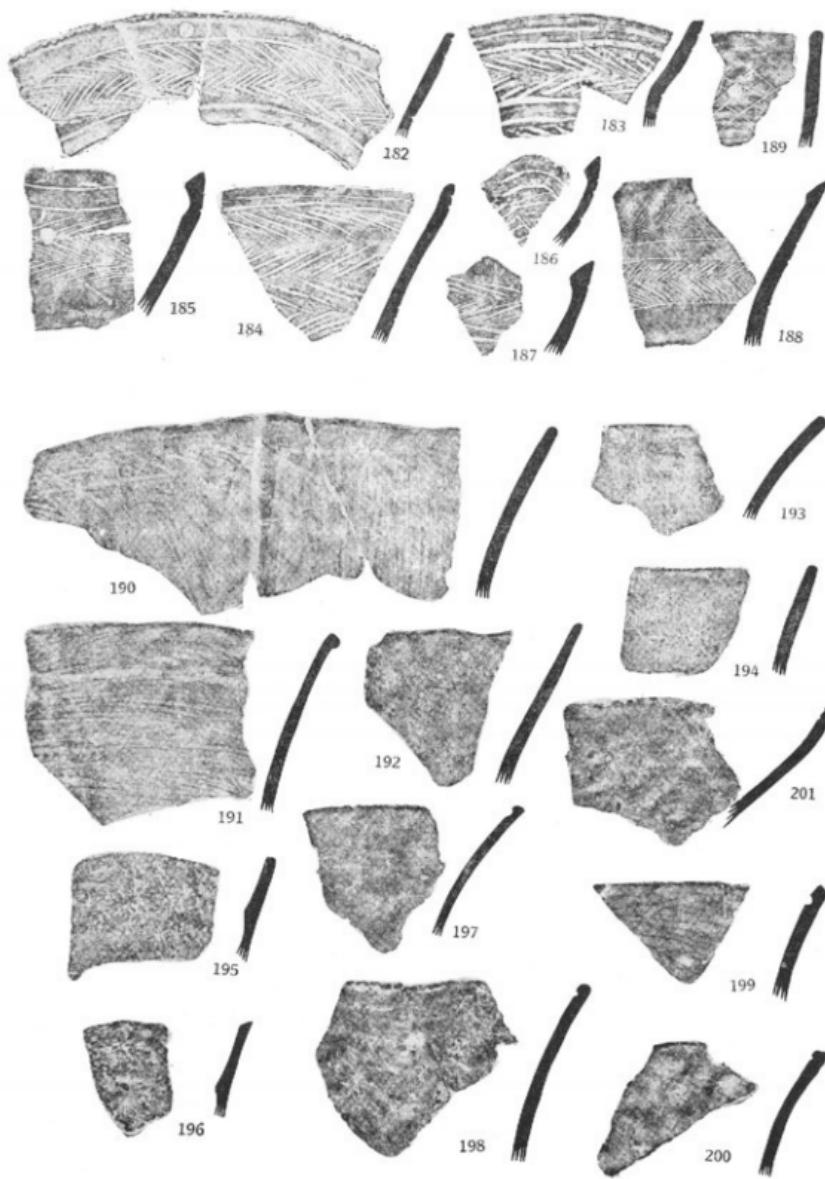
精製土器の内容は、関東色の強い土器（147～157、182～189、挿図第16、1、4～6）は24%である。そのうち加曾利B I式土器に並行するものは挿図第16、1や150～152までである。それらは口縁部内側に沈線をもつか、または土器面に縄文と沈線の併用か、細い樹状工具によって引かれた文様構成をとる。加曾利B II式土器に並行するものは挿図第16、4～6や147～149、153～157、182～188等があり磨消縄文帯をもつ縄文と沈線の組合せた中に特徴的な円弧の文様がみられるものと、綾杉状の沈線文とである。土器表面はいずれも研磨されたためか幼黒色をしている。

西日本における三万田式土器風のものは5%である（167～169）。これは口縁部裏面に一本の沈線ときざみとの併用したものである。津雲A式土器の発展した特徴をもつ縄文土器は3%である。174～177までがこの類に入り、口縁部附近に集中する文様帶は断面が一段と厚くはない。これは先の加曾利B II式土器とした類に伴なうものである。

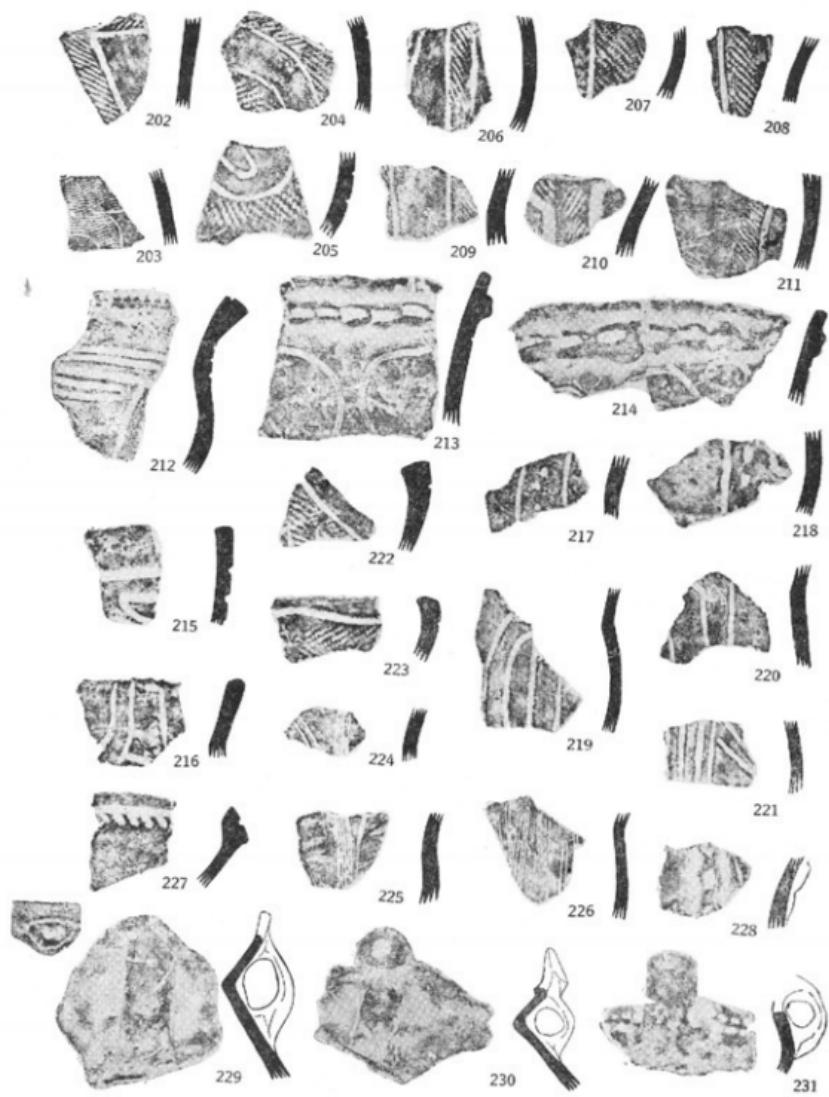
その他磨消縄文帯のつく土器は14%である。159は明らかに磨消縄文帯中に弧線をもち峠塚上層式土器としての性格が強い。また疑似縄文のつく土器は3%である。178、180、181はこれにあたるが加曾利B式土器、あるいは峠塚上層式



插圖第12. 加曾利曰式土器(縮尺)



擲 図 第 13. 加曾利B式土器および壺之内式土器 (縮尺3分)



插圖第14. 窩之內式土器(縮尺)

に含められるべきものであろう。なお口縁部だけに縄文帯をもつものは3%である。170～172まではそれに含まれるが胸部にいたって沈線を多用するものがある。この土器の帰属は不明であるが同様に加曾利BII式土器か、または蜋塚上層土器に近接した時期に該当するものであろう。

粗製土器の器形は挿図第16、3に示したような形をなす深鉢形である。口縁部の破片は190、192～196のような断面を示す外反した形が多いが胸部にいたるまで一度つぼまる器形をとるもののがみられるようである。しかしいずれも器形は単純である。土器面は窓で研磨したかと思われる痕跡がやや目立つ。

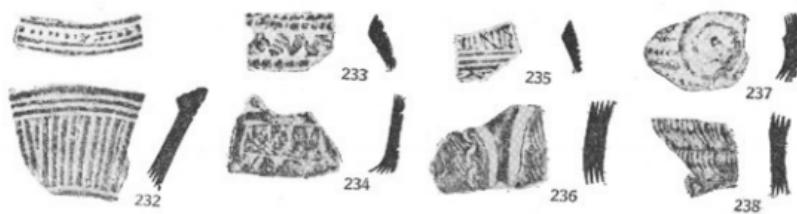
#### 堀之内式土器（挿図第14）

器壁は一段と厚くなり沈線と縄文と特異な突帯をもつ土器群である。その内容を比率によって表わすほどの量ではないが精製土器片25、粗製土器片22、計47片を数える。202～208、229～231等を除き殆んど統て関東地方の堀之内I式土器に並行する土器群である。したがってこれらを一括して説明して行くことにする。

精製土器のうち202～208までの縄文帯をもつものは、おそらく堀之内II式土器に含まれるものであろう。しかし203はひとまず保留しておくことにしたい。

この遺跡で最も特徴的な堀之内I式土器に並行する土着の土器は213、214のような口縁部附近に太い隆線をもち、その上に刺突文がつく文様帯をもった土器群である。この土器の口縁部から胸部にかけては太い沈線の筆書きがみられる。217～221の胸部の破片は上記の沈線と異り、土着の土器としての特異な文様帯がつくかどうか不明であるが、文様構造、ならびに器壁等からするとその可能性は少い。この文様をもつ土器と組成をなすものはおそらく205～211、または224～226等がそれに当るものであり、215、216、227も同様であろうと考えられる。228は特異な突帯が上下に走る唯一の例であるが、これは深鉢形土器の口縁部から肩部にかけてのものであろう。これに反して213、214は口縁のやや聞く浅鉢形になるものであろう。

環状把手のつくものは229～231であるが、注口土器の形態をとるものであろう。



插圖第 15. 前・中期 圖文土器(縮尺)



插圖第 16. 型式別形態集成圖

222、223 の土器は磨清縄文帶があり 特徴的な口縁部の 断面をなすことからあるいは称名寺～中津式土器等に関係をもつものであるかもしれない。

挿図第13、197～201 の無文粗製土器は口縁部裏面に浅い沈線を有することから堀之内式土器に含められる。

#### 前・中期縄文土器（挿図第15）

これらの土器は貝層下から出土したものである。236は加曾利E式土器の特徴をそなえたキャリバー形の胸部破片である。238の爪形文土器は関西色の強い中期前半の土器である。232～235は柏窪式土器ともいべきもので、中期初頭の特徴をそなえている。それは三角形陰刻を特徴とし、それに竹管状工具による文様が施されている。237は連続的な竹管文を施文したもので前期末葉の時期の土器である。

西貝塚出土の最古の土器は前期縄文土器であるからその頃からすでにここに人の生活が営まれていたことがわかる。統いて次の中期縄文土器も量的には少いがやはりこの遺跡から出土していることを考えるならば、時代的に連続した生活がみられたといってよいかもしれない。その土器型式からするならば中部地方や東海地方に多い土器型式を出土しており、その地方の一遺跡としての認識をもつことが可能であろう。

次の後期縄文土器は、今度の調査の結果からするならば西貝塚遺跡では最も量的に多く主体をなした遺物である。したがってその時期こそ、この場所で縄文時代のはなやかな生活が展開されたとすることができる。

堀之内式土器には土着の土器としての様相が強いことから、多少の関東的な文化の影響を受けたにしてもやはりこの地方本来の特性をもっていると言うことができるものである。

また次の加曾利B式土器は、直前の堀之内式土器の時期と比べるとやや他の地方の土器の混入が多くみられる。それは関西色、関東色の様相がやや強く認められることである。その状態が時期を追って次第に薄くなりこの地方本来の特徴的な土器——覗塚上層式土器の時期に至るのである。それはこの遺跡に生活していた

人々がこの地方本来の生活——主体性をもって生活していた時期でもあったのである。

さらに次の宮滝古式土器の時期を迎えるのであり次第に関西色の色彩が濃くなって行くのである。宮滝新式土器はさらにその状態が強められたという意味において遠江地方では重要視されなければならない。とは言ってもしかし関西の本場の宮滝式土器と細部は異なるのであり、その大きな特徴の一つとされる肩状圧痕が一つも検出されていない事実を見るならば、関西色が強くなつたと言つてもやはり独自性も持つていたということになるのである。

そのように土器の変遷はこの遺跡に生活を営んだ人々がどの地方との関連を強くもつて生活していたか、あるいは交流していたかということがわかるのである。そういう意味からするならば、この遺跡の土器の変化——文化的な変遷はこの遺跡のみの現象によって理解されるべきものでなく、遠江地方あるいは東海地方、またはさらに一段と広く中部地方との関連において理解されなければならぬのである。

(市原寿文・麻生廉)

## B) 石 器、角 骨 器

発掘によつて採集した石器と骨角器は全部で 254 点におよんだ。石器にしても骨角器にしても、単に形態的な類別を試みるだけでなく、層位別にそれぞれ一括してのべてゆきたい。それによつて石器・角骨器等の諸用具が変遷する過程を跡づけることも可能になろう。

### (1) 石 器 (挿図第 17 ~ 第 21)

石器の種類と層位別の出土量は第 8 表にまとめた。この表について若干の問題があるが、それは遺跡の構造においてわれわれが、発掘調査の際に第 7・第 8 層としていた E5, F4~5, G4~5 区の部分が、第 1・第 2 層の末端を形成することを、出土する土器の特徴と対比して確認出来たことをのべている。したがつて F4~5, G4~5 区の第 7 層・第 8 層に包含されていたものの中には、当然第 1 層または第 2 層に包含されるものがまじつているといえよう。

第 7 層または第 8 層出土のものとして扱つたものの中、第 1 層に帰属するもの

は、打製石斧 140、たたき石 118、磨石 149、凹み石 147、石錐 121、128、159、163 の 8 点。第 2 層に帰属するものが、磨製石斧 116、礫器 141、石皿 150、石錐 160、166、168 の 6 点。更に第 1 層・第 2 層の何れかに帰属するものは石錐 124、126、153、156、159、163 の 6 例がある。

特に挿図作製後にこのような認識を新にしたことをおことわりしたい。

#### 表土層出土の石器（挿図第 17, 1 ~ 6）

表土層出土の石器 6 点は、これらがどの土器群に伴存する時期のものであるかを知ることはできない。

打製石斧（挿図第 17, 1）；石質は緑泥片岩、形態には特別な点は見出せない。いわゆる短冊形であろう。刃部がつぶれている。

石錐（挿図第 17, 2、3）；2 は珪岩質の用材を、3 は安山岩質の用材を用いている。2、3 は共に無柄、完形である。形態は両者共にかなり特徴的であり、断面は分厚さを感じられる。

2 は一種の刃器とも考えられるような形態で、片面には中軸線にそってはげしく一線を画すような稜線がみられる。左右の形態が非相似形をなすのも特異である。

3 は細長い形で、根の部分はずんぐりふくらんでいる。

これら 2 例は、一般的な石錐とはおそらく機能を異にするのではあるまい。

石錐（挿図第 17, 4 ~ 6）；3 例、いづれも扁平な砂岩小礫を用い、上下両端をひもかけとして表裏面から欠いている。

#### 攪乱層出土の石器（挿図第 17, 7 ~ 21）

攪乱層出土の石器も伴出土器との関係はわからないが、傾向的に E・F・G 区のあたりでは縄文晩期——条痕文のつく粗製土器破片が目立ち、それ以外の区では宮滝新式土器に伴なうグループのものが多かった。

打製石斧（挿図 17, 7）；幅 4 cm 弱。刃先は欠けている。石質は蛇紋岩らしい。短冊形風で形としては小形といえよう。

局部磨製石斧（挿図 17, 8）；全長 7.5 cm。かなり小形である。石質は閃綠

岩らしい。磨かれている部分は刃先ではなくて石斧半ばから上端にかけてであり、恐らく打製としての原形を整えた際、凸出部を磨りとつたのであろう。側面からみると彎曲しているのが目立つ。

礫 器（挿図第17, 9）；全長9cm。扁平な西洋梨状の礫を用いている。片面は全く加工をしていない。わずかに片面の刃先だけを加工している。

石 鋸（挿図第17, 10～12）；10、12はスレート質を、11は黒耀石を用いている。何れも無柄。11、12は一般的な形態と製法といえるが、10は特異である。表裏面は第一次加工の際の剝離面を残しているので、表裏の関係は互に平行した面のようにみえ、厚さもうすく2mm弱。わずかに石鋸の周縁だけが加工されている。石鋸としては非常に粗雑な作りであることが注目される。

石 磨（挿図第17, 14～21）；合計8個。用材ならびに製法は表土層のものと同じ。

第1層出土の石器（挿図第17, 22～29、挿図第20, 118、121、140、147、149、挿図第21, 159、163）

第1層出土の石器には宮滝新式土器が併存する。石器は16点。

打製石斧（挿図第20, 140）；全長10.1cm。石質は緑泥片岩。形態は両側がくびれているので分銅形に近い。全体は扁平。刃先がはげしくつぶれている。

石 鋸（挿図第17, 22～24）；いずれも無柄石鋸。22はチャート、23は黒耀石、24は頁岩を用いている。22、23は擾乱層の挿図第17, 10の例で述べたと同じ手法によってつくられ、周縁だけが細かいチップスによって加工されている。特に22は表裏面が研磨されている局部磨製石鋸である。

石 盆（挿図第17, 29）；砂岩を利用しているが、残欠であって全形は不明。石皿としては小形のものらしく最長径を推定しても20cmを越えないものと思われる。

磨 石（挿図第20, 149）；最大径9.9cm。石質は花崗岩。周囲は全く丸い形でわずかに扁平をなし、表裏面だけがすりこんでへっている。

たたき石（挿図第20, 118）；全長11.8cm。石質は頁岩らしい。全体は全く

の自然石で先端にはたたかれた痕跡がみられるが、全面に径 1 cm ~ 2 cm 程の不整円形の凹みが点々とみられる。あるいは石器整形のための加工途中で遺棄されたものかとも考えられる。

凹み石（挿図第20, 147）；全長 9.2 cm。石質は砂岩。扁平な礫を用いていて、凹みの部分は広く表裏の中央に 1箇所ずつみられる。後に石錐として利用されたらしく、上下両端に打ち欠きがある。

第2層出土の石器（挿図第17, 30 ~ 33、挿図第20, 116、141、挿図第21, 150、160、166、168）

第2層に包含される土器の主体は、第1層と同じく官流新式土器である。第2層の石器もこれに伴存する。

打製石斧（挿図第20, 141）；全長 8.7 cm。石質は上質の粘板岩。長方形状の形態。裏面にはかなりの部分に自然面が残されている。欠失部はなく全形が保存されている。

磨製石斧（挿図第20, 116）；胸部から刃先にかけて、および頭部を欠失しているので全形を知ることはできない。横断面はかなりずんぐりした梢円形。石質は安山岩らしい。全体は非常に良く研磨されている。

石錐（挿図第17, 31~32、挿図第21, 160、166、168）；石錐は 5 個。上下端に糸かけの打ち欠きをもち、砂岩の自然礫を利用している。上部諸層のものと全く変わらない。なお挿図第20, 124、126、挿図第21, 153、156 の 4 例は、形状・石質は他のものと同じであるが、これらは第1層または第2層の何れかに帰属するものである。

石皿（挿図第21, 150）；石質は砂岩。残欠であるために全形は不明であるが、形はかなり大きいことが推定される。厚さは 5 cm。

表裏面共にすらされているばかりでなく、合計 4箇所の凹みがあつて、凹み石としても利用されている。

砥石（挿図第17, 33）；全長 9.3 cm の砂岩を用いている。長軸線上に幅 1.4 cm、深さ 0.5 cm の浅い溝がみられる。溝は両端がかなりはげしくすりこま

れている。特定の製品を造出すために砂岩を砥石として利用していると考えられる。なお溝は片面にだけみられるのであって、片面には凹み石としてのくぼみがみられる。

### 第3層出土の石器（挿図第18、34～54）

第3層出土の石器は21点であり、第3層から出土した土器の主体は宮滝古式土器であるが、この約半分は宮滝新式土器がみられるので、若干の宮滝新式土器に伴なう石器が混入している可能性もある。

磨製石斧（挿図第18、34）；石質は緑泥片岩で、頭部が欠失しているため全長は不明。幅は6.3cm。全体は扁平である。刃部は良くなじみがかれているが、表裏面には加工しない粗い面が残されている。

石 錐（挿図第18、36）；頁岩の石質で尖端は欠失している。無柄石錐であるが尾端は左右不相似である。製作の手法もあらく形態的特徴は第1層出土挿図第17、24に酷似する。

刃 器（挿図第18、35）；石質は頁岩。大きさは2.5cm×2.5cm。かなり自然面が残っている。形態は不整形。

石 鍤（挿図第18、39～54）；合計16個。上部諸層のものと同じく砂岩自然礫を用い上端が糸かけとして打ち欠かれているもの。

砥 石（挿図第18、37）；石質は砂岩。全長7.9cm。表裏面共非常に良くすられている。全体の形は楔状をしている。一種の手持ちの砥石。

石棒？（挿図第18、38）；石質は緑泥片岩質のもの。全長13.2cm。断面の様子は剣に近い。殆んど完形であるが上下端にたたいた痕跡がみられ、石棒本来の形態にはみられないものなので、遺棄されたものがたたき石として再び利用されたものではなかろうか。

### 第4層出土の石器（挿図第18、55～66、挿図第17、67～83）

29例の石器が出土している。第3層からは宮滝古式土器を主体とし、かなりの量の鶴塚上層式土器が伴なっている。したがって第3層出土の石器の大部分は宮

滝古式土器と共に伴するものであろうが、観塚上層式土器に伴なうものも少なからず含まれていると考えられる。

打製石斧（挿図第18, 56, 57）；石質はどちらも安山岩。56は全長9.1cm。完形であるが、製作手法は特異である。割に大きな剝片を利用していると考えられるが、刃の部分は全く加工することなく剝片そのままにしてあって、形を整えるためにわずかに片側の一部にだけ加工が施されている。裏面は剝片をとった際の剥離面がそのまま利用されていて、全く加工が施されていない。刃こぼれがみられるので実用されたことが推察される。

57の例は全長9.3cm。同じく礫の剝片を利用し片面には礫自然面がそっくり残り、何も加工が施されていない。非常に幅せまく小形といえよう。

磨製石斧（挿図第18, 58）；硬砂岩の石材を用いた残欠である。全面非常に良く研磨されている。形はおそらく小形の定角磨製石斧なのである。

棒状斧（挿図第18, 55）；石質は綠泥片岩。裏面側は全く欠失しているので断面は三日月状になっている。刃先の部分はひどくつぶれている。静岡県下における棒状斧の使用痕の明らかなものには、このような刃つぶれのしたものが多いので、棒状斧の機能が切る道具というよりも重量を利用してたたく動作に近い用法がなされていたものではないかと推測される。

刃 器（挿図第18, 59, 60, 61）；59は珪岩らしく、60は黒耀石を、61は安山岩を原材としている。59は全長4.3cm、60は2.3cm、61は6.4cm、いずれも完全。59は現象的に尖頭器とも考えられるが、挿図右の裏面の様子などを検討してみると、刃器と考えられる。その点61の場合も同じである。これは片側に礫自然面が残っている。

石質にもよろうが、60は刃部が両面からかなり明瞭に加工されている。

3例共に一種の横剥ぎ状の剝片を利用している点が共通している。

石 錐（挿図第17, 67～83）；全部で17例。すべて石質、製作手法は上部諸層のものと同じである。わずかに72、80の例だけが、綠泥片岩の礫を用いているのみである。

石 盆（挿図第18, 64）；石質は砂岩。残欠であるために全形はわからない

が、周囲は調整して整形されているらしい。表裏面共すられていて、片面にだけ圓み石のくぼみとして利用された部分が一箇所みられる。

磨石（挿図第18, 63）；花崗岩の自然礫をそのまま利用したもの。最大径9.9cm。

砥石（挿図第18, 65）；石質は砂岩。半分程が欠失した残欠。表裏面の長軸線にそって幅広く浅い溝がみられる。機能としては第2層出土のもの（挿図第17, 33）と同じと考えられる。

石棒？（挿図第18, 66）；完成されたものではない。整形の途中で遺棄されたものらしい。わずかに整形のためと考えられる加工の部分がみられる。一種の片岩質の石材を用いている。

#### 第5層出土の石器（挿図第19, 84～96）

第5層出土の石器は13例。第5層出土の土器は壺塚上層式土器が加曾利B IまたはII式に併行する土器よりやや多い割合で共存している。したがって両者どちらかの土器群に伴存するという表現しか現在は許されない。

礫器（挿図第19, 84, 85）；84は花崗岩、85は頁岩。84は厚さ2.1cmの扁平な礫を用い、周囲だけが整形のために加工されている。裏面は全く加工されていない。頭部は欠失している。

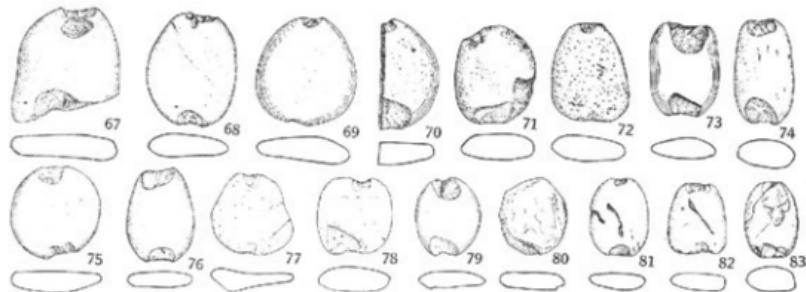
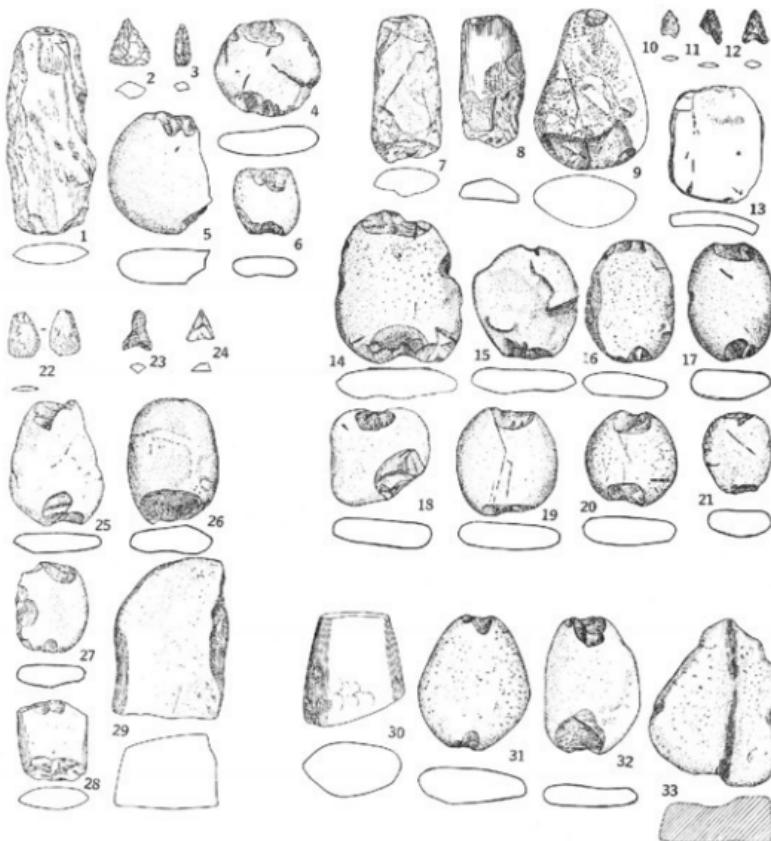
85は梢円筒状の礫を利用し、同じく片面刃部から片側にかけてだけ加工が施されている。

石鎌（挿図第19, 86, 87）；共に石質は黒耀石。87は有柄、いわゆる飛行機形などといわれる両側にひれのついたもの。86の形態は石鎌でなくて尖頭型的であるが、尖端部の加工など不充分な点をみると、未製品と考えられる。

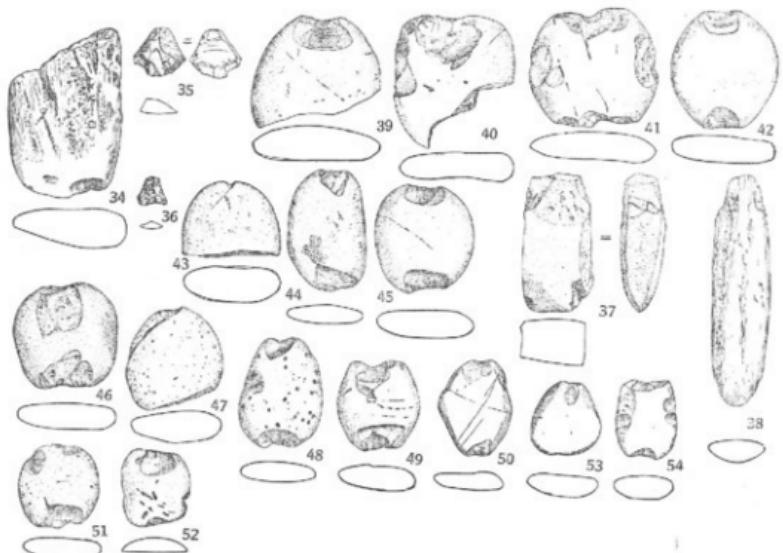
石鎌（挿図第19, 91～96）；上の層と石質、製法共に同じ。92のみ硅岩。

磨石（挿図第19, 90）；多孔質の溶岩質の石材を用いている。全長10.5cm。典型的な磨石で石けん状をしている。各面共に非常に良くすられている。

砥石（挿図第19, 88, 89）；共に砂岩。表裏の長軸線にそれぞれ溝がつけられている。第2層出土のもの（挿図第17, 33）と同じ性質のものである。



插圖第17. 石器測量圖 (縮尺1:1)



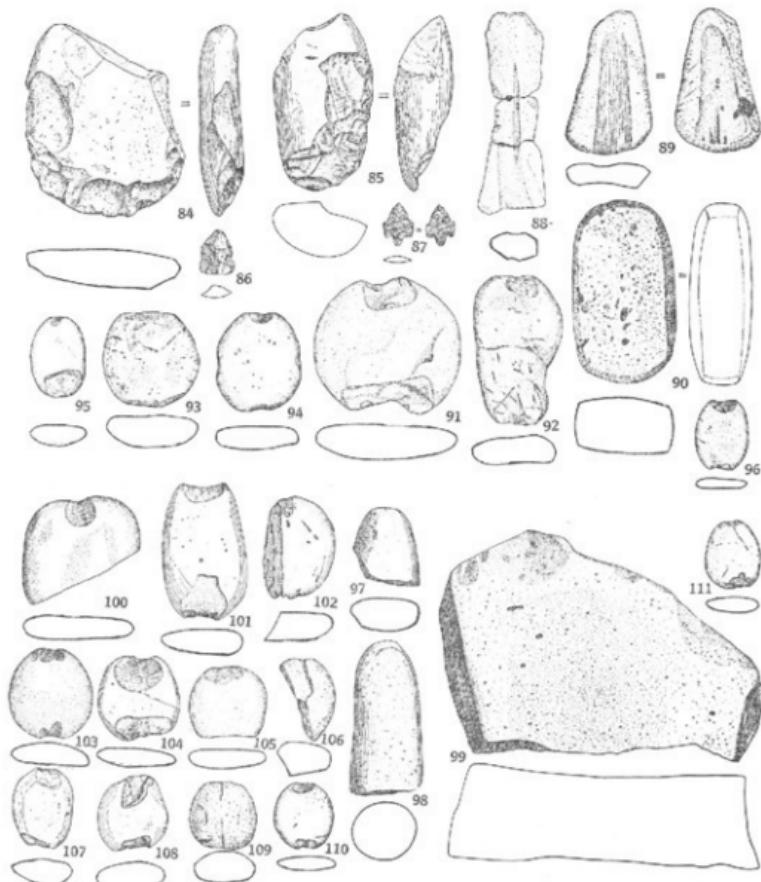
插圖第18. 石器實測圖 (縮尺1:1)

第6層出土の石器（挿図第19、97～111、挿図第22、11）

総計16例が出土している。第6層出土の土器は加曾利B IまたはII式土器に並行する土器群であって、石器も主にこれに伴存するものと考えられる。

磨製石斧（挿図第19、97）；石質は閃綠岩。頭部のみの残欠で全形は不明。

石 鍤（挿図第19、100～111）；12例。石質製法は上の層のものと同じ。106、



挿図第19. 石器実測図 (縮尺5)

109 の 2 例は糸かけの部分が打ち欠かないでみがいた溝がつけられている。

軽石製石製品（挿図第22, 11）；わずかに半ばが両側からけずられてくびれている他、ところどころ整形のための加工のあとがみられる。

石 盆（挿図第19, 99）；約半分程の残欠。石質は砂岩。自然の大礫を利用している厚さは 5.8cm。表裏両面からすらされている。

たたき石（挿図第19, 98）；円筒状の礫を利用し、先端にわずかにたたいた痕跡がみられる。一端は欠失している。石質は閃緑岩らしい。

#### 第7層出土の石器（挿図第20, 112～115、117、119～123、125、127、129～138）

この層から出土した土器は堀之内ⅠまたはⅡ式土器に並行する土器を主体としている。石器の大部分もこれに伴存すると考えられる。挿図の中で 6 例は第1層または第2層の石器である。

打製石斧（挿図第20, 113）；頁岩製。上半部は欠失している。第4層（挿図第18, 56）の例と同じような短冊形の剝片を利用して、周囲だけが整形のために加工されている。

礫 器（挿図第20, 112）；幅 9.3 cm、最大長 12.3 cm の扁平な円礫の上下をわずかに少しづつ打ち欠いて刃をついている。

磨製石斧（挿図第20, 115）；閃緑岩製。刃部欠損。良く研磨されている。

棒状斧（挿図第20, 114）；頭部だけの残欠。閃緑岩質の石材を用いている。頭部はとがり気味。断面は橢円形。

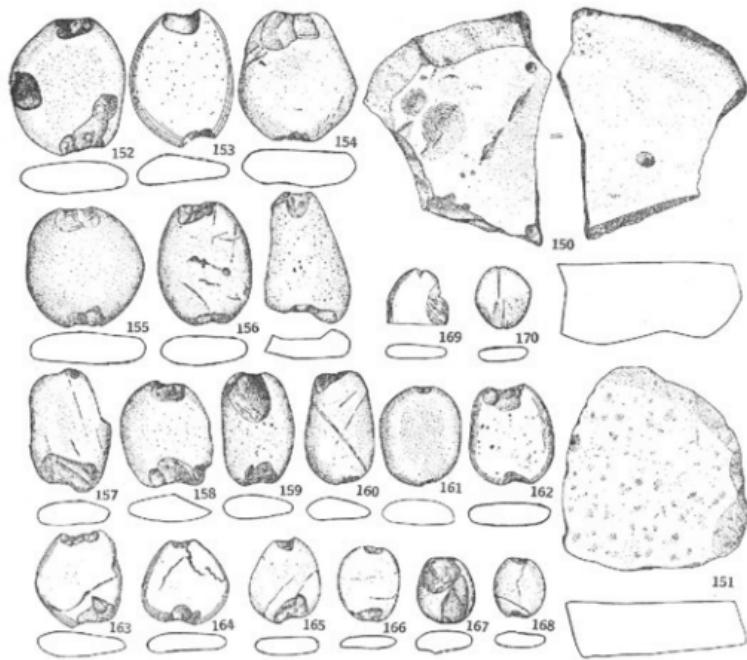
刃 器（挿図第20, 117）；硅岩質の石材を用いている。横剥ぎの剝片を利用して、周縁部に細かい加工を施して刃をついている。

石 錐（挿図第20, 120、122、123、125、127、129～138）；総計 15 例。石質、製法共に上部諸層のものと同じ。122 の例だけは他の物と異って、ひもかけのうちかきが上下なく、左右につけられている。また 128 は凝灰岩の礫を用い、凹み石としても利用されている。

凹み石（挿図第20, 119）；石質は砂岩。全長 8.8 cm。片面の中央部に凹み



插圖第20. 石器實測圖 (縮尺1:1)



挿図第21. 石器実測図 (縮尺5)

がみられる。凹みはかなり大きい。

第8層出土の石器（挿図第20、139、142～146、148、挿図第21、151、152、154、155、157、158、161、162、163、164、165、167、169、170）

総計21例が第8層の石器である。第8層出土石器の挿図中には140、141、147、150、153、156、159、160、163、166、168等の第1層または第2層出土の石器が混在している。

第8層出土の土器の主体は堀之内IまたはII式土器に並行するものであるが、約1割位、前・中期の土器や加曾利B IまたはII式土器に並行する土器がまじっている。石器も大部分は堀之内IまたはII式土器に並行すると考えられるが、

第8表 各種石器出土層位別表

層位	打 製 石 斧	研 磨 器	局部 調 製 石 斧	磨 狀 石 斧	石 双 頭 器	石 錐 器	扁 圓 不 明 石 錐	輕 石 製 品	石 皿	磨 石	凹 み 石	た た き 石	砥 石	石 ス ク レ イ バ ー	棒 ?	
表土層	1				2	3									6	
擾乱層	1	1	1		3	8									14	
第1層	1	1			3	5	4	1	1	1	1	1			15	
第2層				2		6		1					1		10	
第3層				1	1	16							1	1	21	
第4層	1			1	3	17			1	1			1	1	27	
第5層	2			2	6				1			2			13	
第6層				1	12	1					1				15	
第7層	1	1		1	17				1						23	
第8層				1	16								1		22	
	5	5	1	7	3	17	106	4	2	4	3	2	2	5	2	1 170+4

明らかにそれ以外の土器型式に併存するものもみとめられた。

磨製石斧（挿図第20、142）；頁岩製の石質。全長 7.7 cm。長方形状をなし。ており全面良くみがかかれている。刃先が欠けているのは使用の際の刃こぼれとみられる。

棒状斧（挿図第20、139）；綠泥片岩製。全長 12.8 cm。石質は綠泥片岩。刃先はかなりひどくつぶれている。棒状斧の機能について第4層出土挿図第18、55で述べているが、それと同一の現象である。

刃 器（挿図第20、144、145）；2例共に珪岩製。第4層出土のもの（挿図第18、59、60）と同じように横剥ぎ状の剥片を利用している。形態は共に不整形。どちらも刃のつくり出しのために片面加工とでも言いたい程度の加工がほどこされているに止まる。

石 錘（挿図第21、152、154、155、157、158、161、162、164、165、167）；総計12個。石質製法共に上の層のものと同じ。169、170の2例のみは糸かけの部分をすりこんで溝にしている。

石 皿（挿図第21、151）；砂岩製残欠で全形は不明。片面だけにすり痕がみ

られる。厚さは 3 cm、小形の石皿らしい。

凹み石（挿図第 20, 148）；綠泥片岩製。残欠で全形は不明。かなり広い凹みが片面にのみ一箇所みられる。

スクレイバー（挿図第 20, 143）；頁岩製。全長 5.6 cm。タングド・スクレイバーと呼ばれる典型的な石匙である。このような形態のスクレイバーは縄文中期に盛行する形であるから、恐らく第 8 層下底部に多かった中期の土器に伴存するものであろう。

## （2）骨・角・貝・牙器（挿図第 22～第 24）

石器の場合と同じように層位別に出土品のヴァラエティーを先ず述べてゆきたい。第 7 層・第 8 層の E・F・G 区出土の石器として扱った中に第 1 層・第 2 層のものを、あやまつて含めてしまい挿図に多少の混乱をきたした。同じ誤認を骨角牙器の場合にもおかしているので、先にこれを指摘しておきたい。

第 7 層出土と考えていた挿図第 23, 83 牙鑑、84 の貝器は第 3 層出土。第 8 層出土と考えていた 86 棋ばさみは第 2 層出土のものであることが伴存土器の状況と、各層内における土器の出土状況とから判明した。

なお各層の出土品に、どの土器型式が伴存するかという点は、すでに石器の記述の中に述べているので省略したい。

### 表土層の出土品（挿図第 22, 1）

貝 輪（挿図第 22, 1）；貝輪残欠 1 例。作りは良好でない。使用した貝は不明。

### 擾乱層の出土品（挿図第 22, 2～7）

骨 鈎（挿図第 22, 2, 3）；いづれも残欠であるが新頭であろう。鹿骨を使用している。3 は根の部分近くがふくらみを増しているのが目立つ。

骨鑑？（挿図第 22, 4）；鹿角を用いている。全長 8.5 cm。菱形に近い形をしている。側面から観察するとややそり気味なので、あるいは組合わせヤスカとも考えられる。

骨へら（挿図第22, 5）；鹿骨製の残欠。先端のみを残している。第3層出土  
挿図第22, 23の例によって全形を知ることができる。

貝 輪（挿図第22, 6, 7）；どちらも残欠。7は充分にみがかれていません。ど  
ちらもサルボウを用いていると考えられる。

#### 第1層の出土品（挿図第22, 8～10）

鹿角斧（挿図第22, 9）；鹿角をそのまま斧または掘り具のような道具として  
使用している。そのためか第一枝の先端は欠失している。また座骨部はたたくた  
めに使用したらしくすりきずがついてつぶれている。よって落角ではなく折り取  
ったものであろう。

骨 針（挿図第22, 8）；鹿骨製の残欠品。先端部のみが残っている。

牙 錐（挿図第22, 10）；猪牙を利用して、ホーロー質面は全く加工しないで、  
裏面から一端をけずってとがらせている。他端には両側からえぐりこみが対につ  
いている。

貝 輪（挿図第22, 12, 13）；共にサルボウを加工している。12は未製品、  
13は完成されたものの残欠である。

#### 第2層の出土品（挿図第22, 14, 15、挿図第23, 86）

骨 針（挿図第22, 14, 15）；いずれも鹿骨製残欠である。

根ばさみ（挿図第23, 86）；完全な形態がみられ、全長3.5cm。鹿骨製らしい。  
先端のえぐりこみの部分は幅が広くゆるいU字状をしている。

#### 第3層の出土品（挿図第22, 16～28、挿図第23, 83, 84）

骨 針（挿図第22, 16～19, 21）；16～19の4例はいずれも鹿骨製。16は完形  
で全長9.5cm、やや小形である。他は残欠、特に17は尖端部の残欠であるが、  
先がすんぐりとして丸味を帯びている。19の例もこれに近い傾向である。普  
通の鈎頭と趣を異にする。21は他のものと異ってエイの尾鱗を利用し下端をけず  
って根にしている。エイの尾鱗製のものは使いようによっては鐵の役割も果せる

ものと思う。

ヤス（挿図第22、20）；獸骨製。尖端、根共に欠失している。一端がつぶされたようにふくらんでいる。おそらく組合わせるための加工と考えられる。

骨鎌？（挿図第22、22）；尖端、根共に欠失していて全形は不明。断面はかまぼこ状をしている。恐らく鎌になるのではなかろうか。

牙 鎌（挿図第23、83）；猪の牙を利用しているが残欠である。尖端と片側を失っている。一孔がホーロー質面に向って明けられている。

骨へら（挿図第22、23）；鹿の掌骨をたてに半截したものをそのまま使っていいる。へらとしての機能が考えられる。截断側をけずって整形し、関節端が尾端として巧みに利用されている。

貝 器（挿図第23、84）；貝殻の残欠が自然に磨耗したものかとも考えられるが、同じ形態のものの中に明瞭に加工痕のみられるものもあり、何らかの器具として用いられたことが考えられる。内弯曲した部分が用いられたらしい。

髪 飾（挿図第22、24～28）；鹿の掌骨と思われる部分を加工している。5例はいずれも残欠で、26、27は頭端部、他は身の部分。美しく研磨されていて、身の断面はいずれも正円に近く径3mm。全長は10cm位になるらしい。

貝 械（挿図第22、29～31）；いずれも残欠。貝はサルボウを用いているらしい。29が最も良くみがかれていて完成品らしい。

#### 第4層の出土品（挿図第23、32～62）

骨斧？（挿図第23、32）；哺乳類海獣の骨を利用している。鯨の骨ではなかろうかといいう。関節端寄りの部分を切り落して、切り口周辺を斜にけずって整形した痕跡がみられる。先端と片側が欠失しているので全形はわからない。海綿質の部分をけずり込んで着柄されたらしい。柄を中にはめこんだ場合、使用に際してひびの入る率が多くなるという意見もあるが、骨が生のうちであれば充分使用に耐えるという。おそらく斧頭のように用いられたのであろう。

骨 針（挿図第23、33～42）；10例のうち35は鳥骨製、他は鹿骨製。いずれも一部を欠失しているが、全長は15cm前後である。

ヤス（挿図第23, 43）；組合わせヤスらしい。根の先端を欠いた残欠であるが断面は正円に近い。全長は7cm程らしい。

骨鑓（挿図第23, 45～49）；5例あるがいづれも鹿骨製である。形態としては47～49の3例のような菱形のものが基本になると考えられるが、45～46のような根が段をなして作り出されたものが目立つ。これらは骨鑓の中でも典型的な形態のものなのであろう。

貝器（挿図第23, 57～59）；57はチヨウセンハマグリを用い、他はサルボウを用いている。57～58の例は内湾線に明らかに細かいうち欠きを施して加工している。器具として用いられるならば内湾線側が用いられるのであろう。

加工鹿骨（挿図第23, 56）；鹿角の一端が鉛筆の先のようにけずられている。何の目的でこのような加工を施したかは不明。全体は焼けこげている。

垂飾？（挿図第23, 55）；獸骨を利用し両側が平行するような長方形状の扁平な形に整形し、欠失部に孔がみられる。両端が欠失しているので断定できないが垂飾のようなものではなかろうか。

髪飾（挿図第23, 50）；両端を欠失しているが、中央に二条の隆線を残して飾している。全体はくの字なりに曲っている。またこげて灰色をしている。

貝輪（挿図第23, 60～62）；60は未製品。61～62は完成したものの残欠。60～61はサルボウ製、62はマガキを利用している。

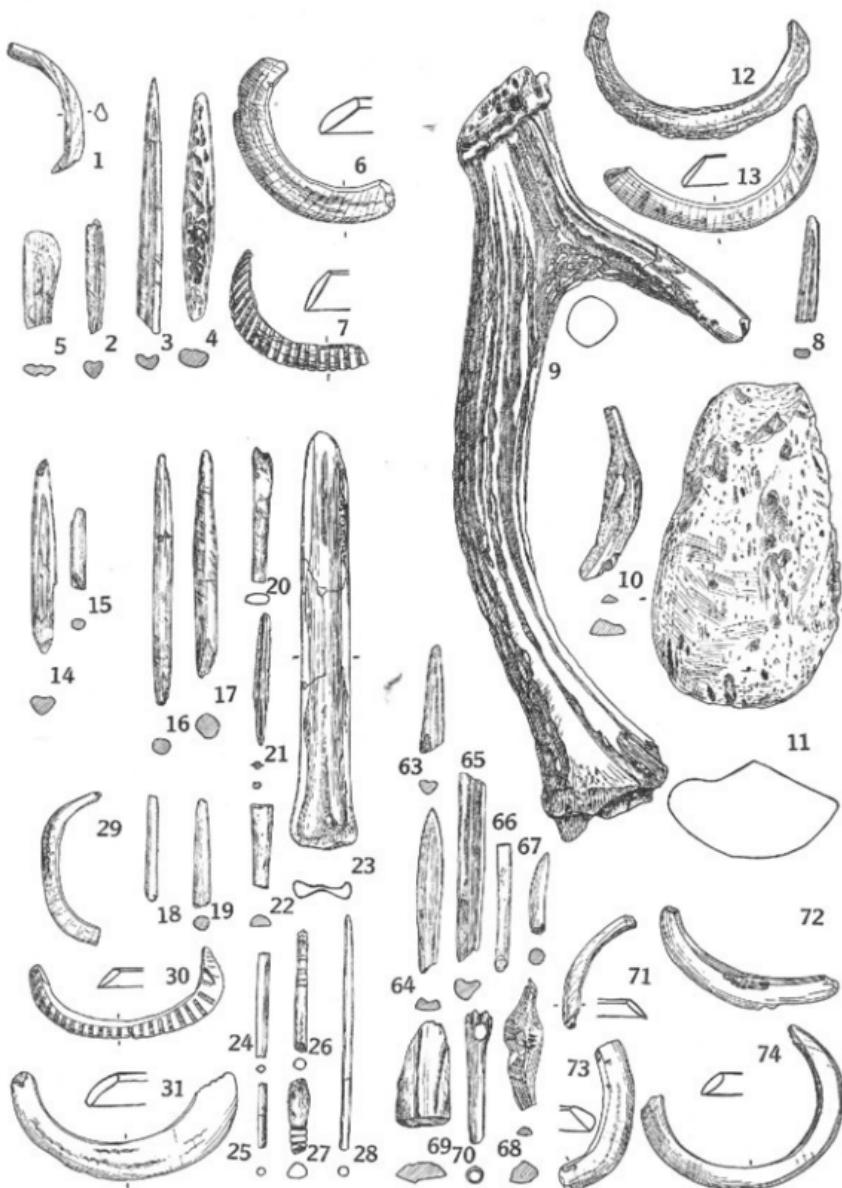
## 第5層の出土品（挿図第22, 63～74）

骨針（挿図第22, 63、65）；上端部と身の残欠の2例。

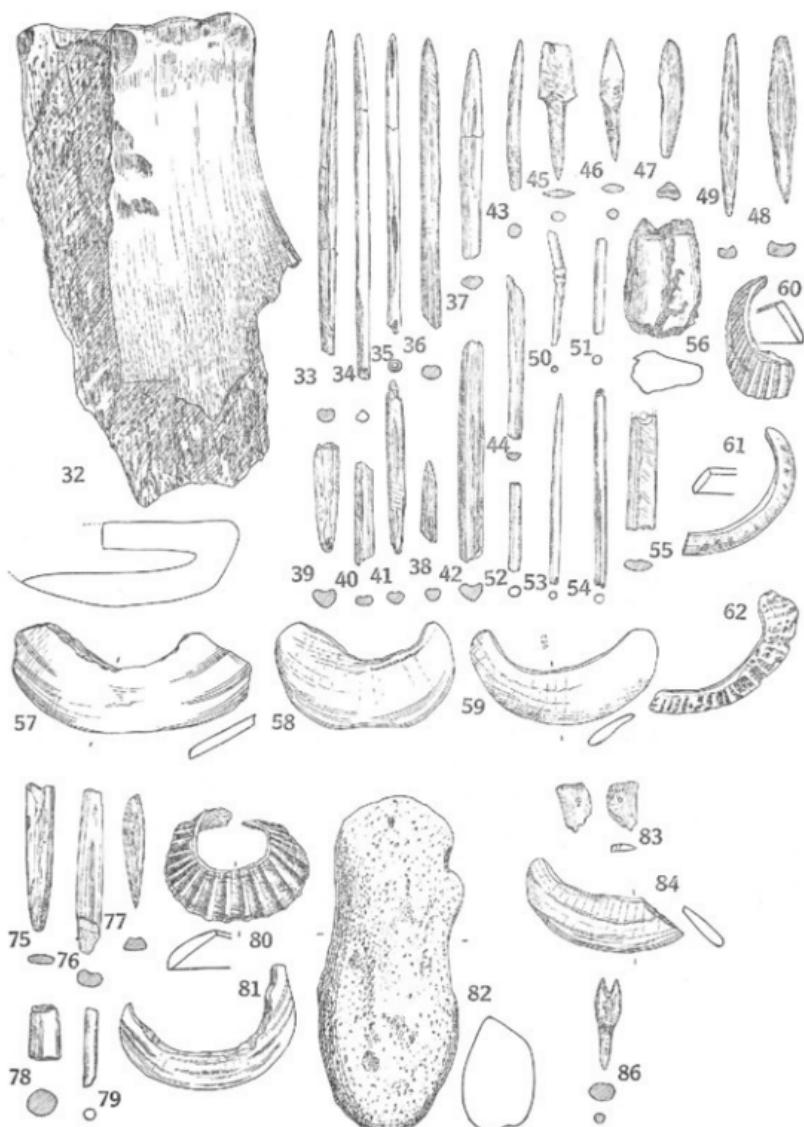
ヤス（挿図第22, 66、67）；上端部と身の残欠の2例。66はわずかにつぶれてふくらむ部分が残っている。第4層出土例（43）と2つの残欠を比較してみると、かなりはつきりとカーブをえがく形に曲っている。

骨鑓（挿図第22, 64）；4層出土の諸例と比べて全長はやや長い。根の先端を欠失しているが全長8cm近いものであろう。形態は根と身の境の部分にわずかに段がみられる。

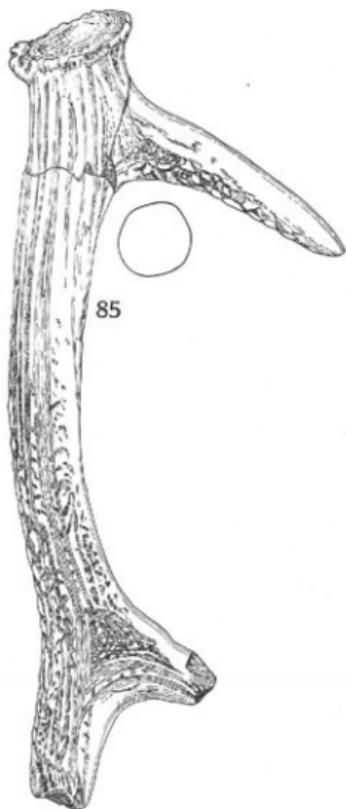
牙錐（挿図第22, 68）；猪牙製。同種の製品はすでに第1層出土品（10）中



插圖第 22. 骨・角・貝・牙・器 実測図 (縮尺5%)



插圖第23. 骨・角・貝・牙器実測図 (縮尺5分)



挿図第24. 角笄実測図 (縦尺)

にみられる。

加工鹿角 (挿図第22, 69) ; 鹿角の一端をきれいにすって時計皿状にしている。全形は全く不明。

垂飾 (挿図第22, 70) ; 小獸骨の関節部に径 5 mm の孔を明けている。他端は切断した跡をきれいにみがいている。全長 5 cm、垂飾であろう。

貝輪 (挿図第22, 71~74) ; いずれもサルボウを使っているが、4 例共残欠である。72~73は未製品らしいが他は完成品である。

#### 第6層の出土品 (挿図第23, 75~81)

骨針 (挿図第23, 76) ; 身の部分の残欠。全形は不明であるが、やや太いのが特徴である。

骨鎌 (挿図第23, 75, 77) ; 77は全長 4.4 cm の小形のもの。75は全長は不明であるが、フロート状の上端部残欠である。恐らく全長は 8 cm 位の長大なものになろう。

加工鹿角 (挿図第23, 78) ; 鹿角の上下端にすじをいれている。それ以外の加工は全くみられない。全長 2.2 cm。

髪飾 (挿図第23, 79) ; 髪飾、身の部分残欠ではなかろうか。

貝輪 (挿図第23, 80, 81) ; 80は未製品、ハイガイを用いている。81も未製品でサルボウを用いている。どちらも残欠である。

### 第7層の出土品（挿図第24、85）

鹿角斧（挿図第24、85）；全長 29.2 cm。第一枝先端が欠失している。使用の痕跡であろう。落角品である。

第9表 骨・角・貝・牙器層位別出土表

各 種 遺 物	鹿 角 斧 斧 ?	骨		骨		ヤ		骨		牙		根 ば さ み		牙		骨		具		加 工		至 麗 角 鋸		髪 飾		貝	
		骨 針	骨 針	ス	譜	譜	根 ば さ み	根 ば さ み	骨 錐	骨 錐	骨 錐	骨 錐	根 ば さ み	根 ば さ み	骨 錐	骨 錐	骨 錐	骨 錐	骨 錐								
表 土 層																									1	1	
搅 亂 層			2			1										1								2	6		
第 1 層	1		1													1								2	5		
第 2 層			2																						3		
第 3 層			5	1	1	1										1	1						5	3	18		
第 4 層		1	10	1	5												3	1	1	1	5	3		30			
第 5 层			2	2	1											1			1	1			4		12		
第 6 层			1		2													1		1	2			7			
第 7 层	1																								1	0	
第 8 层																											
		2	1	23	4	10	1	1	2	2	4	3	2	11	17									83			

### （3）石器・骨角器等観察の結果

非常に冗長になったが粗材としての石器、骨角器等を層位別に、また個々の特徴を観察して記述してきた。石器・骨角器何れも大多数のものは労働用具であった。これら労働用具は石器として、また骨角器等として個々に扱っても意味はなく、層位別にそれぞれ一括された労働用具として把握することが必要である。われわれは一連の発掘調査の過程において、縄文時代後・晚期の生産活動における地域的特殊性を認定することを目標とした。その手がかりとして設定した沿岸漁業というテーマも先に述べたような方法によって理解することが出来るのではないか。このような観点にたって資料まとめを記述してゆきたい。

#### 骨針・ヤス・石錐について

漁具に用いられると考えられる用具には骨針——鉛頭、組合わせのヤスが代表的なものとして指摘することができる。ヤスの出土例数は少なく出土層位も第3

層～6層の間に限られていた。一方鉛頭は攪乱層～第6層まで普遍的に存在している。第7層・第8層にみられないのはこれらの2層に、貝の包含率が極めて少ないか、または皆無であったためであろう。

更に第4層には骨針状の鉛頭全体量の約半数が集中し、第3層には $\frac{1}{4}$ の量がみられ、その他諸層には1ないし2点という出土状況であった。このような出土状況によって鉛頭の時期的偏在という表現を即座に用いることは差しひかえなくてはならない。なぜならば、資料が傾向的にかなり限定されていること、また1959年にわれわれが調査した磐田市石原貝塚の出土品は第5層～第8層にかけての西貝塚下部諸層に相当するものであったが、諸貝層からかなりの量の骨針がみられるという事実があるからである。

石錘も骨針と同じように第3層以下第8層までに濃密に出土した。これも石原貝塚からも出土しているし、西貝塚からもほぼ普遍的な出土が各層にわたってみられたということができる。

石錘の機能については諸説あるが、共同研究の過程で麻生優氏はこれを強く漁網用の錘として主張し、われわれもこれに同調している。石錘には大きさからいって大・中・小の三種類に107個の石錘を分けることができる。石錘の大・小については麻生氏が意見を考按しておられるので記述を差しひかえたいが、われわれは石錘の全体の量的なり方にかなり疑惑された感があったとも言えよう。それは石錘を出土層位別にみると、表土層から最下層まで最低3個から、最高16～7個ずつ出土しているという事実である。一層内に包含されている石錘が、一つの層位がいとなまれた時期に用いられたすべてのものということは勿論できないが、一定の時期内における石錘のような労働用具のあり方を何とかの形でかなり反映しているということは考えられよう。各層位の形成の条件を考慮しても、一つの層、言葉を代えて表現すれば一定の時期に用いられた漁網用の錘としての石錘の量は、それほど多量なものではないということが許されまい。

このような想定に立つことが許されるならば石錘を着けて用いた漁網はかなり小規模なものであったことが考えられる。したがって漁獲量を漁網のみによって確保することはむずかしいのであって、鉛・ヤス等骨・角製漁具を併用すること

によってはじめて漁獲の効果が保証されたのではなかろうか。

何れにしても西貝塚および周辺諸遺跡における石鍬および鋸頭等の出土状況から、遠江で貝塚のいとなまれた縄文後期から晩期初頭にかけての時期に、これらがセフトをなして普遍的に用いられた漁具ということ、更に遠江における先史時代の浜名湖、または磐田先史潟沿岸において漁業を行なった諸遺跡で長く伝統的に使用されたものであるということが許されよう。

#### 骨鏃・石鏃について

別個の特徴的な用具として骨鏃の存在が注意される。骨鏃の出土例は10例あって、個々についてはすでに記述しているが、中でも第3層出土の柄が非常にはつきりと作り出されている例またはこれにほぼ準ずる形をもった例など、他の菱形をした簡単な作りのものとちがって形態的にも注目されて良いものと思われる。

石鏃の出土例11例に対して10例という骨鏃の数は、骨鏃の利用度が高かったこととして理解することはできまいか。更に骨鏃には石鏃と異なった機能をもつていたことも考えなければならない。発掘の過程において、われわれの目にふれた自然遺物中、鳥の骨がしばしば目立った。その量は大規模な調査の行なわれた螺塚遺跡における鳥骨の出土量をはるかに上まわるものであった。かなりの推測ではあるが、骨鏃は鳥うちのための用具に用いられたと考えたい。

一方、石鏃の形態にもかなり特殊なものがある。石鏃表裏面に第一次加工の際の平らな剥離面のみられるもので、周囲だけにわずか調整のための加工のみられるものである。第1層出土挿図第17、22の例は表裏面がすってみがかかれているが、これなどは表裏面を調整し肉を薄くするための意識的な加工らしい。

これら石鏃の全体的な特徴はすでに述べた肉が薄いこと、全形が粗雑であること、柄がないことの三点をあげることができよう。

形態ならびに作りの上で非常に特殊な点のみられるこれら石鏃は、一般的な有柄・無柄の石鏃と明らかに併存しているのであって機能においても別途の目的をもっていたのではなかろうか。さらにこれら石鏃の出現を遠江における縄文後期のみに比定していたのであるが、静岡県庵原郡庵原村高部山遺跡における良好な縄文中期（勝坂式および加曾利E式土器並行）の遺物包含層から同種のものの存

在が確認され、少なくとも駿河・遠江において縄文中期以後に出現する石鎌であることがわかつてきた。

### その他の出土遺物について

漁具と考えられるものおよび鎌についてみられる問題を指摘した。その他の遺物についてもまだいくつかの問題点があることを指摘することができる。

例えは出土遺物の採集にはかなり細心の注意を払ったにもかかわらず、遂に石鎌は一例も発見出来なかつた。これに代るかのように、第1層および第5層からは猪牙製の鎌が採集された。西貝塚遺跡では石鎌が用いられることがなかつたのではないかろうかといった疑問さえ生じてくる。

前項における記述に刃器という項をいくつか設けている。すでに記したように刃器と呼んだものは、硅岩質の石を多く用いた不定形な剝片の一部を細かく打ち欠いて調整し刃を作り出したものである。第8層出土の横形のスクレイパーは麻生優氏に指摘され明らかに中期のみに伴出する形態のものだといふ。

しかし、刃器と呼んだものはいわゆるスクレイパーとは形態を全く異にしているものであるし、おそらく機能も異にするものと考えられる。刃器は第3層から第8層の諸層にわたって出土しているのに反し、第7層から以上の諸層にはスクレイパーは全く出土しなかつた。

スクレイパーの機能にはナイフとしての役割が先ず第1に考えられるが未開民族例より類推することが許されるならば、捕かくした動物の調理器具としての機能も忘れることはできない。このように考えてくると刃器と呼んだものが上に述べた二つの機能を充分發揮し得るものとは、大きさや形態からして考えることはできない。

更に石斧には打製石斧から礫器まで、5つの種類を見出すことができたのであるが、一般的に小形、作りは粗雑という二つの点が観察される。しかも打製石斧と同数の礫器が存在するという点は、一般的に労働用具の形態分化がすでに充実する縄文後期の段階における現象として納得し得ない点がある。これを骨角器にみられる作りの一般的精巧さと対比した場合に、この疑問は更に深まるであろう。

今まで出土した労働用具にみられるいくつかの特殊性や疑問になる点をのべてきました。このような問題は、遺物が採集された地点や層の堆積の条件とかいったようなことに原因をもつ資料の偏在が、問題であるという想定を下すこともできよう。しかし、同一の地域内にあって遺跡立地ならびに遺跡の性質等多くの類似点がみられる観塚遺跡やその他の調査を経験したわれわれには、そのような想定をもつ必要がない、という確信に近い気持をかなりもってきている。

むしろ、今まで述べてきた出土遺物の特殊性は、遺跡の性質を反映した結果によるものであって、遺跡の特殊な性質を反映しているものと考えられるのではないかろうか。更に具体的な表現が許されるならば、西貝塚遺跡に生活を営んだ人々の生産活動のあり方の反映として一括された諸出土遺物、特に労働用具全体にみられる特殊性を表現しているのではないかろうか。

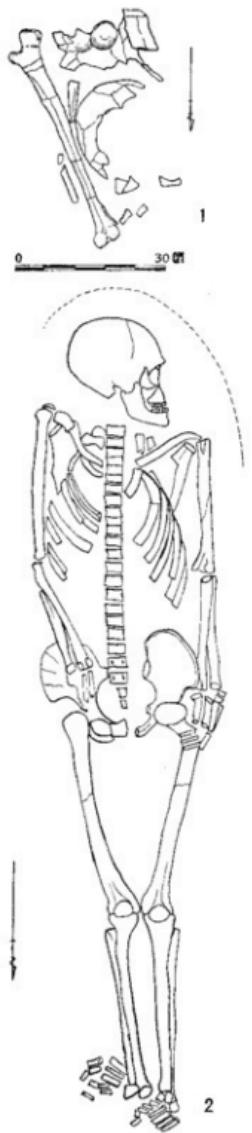
(市原寿文)

## 7. 埋葬人骨

### A) 人骨の出土状態

南北に長い第4トレチの北端において2体の人骨を発掘した。いずれもF4、G4区を中心とする発見であったが、先ず屈葬人骨を発掘し、次いでその下から伸展葬の人骨を発掘した。最初に発見されたものから第1号人骨、第2号人骨として整理番号をつけている。

第1号人骨の出土状態は、表土層直下の擾乱層と第1層混土貝層との接するところに包含されていた。したがって当然この包含層位は擾乱層直下にあったと考えられ、周囲の状態からも同様に認められた。よって編年的な位置づけは、条痕文土器が伴なう縄文時代晩期前半とすることができる。頭骨を中心として大腿骨を主とする四肢骨が集中しており、一見したところでは全く埋葬法はわからない(挿図第25,1)。しかしそく観察すると、頭骨を中心として残存する骨の位置がほぼ正常な状態にあるようにみえる。すなわち骨盤も大腿骨と密接しており、その又状の間に頭骨が位置することから非常に極端な屈葬を想定することが



挿図 第25. 人骨出土状態

できる。もしも、復原的な原位置を考えるならば、大腿骨間にはさまれた頭骨の状態が想定されるのであり、これがまさにもとの状態を示しているのではないかと思われる。しかしながら、そのような極端な屈葬か認めにくいとするならば、簡単に再埋葬——改葬を考えることができるかも知れない。しかしながら、発掘時の状態からするならば、人骨周辺の層位的な変化に異状を認めるににくいこと、また人骨の個別の骨——四肢骨が原位置にあると認められたこと等から、むしろ屈葬とすべきであろうと思う。なお埋葬施設はなにもみられなかった。

第2号人骨は、第1層混土貝層中より出土した。この層は約50cm位の厚さがあり、縄文時代後期末の宮滝新式と仮称している土器が多量に発見された。したがって層位的な観点と周囲の状態からすると、この時期に属すると言える。出土状態は典型的な伸展葬を示し、四肢骨はまっすぐに伸びており、あたかも平面上に置かれたかのような状態であった(挿図第25, 2)。挿図に示した頭骨をめぐる半円状の点線は、この人骨埋葬時に掘られたと思われる埋葬用ピットの輪郭を示しているが、全体にわたって注意しながら調査を進めたにもかかわらず、よくわからなかつた。骨格だけによる身長は165cmであるからピットがあったとすれば、それよりも長い大きなものになるであろう。骨の保存状態は、混土貝層中にあったためにことのほかよく、第1号人骨よりは全体の骨格が揃っている。他に特記すべき埋葬施設や副葬品または身体装飾品は何も発見され

かった。

2体の人骨は共に成人男子であるが、第1号人骨は縄文時代晚期前半の屈葬であり、第2号人骨は縄文時代後期末の伸展葬である。二つの相い異なる埋葬法は、やや時代が異なるにしても極端な典型的な縄文時代の葬法である。この葬法がどのような社会的な背景のもとで、はぐくまれたものであろうか。それは葬法自体が社会慣習——共同体規制の中で根強い伝統をもっていたが、葬法そのものが一つの安定したやすらぎの場を得ていたことにもよるであろう。このような立場からするならば、時期が異なるにしても、なぜ二つの異なる葬法が伝統の強い共同体の中で行われていたか、ということが注意されなくてはならない。恐らく多くの共同体では定まったそれぞれの——地域的な——慣習に根ざした葬法というものをもっていたに違いない。それは急な病死であるとか、あるいは災害死であるとか、男女等の性別や年令をこえて一つの安定した埋葬法があったであろう。その規制を破った葬法があるとすれば、恐らく共同体規制を破った脱落者の墓などであったかも知れない。われわれが行なうべき埋葬法の研究は単なる現象の累積であってはならない。以上のようなことがらを常に念頭におきながら調査を進めなければならないと思う。そのような社会関係と埋葬法が密接に結びつくためには、たった2例では如何んともなしがたいが、更に入類学的な研究の成果は、これらの考え方を進展させてくれるものと思う。なぜならば抜歯等の風習も成年式等に関係ありとする見方もあるからである。

(麻生義)

## B) 人骨の調査

本発掘によって得られた2体の人骨は、それぞれ西貝塚第1号および第2号人骨と名づけられた。これらの人骨を観察ならびに計測によって調査した結果は次のようになる。個々の計測値は一括して表に示す(第10表、第11表)。

### 西貝塚第1号人骨(成人男性)

#### 1. 頭骨の観察

成人の男性骨であつて頭骨は前頭骨、左頭頂骨、顎面骨を欠く。破面でみると骨は厚い方である。

脳頭骨： 三主縫合は内外板ともに開放し、その鋸歯は中等度に複雑であるようみえる。

前頭観： 頭骨破損が著しいので記載ができない。但し遊離した前頭骨右半部でみると前頭結節は中等度で眉上弓の発達はよく、頬弓突起は外側に張り出していたようである。

上面観： 前頭部が欠損しているが卵円形のようであって、中頭型にみえる。

側面観： 右でみると側頭線の発達は良好で、その下端にある *Crista supramastoidea* は龍骨状に高まる。また乳様突起との間の *Sulcus supramastoides* は深い。この乳様突起は中等度の発達で、乳様切痕は深く、その後端は扇状に拡大して終る。

後面観： 家型の輪郭である。項平面の粗面の発達はよいが後頭隆起は悪い。

底面観： 破損が著しく、観察はできない。

上顎骨： 前歯を含む小さな破片である。梨状口底部の形は幼若型をしている。

歯牙では右側切歯があるだけであるが、その咬耗は Broca の第 1 度である。

左犬歯は歯槽閉鎖し、その後方の第 1 小臼歯は後内側に向かい捻転している。

下顎骨： 右下顎枝後端が欠如することを除けば、ほぼ完全である。

前面観で頭隆起はよく発達する。その両側には臨小窓が著しい。

側面観で *Prominentia lateralis* は底に向って斜降し、底縁に沿い中等度の *Torus marginalis* をつくるが、前端の *Torus marginalis anterius* は異常に強く、*Tuberculum laterale* とは区別しにくい。下顎枝は全体としてやや細長く、*Proc. coronoideus* もまた細長で下顎切痕も深い。下顎角は幾分外翻し、*Fossa masseterica* はかなり強く凹んでいる。*Inc. Praeangularis* はない。

内面では小臼歯から第 1 大臼歯にかけて軽度の *Torus mandibularis* がみとめられる。歯槽縁は抛物線型で、歯は右第 2 大臼歯、左第 1 大臼歯を除くと總て死後遊離紛失する。それら残存歯から見ると咬耗は Broca の第 1 度である。歯槽でみると智歯は既に萌出するが、第 1、第 2 大臼歯に比較すると根は小さく、この点から歯冠も退縮していたものと思われる。

なお特記すべきことは左右犬歯歯槽は他の歯槽が開放するにもかかわらず、揃って閉鎖していることである。このことは上顎犬歯が閉鎖していることを思い合わせるとき、總ては人為的な抜歯風習の一型式を示すものと思われる。

## 2. 頭骨の計測

破損が甚だしいために少數の項目のみ計測可能である。

脳頭骨の大きさは、最大幅、耳プレグマ高などの値から見て、概ね中等であると見なされる。正中頭頂弧長および弦長はかなり大きい。

下顎は全体としてやや小さい。頬高は小さく石器時代人的である。下顎枝幅は石器時代人としては小さい方であるが、切痕は深い。下顎枝角はやや小さい。

## 3. 四肢骨の形質

本人骨の軀幹骨および四肢骨は左尺骨、骨盤破片、左大腿骨、左脛骨、左腓骨から成っていて、他の骨は発見されていない。

左尺骨： 肘頭および下端約 $\frac{1}{4}$ を欠く。尺骨粗面は狭く小さいが、高く隆起している。骨間筋の發達は比較的強く、背側縁は丸く鈍い。

骨盤： 破損が甚だしく、観察および計測することが不可能である。

左大腿骨： 大転子、小転子および下端を欠く。彎曲はかなり強く柱状形成は著しい。骨体上部は扁平でない。外側面は多少凹、内側面は多少凸である。大臀筋附着面は凹凸に富む。

左脛骨： 上下骨端および骨体の内側面上半を欠く。前縁は現代人に比べて鈍く、やや内側に凸である。骨体中央の断面はかなり扁平であると思われる。膝窩筋線の發達は弱い。

左腓骨： 破損が甚だしくわずかに下端附近約 $\frac{1}{5}$ が残っているのみである。

## 西貝塚第2号人骨（成人男性）

### 1. 頭骨の観察

著しく頑強な成人の男性骨であつて、ほぼ完全である。全体として第1号人骨より大きい。

脳頭骨： 三主縫合は内外板とともに開放し、その鋸歯は簡単である。

前面観： 前頭骨の屈曲はやや強く、従つてよく膨隆し中央に矢状溝がある。

眉間の隆起および眉上弓の発達は著しい。前頭骨、頬骨突起は下垂せずしてむしろ外側に向って突出する。眉間にづく鼻根の隆起もまた強く、したがって鼻前頭縫合は強く陥凹する。眼窓の形は低い四角形で、その傾斜は弱い。鼻は中鼻型で、その下縁は人類型である。上下顎は大きく、歯列は正しく、歯の生前脱落ではなく、その咬合型式は鉗子状である。

上面観： 頸卵円形をなし、中頭型である。縫合鋸齒は簡単で、融着はない。頭頂孔は右は通常の大きさのもの 1、左は小なるもの 2あり、頭頂結節は中等度。その他に特記すべきことはない。

側面観： 高径は中等度で orthokran に属す。眉間隆起は強く、前頭部よく膨隆する。Pterion 部は H 型で Sulcus sphenoparietalis はよく認められる。頬弓幅はよく膨隆する。側頭頭頂縫合の彎曲は強い。側頭線は比較的よく発達し Crista supramastoidea はよく発達し、下方に向かってよく突出する発達のよい乳様突起の基部との間に存する Sulcus supramastoideus の発達もよい。下顎関節窩は深く、その前の Tuberculum articulare はよく発達する。

後面観： 家型 (Hausform) である。最も著しい点は後頭骨項面の粗面の発達がよいことである。外後頭結節の発達は極めて弱い。

底面観： 上顎大きく、頬弓の外突は著しい。乳様突起の内側には Proc. paramastoideus よく発達する。その他特記すべきものはない。

下顎骨： その全形は第 1 号人骨に甚だよく類似しているが、形は大きく、歯弓もまた大きい。

Prominentia lateralis はよく発達し、その連続である Torus marginalis は著しい。Tuberculum marginale anterius と posterius はよく発達し、前者にあつては Tuberculum laterale とかなり深い溝によって境されている。

下顎枝は寧ろ細長い方で、Proc. coronoideus はやや細く尖り、Proc. condyloideus との間に深い下顎切痕を残す。

下顎角は外側に翻転し、Prominentia lateralis との間の Fossa masseterica はよく凹む。

下顎内面では犬歯より後方にあって、歯槽縁に近く軽度の Torus mandibularis

aris がある。Torus alveolaris とその後方の Torus triangularis はともに高く隆起し、その続きの Crista endocoronoidea もまた発達がよいが、Crista endocondyloidea は寧ろ弱い。Tuberositas pterygoidea の発達は著しくよい。

歯牙： 上下顎歯とも生前脱落ではなく、したがって人為的抜除の跡も見られない。智歯は總て萌出しているが、その大きさは小さく退化している。歯の咬合の咬耗は弱く、歯骨の露出するところは見当らない。總ての歯に歯石が見られるが、とくに上下顎とも前歯に著しい。

## 2. 頭骨の計測

脳頭骨の大きさと主径： 頭骨モヅルスの値は日本石器時代人および現代日本人の平均値に比してかなり大きく、大頭であることが知られる。これは、最大長、最大幅、バジオン・ブレグマ高の三者ともに大きいことによる。

長幅示数 78.3 は中頭型に属する。

周径および弧長： 頭骨水平周は現代日本人の平均よりは大きく、石器時代人的である。横弧長も大きい。

正中矢状弧長もかなり大きい値を示すが、これは特に前頭部、次いで頭頂部が大きいことによる。

矢状前頭示数、頭頂示数、後頭示数および後頭上鱗崎曲示数などに示される正中矢状面上の弯曲の強さは、石器時代人として中等である。

脳頭骨の角： 後頭頸曲角は大きく、石器時代人的である。前頭の傾斜角、弯曲角はともに中等である。

顔面頭骨の主径： 顔長は大きい。

幅径では、上顎幅、頬骨弓幅、中顎幅とともに大きいが、特に頬骨弓幅はかなり大である。

高径では、顎高はやや小さいが石器時代人としては大きい方である。上顎高も同様である。

したがって Kollmann ならびに Virchow の顎示数および上顎示数は、いずれもかなり小さい値を示し、広顎型に属する。

顎窩および鼻： 眼窩幅は中等、顎窩高はかなり小さく、したがって眼窩示数

もまたかなり小さい。

鼻幅はかなり大きく、鼻高は中等であるから鼻示数はかなり大きい値を示す。

上 頸： 上顎歯槽長、歯槽幅、歯槽示数はともに中等である。

口蓋幅はかなり大きいが、口蓋高は中等である。

下 頸： 幅径では、下顎小頭幅、下顎角幅ともにかなり大きく石器時代人的である。

頬高は小さい。

下顎枝幅はやや大きいが、下顎枝角は中等、下顎切痕高は大きく、切痕幅は中等、切痕示数はやや大きい。

顔面骨： 全側面角、鼻側面角の二つは、ともに中等の大きさであるが、歯槽側面角はかなり小さく、hyperprognath に属する。

### 3. 四肢骨の形質

保存状態は良好である。

鎖 骨： 左側は胸骨端を欠く。骨体は現代人と比べてやや長く、丸く太い。また骨体の彎曲も強い。肋骨粗面は比較的良好発達している。

上腕骨： 右側は完全であるが、左側は大結節を欠く、現代人と比べて長さは変わらないが著しく太い。大結節および小結節は大きい。大結節稜は大胸筋附着部において強く隆起し、幅広く、凹凸に富む。また三角筋粗面の発達も強く、左側では前者との間に浅く広い溝を作る。橈骨神経溝は顯著である。外側縁において橈側上顎附近に強い粗面状の隆起が見られる。尺骨上顎は強く内側に突出する。骨体彎曲は強くなく、捻転角も中等度である。

桡 骨： 右側は下端約 $\frac{1}{6}$ を欠く。左側は完全である。骨体はかなり太い。橈骨結節はよく発達し、その面積は大である。橈骨小頭窩はかなり凹む。骨間稜は比較的よく発達している。回内円筋の附着部は発達し、凹凸に富む。骨体彎曲はやや強い。

尺 骨： 右側の茎状突起を欠くほか、ほぼ完全である。骨体は著しく太く、肘頭も幅広い。肘頭上面は強く屈曲して後面に移行する。尺骨粗面は大きく、凹凸に富み、またその上方にやや深い凹所を作る。右側の回外筋稜は著しい

が、骨間稜に連続しない。骨間稜は非常に強く突出する。掌側縁と背側縁は共に鈍い。方形回内筋附着部は良く発達している。

**寛骨：**左右共恥骨および寛骨臼を欠く。右側は腸骨翼がかなり破損している。計測絶対値は現代人より大きい。寛骨臼、耳状面も大きく、腸骨窩はやや深い。腸骨稜内層および外層は良く発達している。上縫線はかなり明瞭に認められる。坐骨結節は良く発達し大きい。

**大腿骨：**右側は骨頭下半を欠くが、左側はほぼ完全である。骨体、骨端共に著しく太い。大腿骨頭は特に太い。臀筋粗面は著しく発達している。転子間線の発達は特に右側が良好である。恥骨筋線の発達も良い。大腿骨稜は良く発達し、柱状形成をなしているが、第1号人骨より弱い。また骨体の弯曲も同人骨より弱い。膝窩面は平坦で広い。膝蓋上窩は広く深い。

**脛骨：**左右共ほぼ完全である。骨体はやや長く、著しく太い。脛骨粗面はよく発達し、その内側に浅く広い溝を作る。またこの粗面の位置は低く、骨頭はここより後方に強く屈曲する。したがって上面傾斜角は大きく捻転も強い。骨体はかなり前方に弯曲し、同時に内方にやや弯曲する。膝窩筋線の発達は良好である。前縁は現代人に比べて鈍い。腓側面は非常に幅広く、骨体は極度に扁平である。骨体中央断面は鈍角三角形をなし Hrdlicka の第Ⅱ型に属する。

**腓骨：**左右共骨頭の一部が破損しているが、ほぼ完全である。骨体はかなり太いが、いわゆる巨大腓骨ではない。骨端は比較的大きい。骨稜の発達は良いが骨稜の間に見られる溝はあまり深くない。踝関節面の上方に粗面様の隆起が良く発達している。

## 総 括

以上要するに西貝塚発掘の2体の人骨のうち、第2号人骨は正しく縄文時代人の典型的な形質を具えたものといえるが、第1号人骨では頭骨ならびに四肢骨ともかなり不完全であつて十分な検討ができない。しかし下顎は両者互いに類似している。また第1号人骨には人為的な抜歯の跡があり、やはり縄文時代人と見なして差支えない。

(鈴木尚・佐倉新・池藤萬里)

第10表 頭骨計測値

Martin 1928	No. 1	No. 2	Martin 1928	No. 1	No. 2
2 グラベロ・イニオン長		181	41 刻頭長		78
1 頭骨最大長		189	42 下顎長		114
8 頭骨最大幅	142	148	43 上顎幅		110
8:1 長幅示数		78.3	44 間顎窩幅		103
17 バジオニ・ブレグマ高		154	45 頸骨弓幅		(146)
(1+8+17)/3 頭骨モブルス		163.7	45(1) 頸骨後幅		123
17:1 高示数		81.5	46 中顎幅		104
17:8 幅高示数		104.0	47 顎高		119
18 全頭骨高		155	48 上顎高		68
20 耳プログマ高	116	124	47:45 コルマンの顎示数		(81.5)
21 遠近耳高		125	48:45 コルマンの上顎示数		(46.6)
9 最小前頭幅		99	47:46 ウィルヒヨウの顎示数		114.4
10 最大前頭幅		124	48:46 ウィルヒヨウの上顎示数		65.4
11 前耳幅	123	131	(46+45+47)/3 顎モブルス		124.3
12 最大後頭幅	113	113	48(1) 奥槽突起高		14
5 頭骨轟長		113	49a 眼間幅		22
7 大後頭孔長		35	50 前眼窓間幅		20
16 大後頭孔幅		32	51 眼窓幅 (左)		43
23 頭骨水平周		539	52 眼窓高 (左)		30
24 横弧長	(338)	338	52:51 眼窓示数 (左)		69.7
25 正中矢状弧長		390	54 差高		30
26 正中前頭弧長		139	55 鼻高		52
27 正中頭頂弧長	142	131	54:55 鼻示数		57.7
28 正中後頭弧長		120	57 鼻骨最小幅		10
28(1) 後頭上鱗弧長	76	76	57(1) 鼻骨最大幅		18
29 正中前頭弦長		121	60 上顎齒槽長		55
30 正中頭頂弦長	124	118	61 上顎齒槽幅		69
31 正中後頭弦長		105	61:60 上顎齒槽示数		125.5
31(1) 後頭上鱗弦長	71	72	61(2) 上顎前齒槽幅		47
29:26 矢状前頭示数		87.0	63 口蓋幅		47
30:27 矢状頭頂示数	87.3	90.1	64 口蓋高		12
31:28 矢状後頭示数		87.5	68 下顎長		(77) 77
31(1):28(1) 後頭上鱗偏曲示数	93.5	94.7	65 下顎小頭幅		136
40 顎長		108	68:65 下顎齒槽長示数		56.6

65(1) 頸 奥 起 横		108	70(3):71(1) 下 頸 切 滑 示 故	(44.5)	45.9
66 下 頸 角 幅		114	32(1) 前 頸 頭 斜 角		61°
67 前 下 頸 體 高	46	53	32(5) 前 頸 頭 凸 角		130°
69 頸 體 高	(26)	32	33 ラムダ・オビスチオン角		115°
69(1) 下 頸 體 高	29	31	33(1) ラムダ・イニオン角		97°
69(3) 下 頸 體 厚	13	19	33(4) 後 頸 頭 凸 角		131°
70 下 頸 枝 高	(65)	58	34 大後 頸孔傾斜角		+3°
70(1) 前 枝 高	65	76	37(2) 頸 頭 底 角		27°
70(2) 最 小 枝 高	50	58	72 全 側 面 角		85°
71 下 頸 枝 體	31	36	73 草 側 面 角		90°
71:70 下 頸 枝 示 故	(47.8)	52.9	74 脊 增 側 面 角		63°
70(3) 下 頸 切 體 高	(16)	17	76 頸 側 面 角		118°
71(1) 下 頸 切 滑 幅	(36)	37	79 下 頸 枝 角	121°	125°

第 II 表 四肢骨計測値

上 腕 骨		No. 1		No. 2		15 肘 痘 寬 深				13	13
Martin	1928	右	左	右	左	16 頸 体 角				83°	86°
1 最 大 長				300	295	17 頸 体 角				53°	54°
2 全 長				297	292	18 滾 軸 角				22°	23°
3 上 體				52	—	橈 骨		No. 1		No. 2	
4a 頸 上 體				61	61	Martin	1928	右	左	右	左
5 中央 最大 徑				26	25	1	最 大 長	—	—	243	
6 中央 最小 徑				20	20	2	生 理 学 長	—	—	228	
6 : 5				71.9	80.0	3	最 小 徑	48	44	18.1	
6b 中央 橫 徑				24	23	3 : 1		—	—	19.3	
6c 中央 矢 狀 徑				22	23	3 : 2					
7a 中央 周 徑				75	73	4 体 橫 徑		20	18		
7 最 小 周 徑				70	68	5 体 矢 狀 徑		13	13		
7 : 1				23.3	23.1	5 : 4				65.0	72.3
9 頸 壓 徑				45	46	4a 中央 橫 徑		19	18		
10 頸 高 徑				45	45	5a 中央 矢 狀 徑		13	12		
9 : 10				100.0	102.2	5a : 4a				68.4	66.7
11 滑 車 幅				26	27	5(5) 中央 周 徑		52	48		
11 : 4a				42.7	44.3	4(1) 小 頸 橫 徑		22	22		
14 肘 頸 痘 幅				27	26						

5(1) 小頭矢状径		23	24	10 髋骨翼高		(115)	117
5(6) 下端幅		—	34	11 髋骨深		—	9
6 体側曲弦長(a)		—	178	12 髋骨輻		158	159
体側曲高(h)		—	5	12 : 10		(133.9)	135.9
体側曲示数(h/a)		—	2.81	11 : 12		—	5.6
7 頸体角		12°	13°	15 坐骨高		(84)	84
尺骨	No. 1	No. 2		22 寬骨臼最大徑		53	54
Martin 1928	右	左		Martin 1928	右	No. 1	No. 2
1 最大長	—	—	261	1 最大長	—	434	435
2 生殖子長	—	230	230	2 自然位全長	—	431	431
3 最小周徑	—	42	39	3 最大胚子長	—	426	424
3 : 1	—	—	14.9	4 自然位胚子長	—	414	413
3 : 2	—	18.3	16.9	5 体長	—	349	349
13 上橫徑	17	24	25	6 体中央矢狀徑	30	30	30
14 上背腹徑	24	28	30	7 体中央廣徑	26	27	26
13 : 14 プラットレー示數	70.9	85.8	83.4	8 体中央周徑	115.3	111.1	115.3
12 中央橫徑	14	18	18	9 : 7	89	91	90
11 中央背腹徑	14	16	16	8 : 1	—	21.0	20.7
11 : 12	100.0	88.9	88.9	8 : 2	—	21.1	20.9
中央周徑	48	55	57	9 体上橫徑	28	31	30
6 肘頭幅	—	29	28	10 体上矢狀徑	24	28	29
7 肘頭深	—	27	27	10 : 9	85.7	90.3	96.7
8 肘頭高	—	18	17	13 上骨端長	(85)	—	94
7 : 6	—	93.2	96.4	15 頸帶凹徑	30	36	37
8 : 6	—	62.1	60.7	16 頸矢狀徑	24	28	29
9 桡側切面凸溝	8	11	9	17 上骨端寬	—	—	—
10 桡側切面後緣	(11)	13	13	16 : 15	80.0	77.8	78.4
9 : 10	72.7	84.7	69.2	18 頸垂直直徑	—	—	50
4 体側曲弦長(a)	—	195	196	19 頸橫徑	42	—	49
体側曲高(h)	—	3	3	19 : 18	—	—	98.0
体側曲示数(h/a)	—	1.54	1.53	21 臍上幅	—	83	84
寛骨	No. 1	No. 2		7 : 21	—	32.5	31.0
Martin 1928	右	左		21a 臍側頸前幅	—	44	46
1 骨盤高			226	229	21b 臍側頸前緣	—	39
9 髋骨高			144	145	21c 臍側頸後緣	—	25
				21e 臍側頸後部	—	21	23

21d 頸 間 痘 幅	—	23	23	10a 菈脊孔位周徑	—	99	98
23 脊側頸最大長	—	65	64	10b 最 小 周 徑	—	77	78
24 歷側頸最大長	—	63	62	10b : 1	—	21.5	21.7
23 : 24	—	103.2	103.3	12 後 頸 角	—	19°	17°
25 脊側頸後高	—	40	40	13 上 面 傾 斜 角	—	14°	12°
26 脊側頸後高	—	40	39	14 捻 軸 角	—	14°	12°
25 : 23	—	61.5	62.5	肺 骨		No. 1	No. 2
26 : 24	—	63.5	62.9	Martin 1928	右	左	右
27 体鶴曲長(a)	311	304	304	1 最 大 長			348 346
体鶴曲高(h)	13	10	10	2 中 央 最 大 徑			17 16
体鶴曲示數(h/a)	4.19	3.29	3.29	3 中 央 最 小 徑			12 12
28 捻 軸 角	—	21°	20°	3 : 2			70.6 75.0
29 頸 体 角	134°	123°	128°	4 中 央 周 徑			46 45
30 頸 体 角	—	99°	99°	4a 上端下端小周徑			38 39
腫 骨		No. 1	No. 2	4a : 1			10.9 11.3
Martin 1928	右	左	右	左			
1 全 長	—	358	360	下端上端小周徑			43 44
1a 最 大 長	—	361	362	4(1) 上 骨 端 幅			17 17
2 頸 距 長	—	338	337	4(2) 下 骨 端 幅			21 22
3 上 鞘	—	76	75	鎖 骨		No. 1	No. 2
4 離 隆 高 位 矢 狹	43	43	44	Martin 1928	右	左	右
5 相 隆 高 位 最 小 徑	—	39	37	1 最 大 長			149 —
6 下 端 幅	—	(48)	49	2a 体 鞍 曲 高			34 —
7 下 端 矢 狹	—	38	38	2(1) 鞍 隆 端 鞍 曲 高			35 33
8 中 央 矢 狹	30	32	33	2a : 1			22.8 —
9 中 央 機 徑	—	21	21	2(1) : 1			23.5 —
9 : 8	—	65.7	63.7	4 中 央 機 徑			12 13
8a 菈脊孔位矢狹	34	39	38	5 中 央 矢 狹			11 12
9a 菈脊孔位機徑	—	24	23	4 : 5			109.2 108.3
9a : 8a	—	61.5	60.5	6 中 央 周 徑			40 42
10 中 央 周 徑	—	87	88	6 : 1			26.8 —

## 8. む す び

われわれが調査を行った僅か 10 日間の間に発掘面積は約 70 平方 m におよんだが、そこには種々な問題が少なからず提起されている。勿論この遺跡自体の学術調査が正式に行なわれて報告されたものが少ないという事情もあるが、その意味のみにおいても今度の調査結果の報告は、十分意義あるものといわなければならぬであろう。しかしながら上記したように、問題は単に発掘された——調査された結果だけにとどまるものではなく、むしろ今後の研究の方向を意義づける多くの問題が提起された、といわなければならぬ。その意味においては、今後の研究への出発点であるから、この「むすび」はむしろ正確にいいうならば「むすび」とはならず、多くの問題提起の「出発点」であるといわなければならぬであろう。

遺跡調査において最も目につきやすい著しい遺物は土器であるが、土器の様相がどのような状態を示すかは、既にその項目において述べたように、縄文時代後期の土器が主体をなしている。その後期の初頭には土着の性格が強く、時代を追うにしたがって次第に倣かずつ他地方の土器群の混入をみるとこととなつたのである。それは関東地方あるいは関西地方の様相であったが、漸次関西色が強くなつてくるという現象的な変化が一つの意味をもつてきている。それは土器型式で言うならば、宮滝新式土器・宮滝古式土器等がそれにあたる。恐らく東海地方においては、これ等の土器型式が集中的に認定される遺跡として西貝塚は最東端に位置するのではないであろうか。そのような意味あいにおいて土器型式自体の変化の内容——土着の様相を強くもつということから、あるいは文化変容の問題として普遍化されるのではあるまいか。一方、土器型式の様相は単に量的に顕著な遺物であるという意味において扱いやすいものであるが、もしもその土器の変化に文化変容の問題が具体的な形において内在するものとするならば、土器以外の遺物——石器、骨角器等の生産用具にもその具体的な現象が表出されるはずである。すなわち遺物全体——人類の遺産全体の組成を通じて文化変容の問題に介入することができるであろう。

次に遺跡の状態にそくしてその現象を観察することにしよう。磐田原洪積台地の南辺に位置する西貝塚は標高約5mの差をもってゆるやかに沖積面に接している。この貝塚の現状は大きく別けて三つの貝塚の分布を示している。しかし現状は住宅地域となっているために旧状全体を復原して考えることはなかなか困難な状態にあるが、われわれの発掘区域の観察によると東方から西方へ、南から北への貝層の堆積状態が観察された。したがって西貝塚に生活の場をもつた人々の住居は、われわれの発掘地点に対して東方、あるいは南方にあることになる。住居址の発掘はまだこの遺跡では行なわれていないから、その構造がどのような状態を示し、その分布がどのような外形をなすかについては、まだ殆んど何もわかつていない。しかしその貝塚のそれぞれの貝層の走行を観察するならば、その時期的な変化等を考慮に入れてあるいは集落の形態についても見通しをもつことができるかも知れない。われわれの発掘区ではトレンチの最北端が最も新しく次第に南に行くにしたがって古くなり、それと同時に基盤もゆるやかに上昇している。また東端においては貝層が最も薄く西走するにしたがって次第に厚さを増し新しくなる。これは縄文時代後期という限定された時間内における変化であるが、この貝層の走行とその反対の方向にあった居住地域——住居との位置的な変化がどのような関連をもつかは最も興味深い問題の一つに属している。なぜならばその変化は恐らく単に個々の住居の位置的な変化だけではなく、むしろ集落全体の傾向の一端として理解されるかも知れないからである。このように観察してみると、この発掘区域の第Ⅰ貝塚の北端ないし西端がこの遺跡では最も新しい時期に属することになるのである。その時期は恐らく縄文時代晩期に属するものであつたであろう。第Ⅱ、第Ⅲ貝塚は表面採集の結果だけからするならば、縄文時代後期初頭に属していることから第Ⅰ貝塚の問題と直接的な関連をもつて理解することはまだ困難である。

遺跡と遺物との両面から観察を進めるならば、縄文時代後期の西貝塚は豊浜の海岸砂丘によって閉鎖された縄文時代後期の潟湖に面していたことになるのである。この潟湖に面して西貝塚を始めとし、東貝塚、石原貝塚、見性寺貝塚等の後期から晩期にかけての遺跡群が知られている。すなわち、生態学的な表現をかり

るならば、この潟湖を中心的な主要生産活動の場としていたそれぞれの遺跡が、この潟湖に寄生しているとさえいえるのである。この潟湖を中心としてみる時、その遺跡群の間には、考古学的な手段にもとづいて認定される最小の文化圏内に属しているかのような強い結びつきがみられるように観察される。その遺跡相互間の関係は、まだその総ての遺跡が学術的な調査を経ていないために詳細な具体的な事実は知りえないが、表面採集等による——皮相的な観察が許されるとするならば、どうしてもその主要な生活舞台であった潟湖を中心として遺跡群が集中しているといわざるをえない。なぜならば採集経済の段階においてはその生産活動の主要な舞台である生活圏は各々の集落——各共同体と強く結びついていたからである。その重要な生産活動の場がある定まった共同体の占有地域として殆んど動かしがたいと推測されるからである。もしそうだとするならば、潟湖を中心とする沿岸漁業の形態とその遺跡群との間には密接な関連があったであろうと思われるるのである。

それにもかかわらず、主要な生産活動の場であった潟湖を中心としての遺跡間の関係——住居の移動がみられる基本的な原因は何んであったのであろうか。その問題を推進させるためには、遺跡から出土する主要な生産用具を調査する必要がある。この西貝塚では最も著しい生産用具は、漁具である網につけられた石錐とヤス、モリの類である。その生産用具と漁獲物——魚骨との関係は密接なものであったろう。それにもかかわらず、この遺跡からは全く釣針あるいは浮袋口といわれるような生産用具の出土をみていない。それらの道具の機能はいずれも漁具であるという点において共通点をもっている。一方のモリ、ヤスの類は直接的な行動を伴うという意味において積極的な生産用具といえるとするならば、他方の釣針、浮袋口といわれる類は待機の状態において獲物を待つという意味において消極的な生産用具であるといえるかも知れない。その消極的な生産用具は同じ潟湖に面する指呼の間にある石原貝塚において発見をみたものであるが、この西貝塚においては全くその出土をみなかつた。この漁獲方法の小さな相違が、その遺跡に生活を営んだ人々の生産活動の内容——生活内容と関係をもつくるものであったかも知れない。それは単に偶然に出土をみたものと否との差として理解

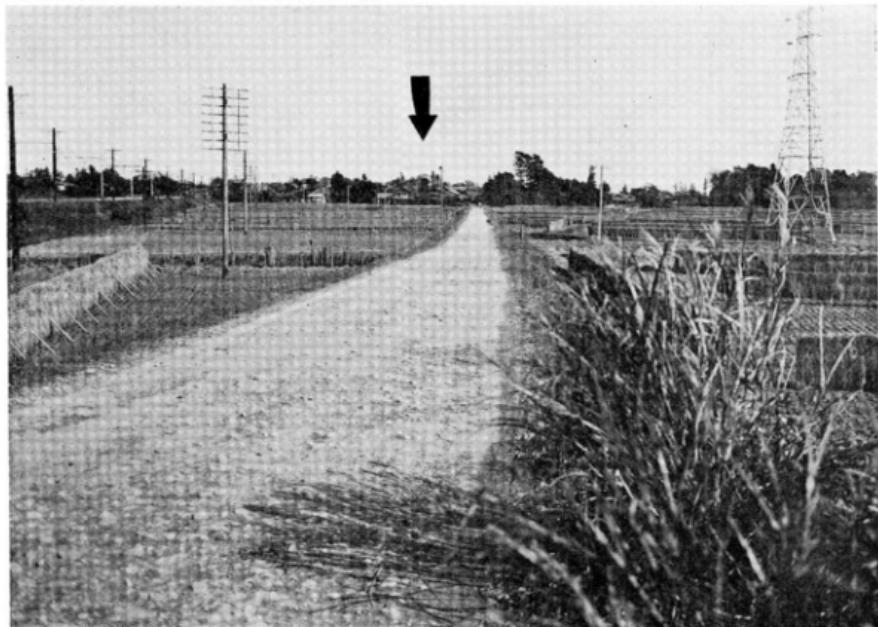
されるべきものではなく、ましてとるべき獲物の種類の問題としてのみ理解することは不可能なように考えられる。この現象を更に広い立場からみなおすならば、西日本に釣針、浮袋口の出土例が極めて少ないという現象とも一致点を見出すことができる。これは獲得される獲物の種類だけの問題ではなく、むしろその地域的な生活内容の問題と一緒に自然環境とも相関連してくることからであろう。恐らく西日本の縄文時代後期の人々の生活内容は、釣糸をたれる一本釣りのような期待にみちあふれた漁獲法よりもむしろ直接的にモリ、ヤスの類を使用することが多かった経済的な必然性があったのではないかであろうか。この問題をしばり本来の課題に立ちかえってみると、単に個人労働のあり方という問題だけではなく遺跡相互間の経済的な基盤に密着した特質——性格という問題に達着するが、今はそれらの問題を詳細に扱うには資料的な制約がありにも大きすぎる。ここではただそれらの問題を提起して後考を待つことにしたい。（麻生 優）

#### 参考文献

1. 後藤守一他「帆塚遺跡——その第一次発掘調査——」浜松市教育委員会 1957年 同じく第二次（1958年）第三次（1960年）発掘調査報告書参照
2. 市原寿文「遠江国磐田市西貝塚出土資料の再吟味」静岡大学文理学部研究報告 第8号 1957年
3. 同本 勇・麻生 優「日本石器時代総合文献目録」山河書店 1958年
4. 麻生 優・市原寿文「磐田市西貝塚調査概報」日本考古学会議会 第23回総会研究発表要旨 1959年
5. 市原寿文「遠江における縄文後期貝塚群の研究」日本考古学協会 第25回総会研究発表要旨 1960年
6. 麻生 優「縄文時代後期の聚落」考古学研究 第7巻 第2号 1960年

# 図版

図版第1 西貝塚遺跡遠景

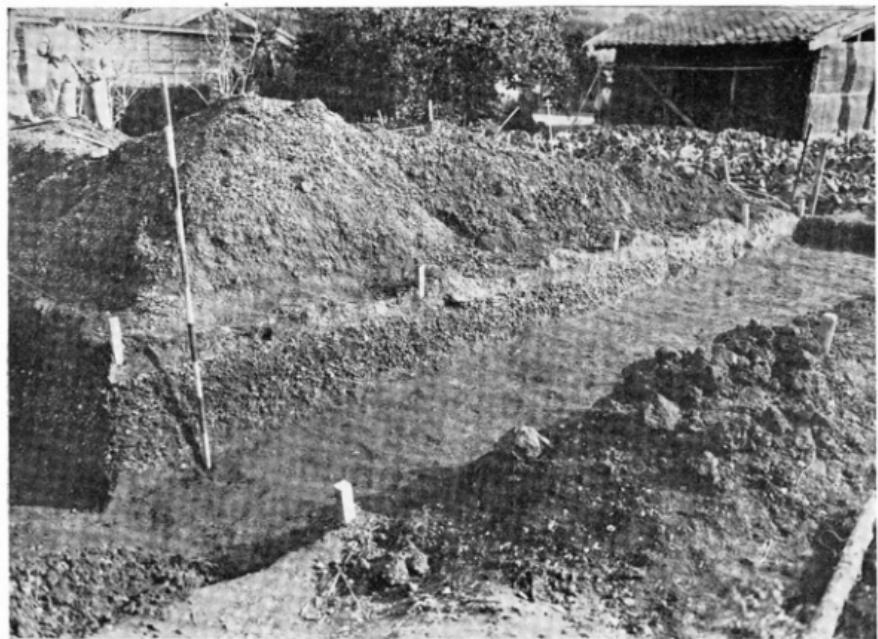


a. 東海道線に近接して市道より遺跡を望む

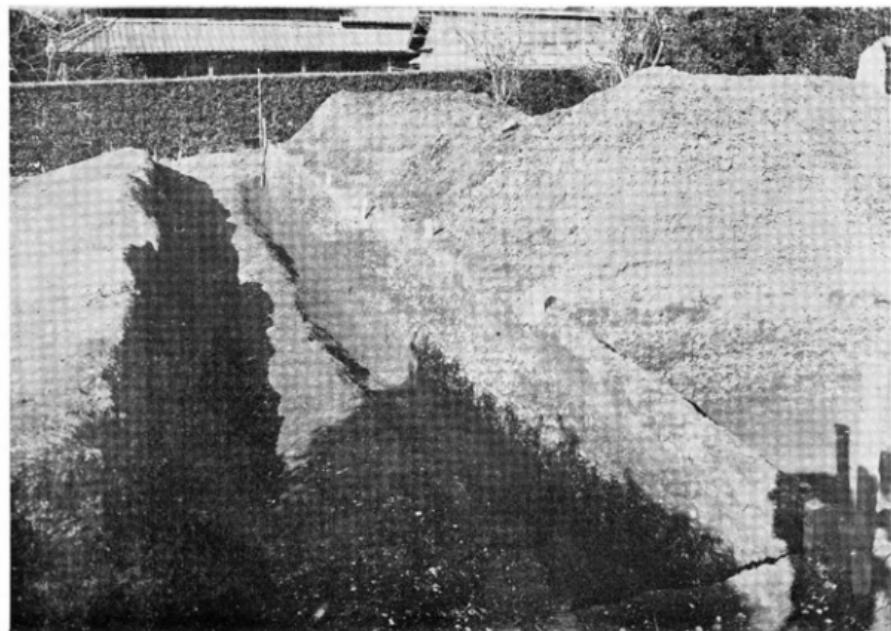


b. 西方冲積地より遺跡を望む

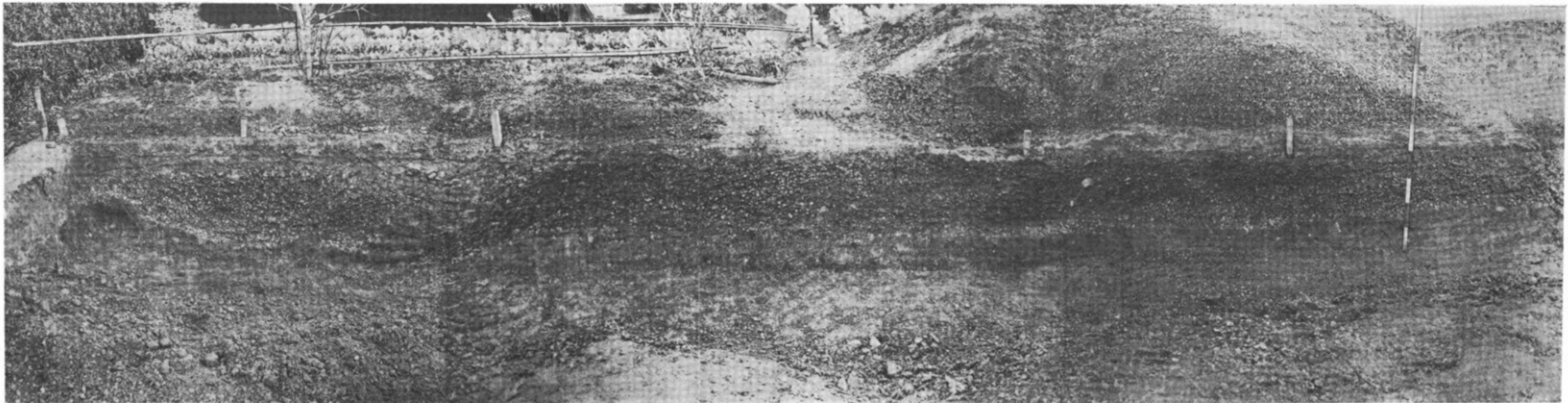
図版第2 トレンチの発掘調査



a. A トレンチ全景

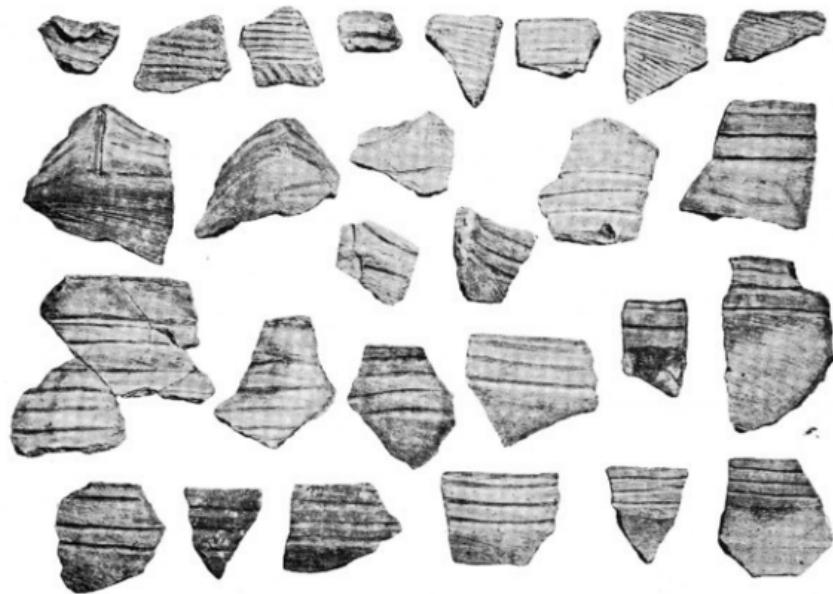


b. 5 トレンチ全景

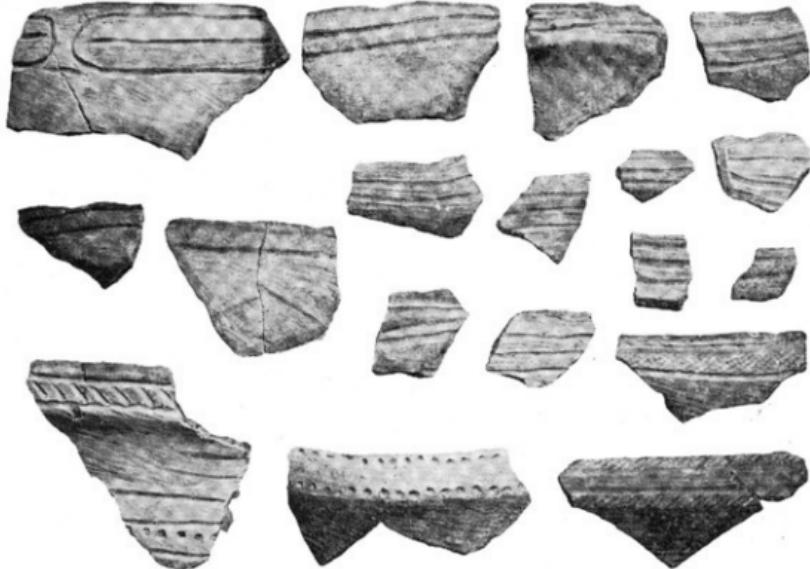


図版第3 4トレンチ東壁断面の貝層堆積状態

図版第4 出土遺物 その1

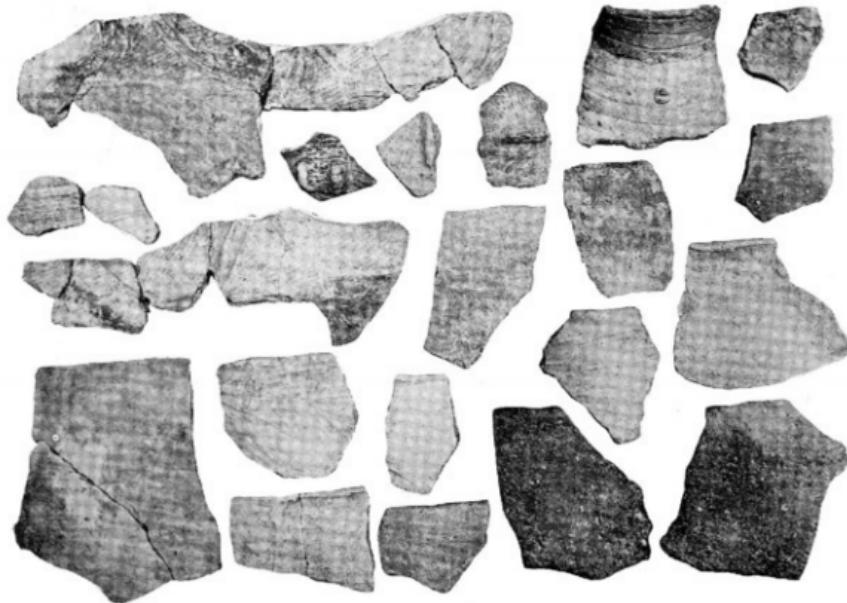


a. 晩期縄文土器および宮滝新式土器

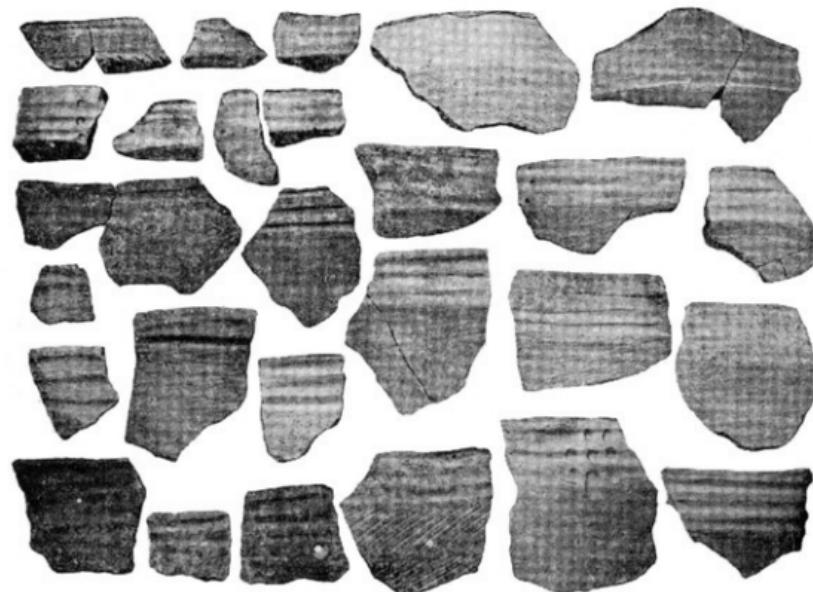


b. 宮滝新式土器

図版第5 出土遺物 その2

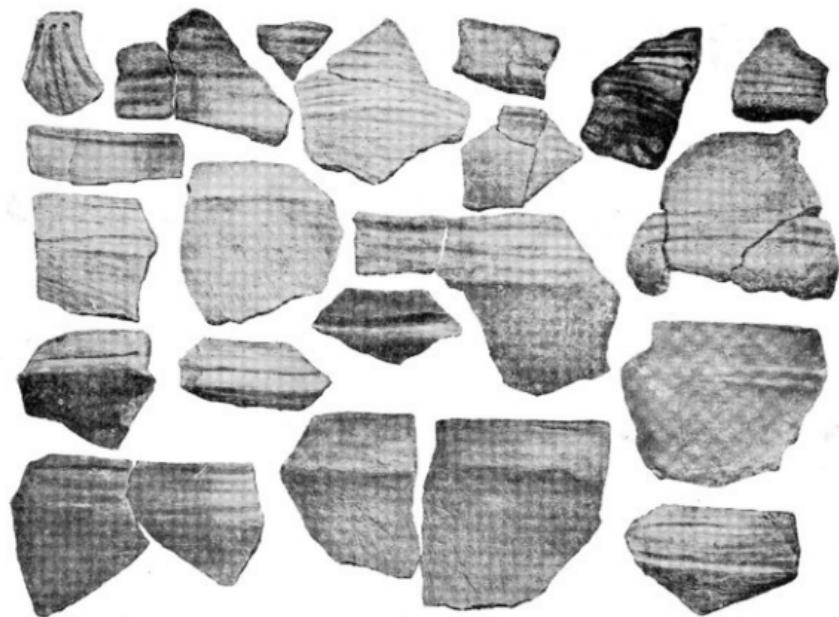


a. 宮滝新式土器

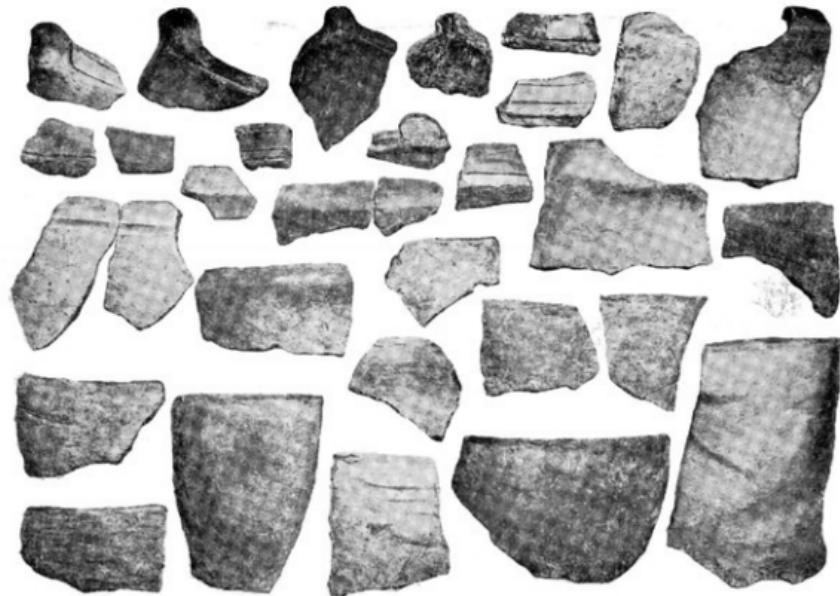


b. 宮滝古式土器

図版第6 出土遺物 その3

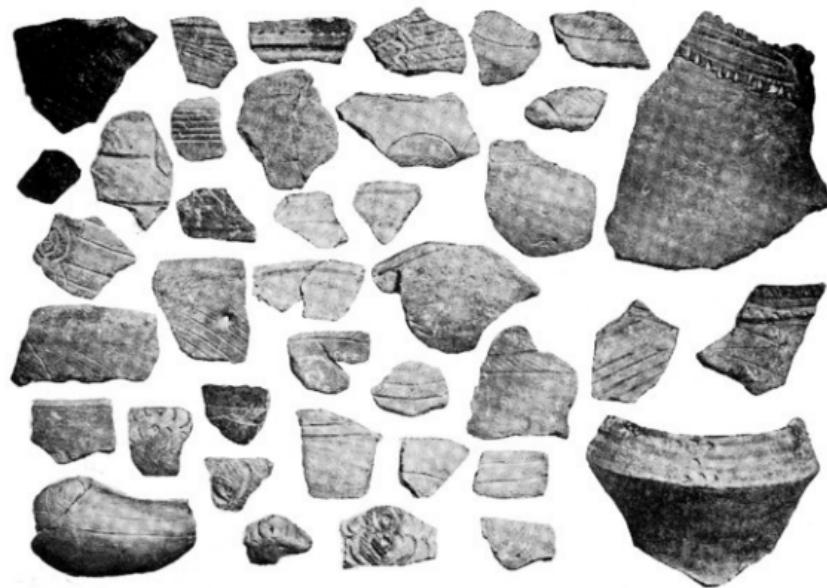


a. 宮 滝 古・式 土 器

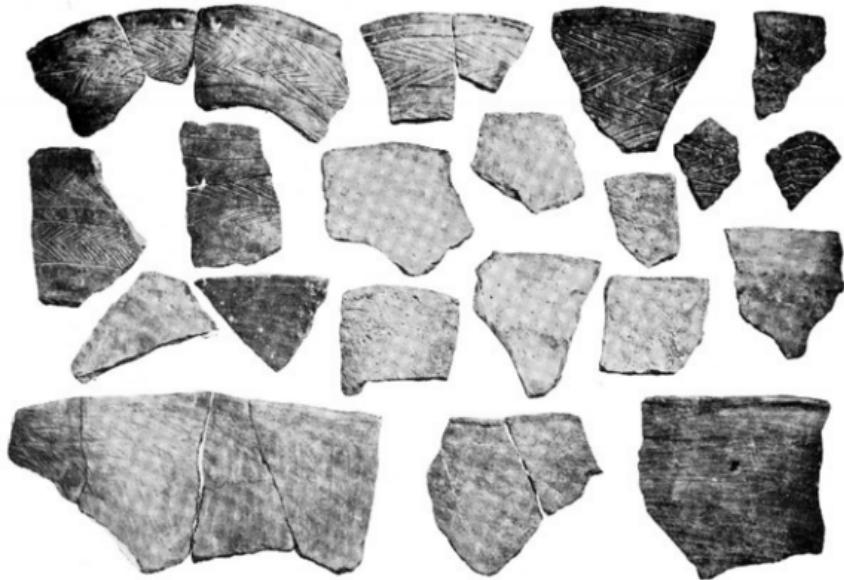


b. 蛸塚上層式土器および宮滝古式土器

図版第7 出土遺物 その4

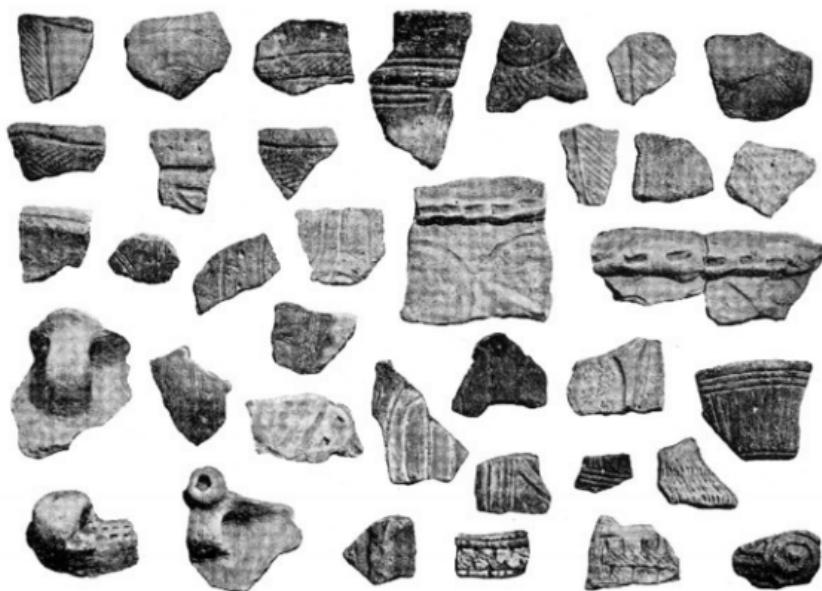


a. 加曾利B式土器・その他



b. 加曾利B式土器

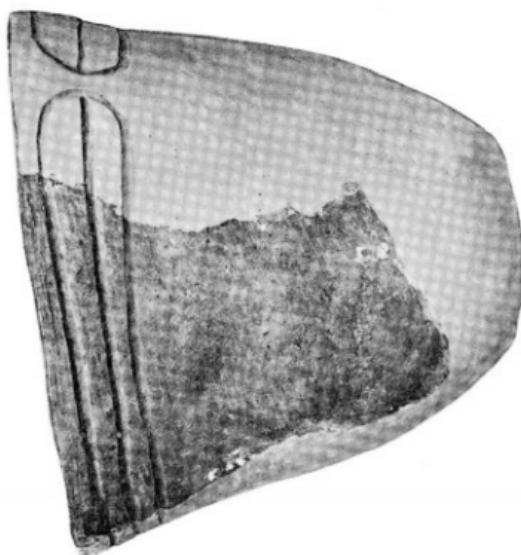
図版第8 出土遺物 その5



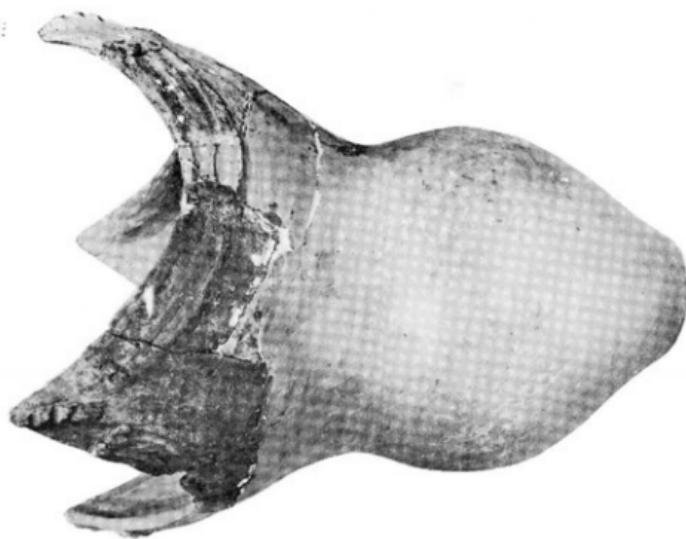
a. 桶之内式土器および前・中期縄文土器



b. 宮滝新式土器

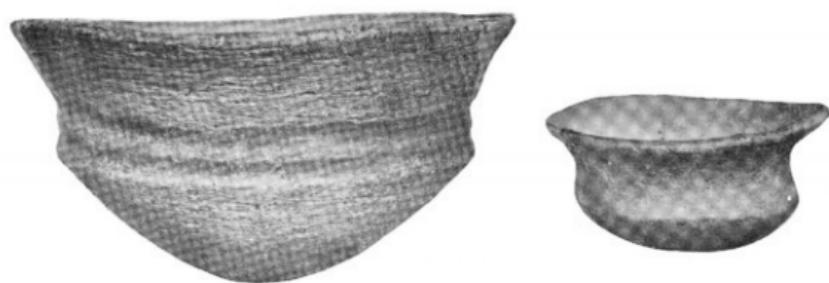


a. 宮 滾 新式土器

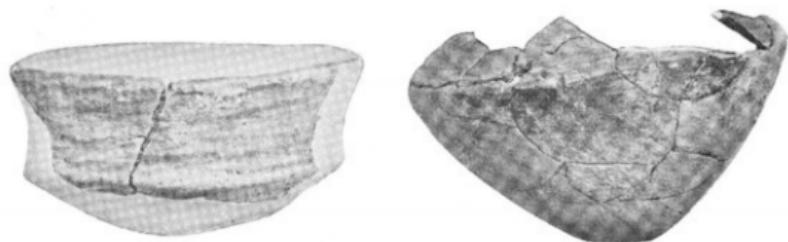


b. 宮 滾 古式土器

図版第10 出土遺物 その7



a. 宮滝古式土器

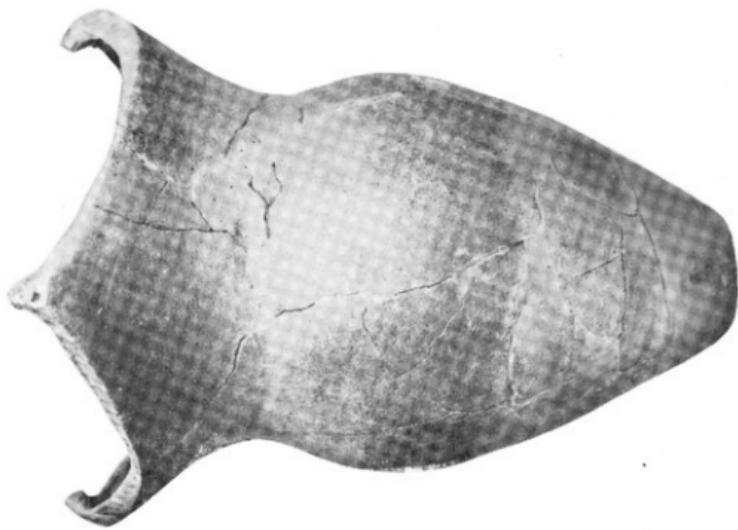


b. 宮滝古式土器

図版第11 出土遺物 やの8



a. 宮海古式土器

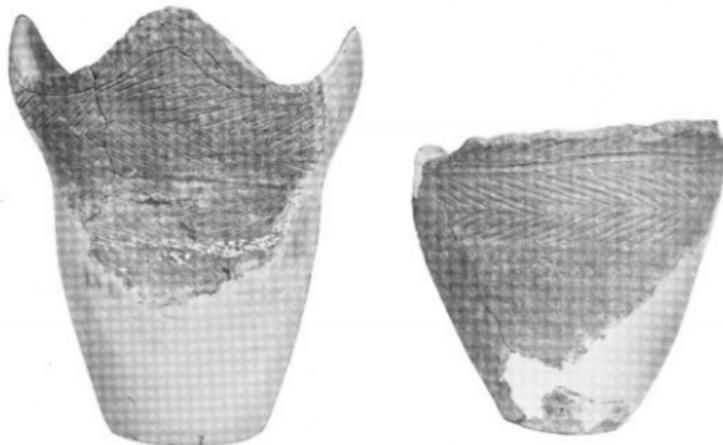


b. 加曾利B式土器

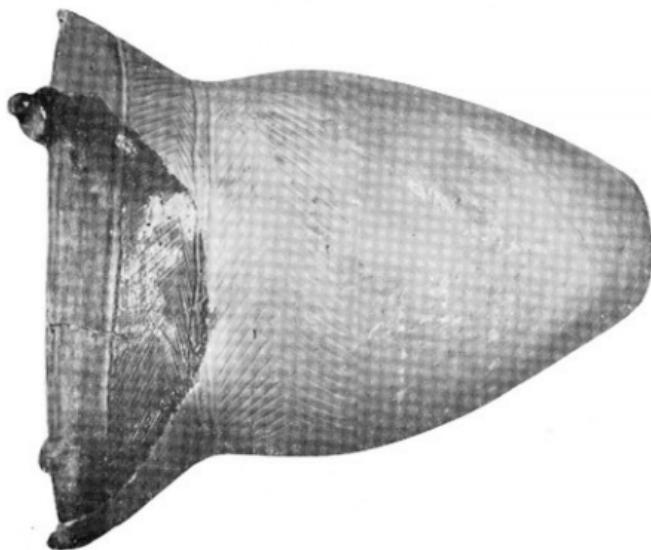
図版第12 出土遺物 その9



a. 加曾利B式土器



b. 加曾利B式土器

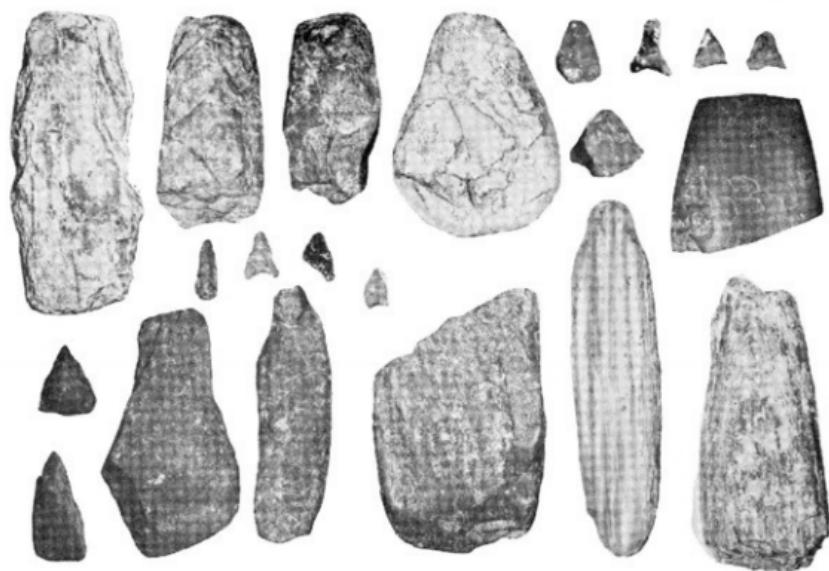


a. 加曾利B式土器

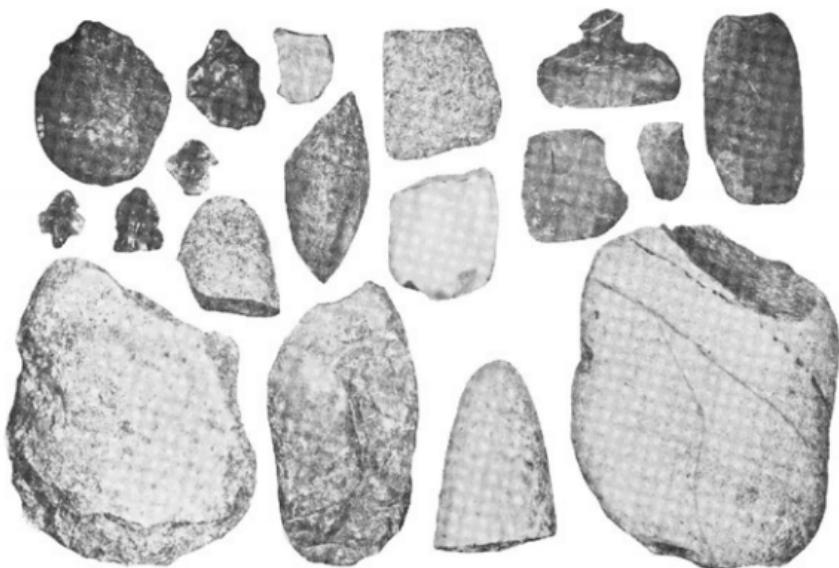


b. 加曾利B式土器

図版第14 出土遺物 その11

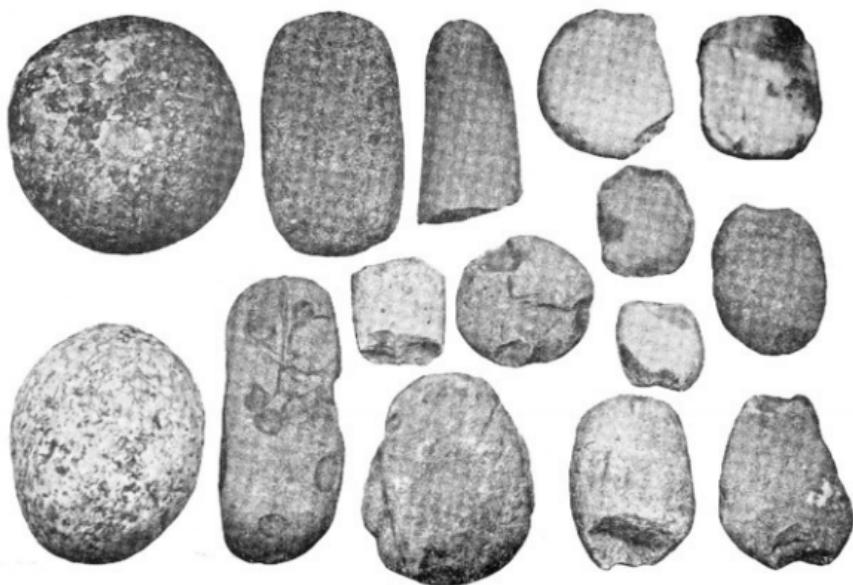


a. 表土層～第8層出土の石器（石鎚・利器）



b. 第4層～第8層出土の石器（石鎚・利器）

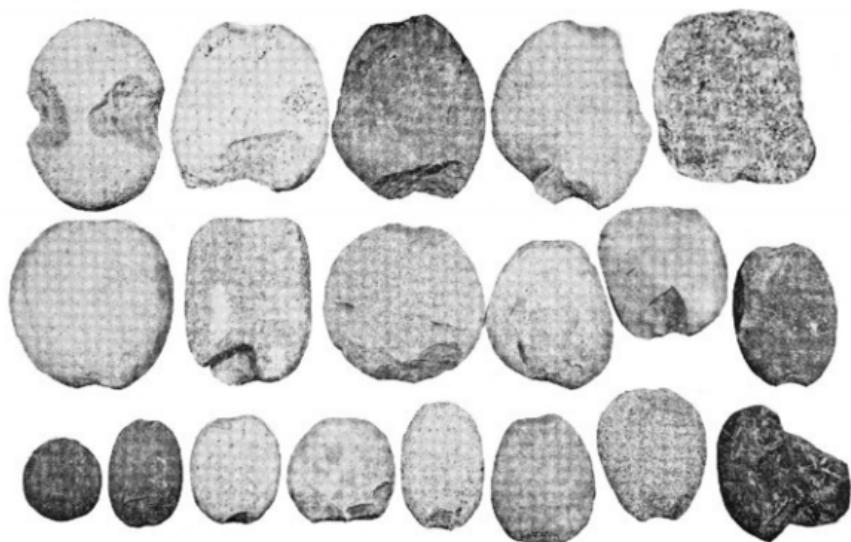
図版第15 出土遺物 その12



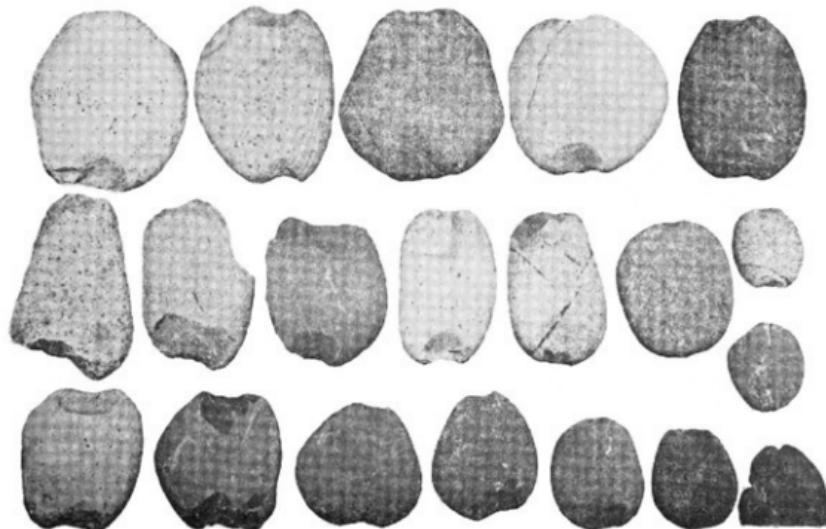
a. 表土層～第7層出土の石器（磨石・敲石・石錘）



b. 第2層～第5層出土の石器（砥石・石錐？）

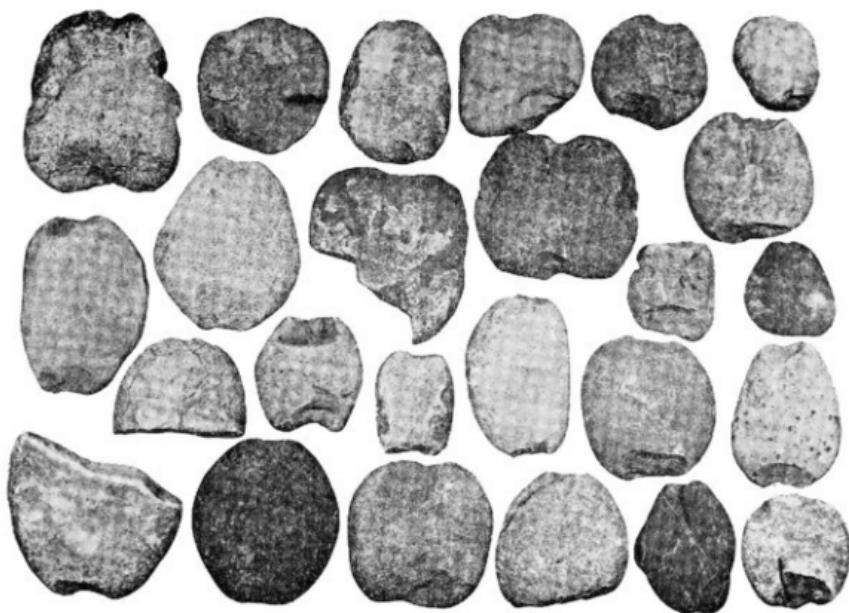


a. 第7層出土の石器（石錘）

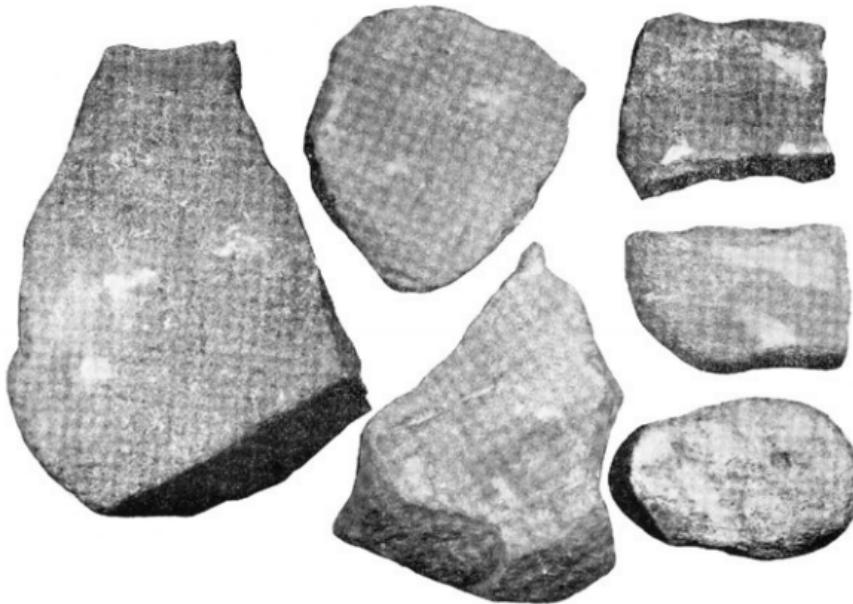


b. 第8層出土の石器（石錘）

図版第17 出土遺物 その14



a. 表土層～第4層出土の石器(石錐)

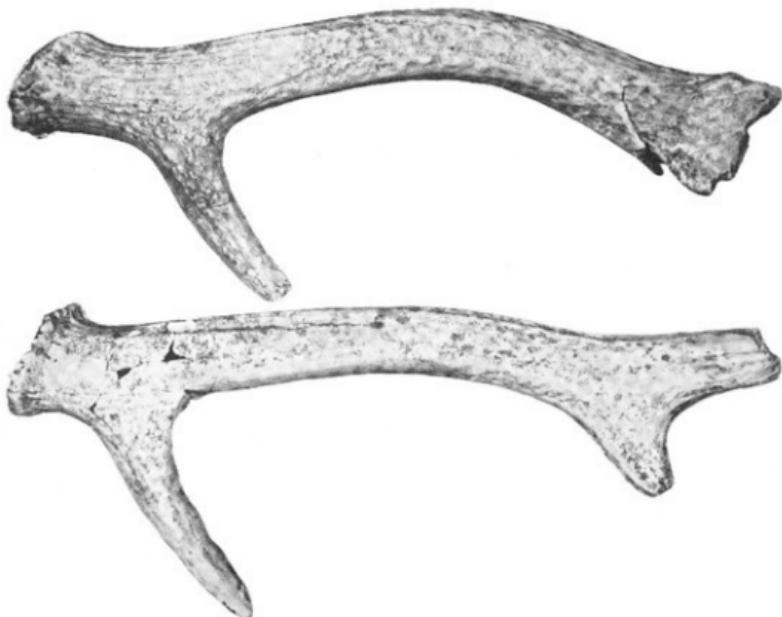


b. 第1層～第8層出土の石器(石皿・凹み石)

図版第18 出土遺物 その15



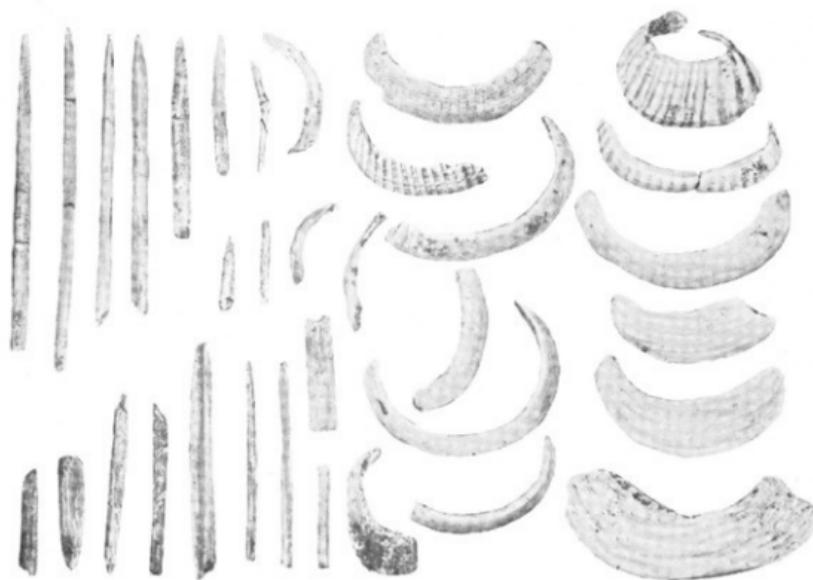
a. 第1層・第6層出土の石器（加工した浮石）  
第4層出土の骨器（骨斧？）



b. 第1層・第7層出土の角器（鹿角斧）

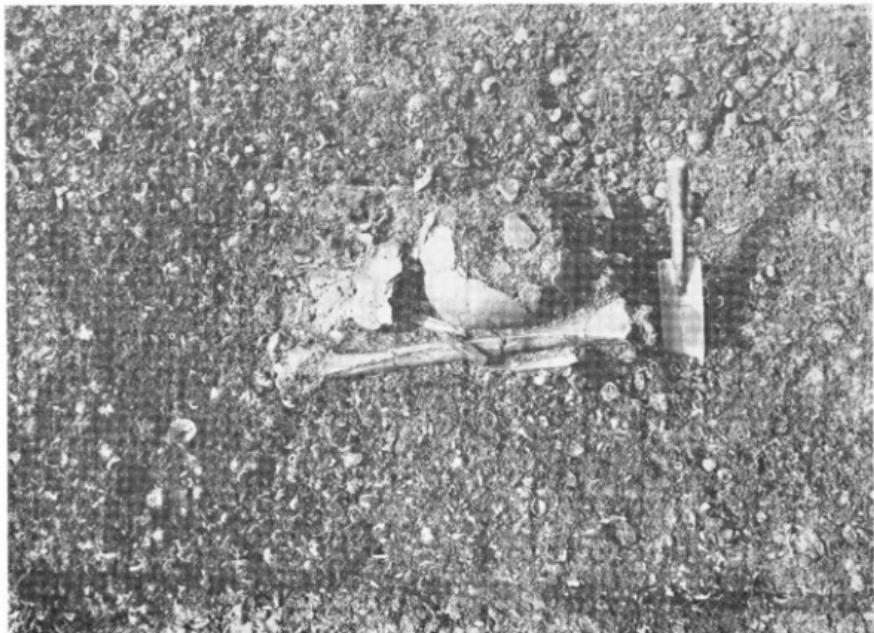


a. 第1層～第8層出土の骨角器

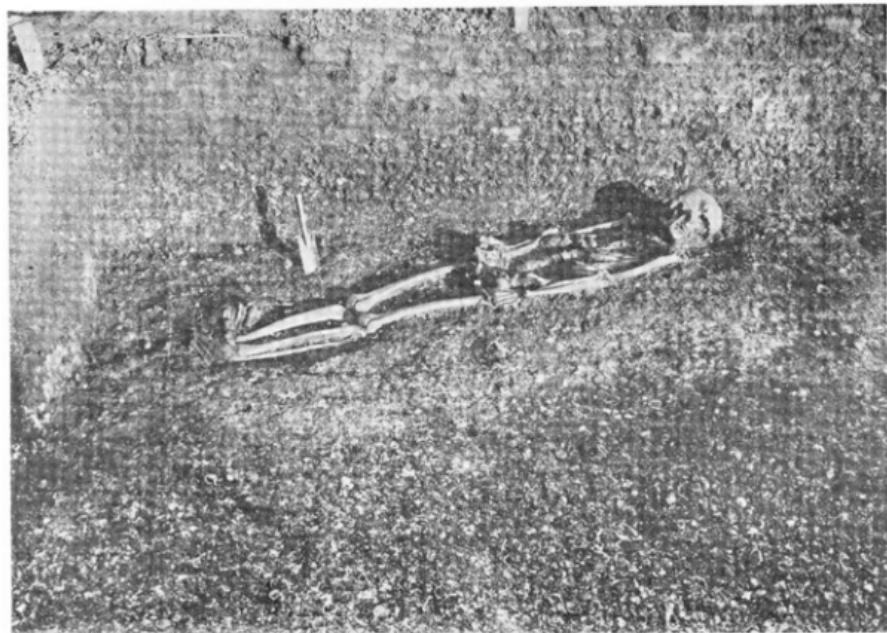


b. 第5層～第8層出土の骨角器  
表土層～第7層出土の貝輪・貝器

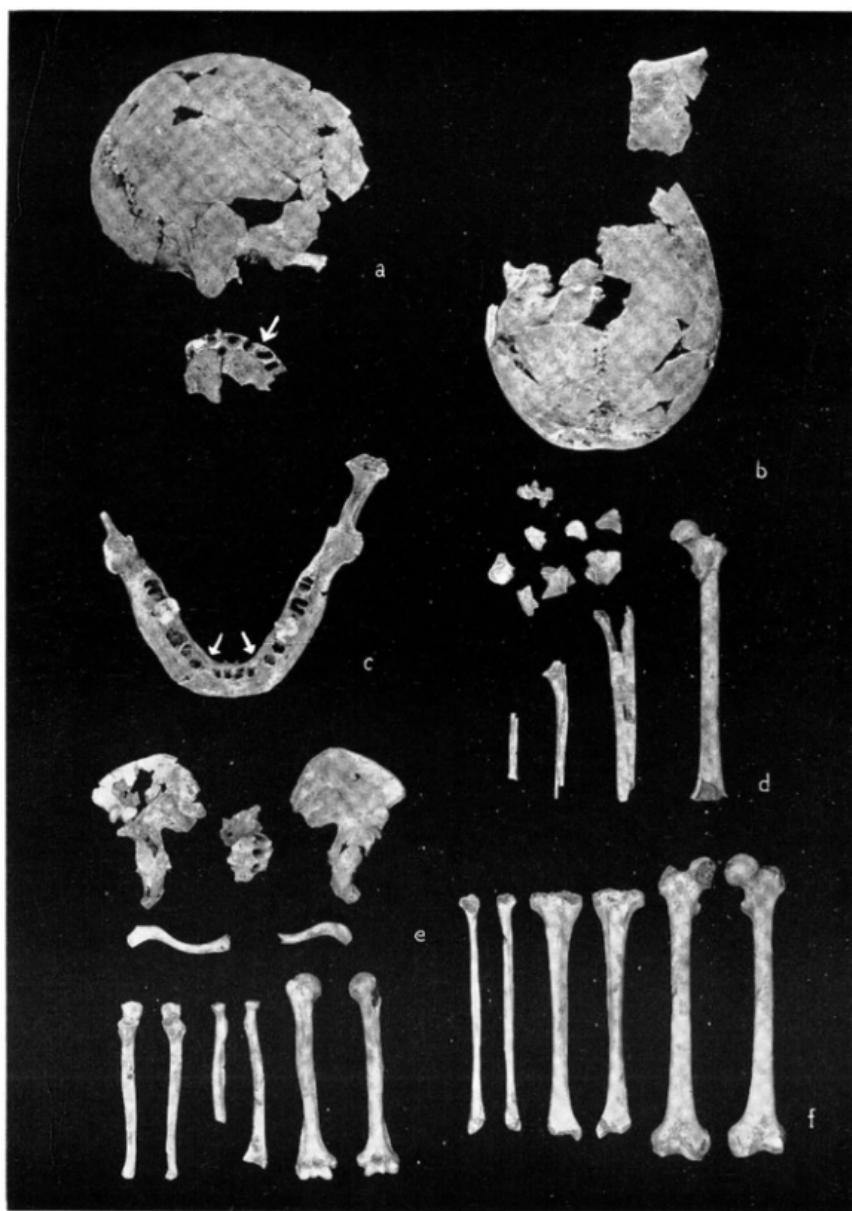
図版第20 入骨の出土状態



a. 第1号人骨出土状態（屈葬？）



b. 第2号人骨出土状態（伸展葬）



a. 第1号人骨頭骨側面観

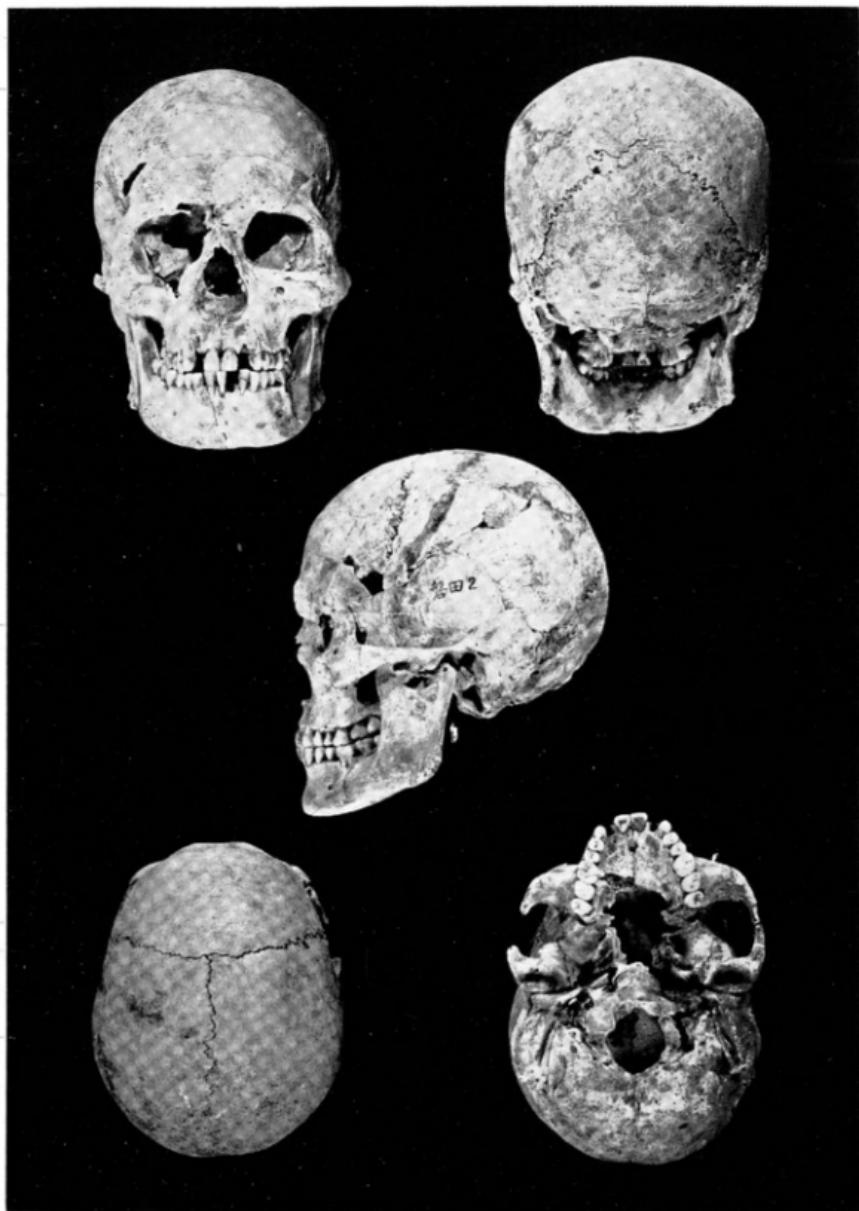
c. 第1号人骨に見られる抜歯の痕跡(矢印)

e. 第2号人骨骨盤および上肢骨

b. 第1号人骨頭骨上面観および前頭骨破片

d. 第1号人骨四肢骨

f. 第2号人骨下肢骨



◎ 昭和36年1月15日印刷  
昭和36年1月25日発行

(非売品)

編集者 代 表 麻 生 優

発行者 静岡県磐田市教育委員会

印 刷 者 静岡県磐田市六之宮251  
株式会社 山田印刷所

発行所 静岡県磐田市中泉3の3,350番地  
静岡県磐田市教育委員会

